

建部綾足の研究

和学と和文体読本

紅林健志

## 目次

序章	.....	1
第一部 綾足の和学の諸相		
第一章 片歌説の完成——『とはしぐさ』考——	.....	13
第二章 『伊勢物語』研究——『旧本伊勢物語』と『古意追考』——	.....	31
第三章 歌書出版の享受——『増補歌文要語』と『新撰はし書ぶり』——	.....	54
第四章 『本朝水滸伝』の享受——改題本を端緒として——	.....	81
第二部 和文体読本の研究		
第一章 『西山物語』考——分裂する語り——	.....	103
第二章 『本朝水滸伝』考（一）——反復される主題——	.....	121
第三章 『本朝水滸伝』考（二）——二つの忠義——	.....	137
終章	.....	151
初出一覧	.....	153



## 序章

### 一 研究の対象

建部綾足。享保四年（二七一九）、陸奥弘前藩家老喜多村家に生まれる。元文三年（二七三八）に兄嫁と密通事件を起こし、郷里を出奔。以降、俳諧に志し、伊勢派の俳諧師として諸国を遍歴。俳号に、都因、吸露庵涼袋等がある。後、宝暦十三年（一七六三）に賀茂真淵に入門、俳諧を廃し片歌を唱えた。京に上り、和学者として活動、読本などの著作にも従事した。また長崎に遊学し、漢画も能くした。画譜類多数。画号は、寒葉斎、孟喬、凌岱等。安永三年（二七七四）没。享年五十六歳（一）。

本博士論文（以下、本論文）は建部綾足が賀茂真淵に入門し、和学に志した宝暦十三年以降の文芸を主な対象とする。俳諧や画業に触れるところがないのは遺憾だが、彼の和学者としての活動を総合的に扱う意図をもつて、和学者としての名を採り、「建部綾足の研究」と題した。また副題を「和学と和文体読本」とした。「和学」は一般的に、古語・古典の研究および、その成果に基づく和歌・和文の創作をさすが、本論文では、特に、古語・古典の研究をさす用語として使用している。また、片歌説なども和学の影響を受けたものとして、これに准じて扱った。「国学」、「古学」、「倭学」など類似する呼称も多いが、ひとまず現在通行の「和学」に拠った。なお、創作については別に、「和文体読本」を論ずる章をいくつか設けた。「和文体読本」とは、近世中期、和学の流行とともに行われた、擬古文で書かれた読本類をさす（2）。綾足の他、石川雅望など、狂歌師の手になる読本がこれに該当する。類似する名称として「和文体小説」「雅文体読本」「雅文体小説」等がある。本論文には「雅文」というときの雅の意識のあり方を考察の対象とする意図もあるため、雅の意識を自明のこととする「雅文」の称は避けた。また、「和文体小説」「雅文体小説」の「小説」は、出版を前提とする「読本」に対して、写本で流布した小説群、たとえば上田秋成の『春雨物語』や、荒木田麗女のお話類などを含む術語である。本論文では、これら写本の小説群との関わりについては扱わない。むしろ、曲亭馬琴の言説に留意し、読本との関連について主に論じた。そのため、「和文体読本」の称を採用している。なお、本論文で、「和文」というとき、原則、この和学の影響を受けた擬古文をさす。右の副題は、

『西山物語』（明和五年（一七六八）刊）・『本朝水滸伝』（安永二年刊、後編は未刊）両作の文芸的内実の研究を端緒とし、さらにその前提となる彼の和学のあり方へと研究をすすめていった本論文の問題意識に基づくものである。ただし、行論の都合上、論の構成は和学から、和文体読本の内実へという次第をとった。

## 二 先行研究

その後の研究史に与えた影響を考慮して、先行研究は、同時代評とその影響を中心にまとめる。

綾足は宝暦十三年に、『片歌道のはじめ』・『片歌二夜問答』の二書を著し、片歌説を世に問うた。これを批判した『華月一夜論』（鏡花坊著、明和二年刊）は（③）、

かれはもと加の希因、能の大明などが糟を乞ひ舗<sup>くら</sup>つて、これに酔ひ、いまだ蕉家の醗<sup>しる</sup>をだにも得ざるうちに、忽ち吐逆し、今は俳門を出て片歌の露を吸ひ、しばらく口腹を養ふ。口腹の為なる証拠は、おのが作れる草紙をおのが蔵板としてこれを商ふにあらずや。かゝるむさくろしき心根にて、何とて風雅の真面目を得べきと。しかれば既に異端に墮し畢れり。

と、片歌提唱を自らの著作を売らんがための行為と見る。この批判は、『こだま草』（翌々散人著、明和八年刊）でも継承され（④）、

「〔墨郭〕」が如きは、さしもなき事をふかめて愚人を驚し、己其師と成りて、世わたるたづきとせむとにや。俳諧の乗合舟には座頭もあり、目明きもあり。えしれぬあへ物売り付けば、一杯は喰もせん、畢竟、あしびきの山師事、銭になるべしとおもへず。

「(墨郭)」としたのは版本を黒く彫り残した箇所、綾足の名を明示するのを避けたもの。ここでも金儲けの具と位置づけるのは変わらない。対して、三熊花顛著、伴蒿蹊補綴の『続近世畸人伝』(寛政十年〔一七九八〕刊)は綾足の評伝を記すが、その中で、

俳諧は無用のあだ言也としりたるより止め。片歌の用られぬは、もとよりの覚悟なれば、画といふ業をたゝて、口を糊す。人は用ずとも、片歌の興起は我也、これがために俳諧といふ宝の山を出て、片うたといふ淵に身を投たり。

との綾足の言を紹介する。金儲けのためという見方を否定し、「宝の山の俳諧を捨て、片歌一道の祖といはれん事をねがひたる志、捨てがたし」とこれを好意的に受け止めている。また、同書で描かれる、

其所行はとるべき所なけれど、全体胆勇有。才抜群にして、世人を見ることはみな嬰兒のごとくなれば、物にもとせられず。さるから、為す所、いふところ虚実さだまらず。自ら人の恩義に背くことあれば、又人の吾恩に背くも心にとゞめず。亡命して僧になるかとおもへば、還俗して俳諧師になり、それも倦ては又古学を唱へ、画を業とす。生涯酔たるか醒たるかしるべからざる人也。

という綾足像は現在の研究にもいまだ強い影響力をもつ。『続近世畸人伝』は他にも、「国風の文章はもとも古雅にして、筆の鼓舞比類なし。先に俳諧せし時も、其家風の文章ども、人を絶倒せしめたれば、古言にかへてもかくのごとし」と、綾足の和文家としての技量を言挙げしている。この点も重要である。

同時代評としては、この他に曲亭馬琴の『近世物之本江戸作者部類』(天保五年〔一八三四〕成稿)が注目される。馬琴は綾足の『本朝水滸伝』をとりあげ、一方では文体の不備や、趣向の拙さを批判するものの、

唐山の名だゝる稗史を換骨奪胎して、一百条の冊子になさまくりしたる、その全豹を見ることを得ざれども、後の才子、これを見て国字の稗史を作るもの少なからずなりぬれば、今の戯作者の陳勝と称するとも過たりとすべからず。

と、『水滸伝』に基づき、長編読本を構想した歴史的意義から、読本作者の鼻祖の地位を与えている(5)。読本作者の鼻祖はいい過ぎにしろ、現在でも、綾足は、初期読本の代表的な作者の一人として、その作品は一定の評価を得ている。

近代以降の評価も、概ね、この『続近世畸人伝』と『近世物之本江戸作者部類』の二書を継承する。たとえば、保田與重郎は、

彼の描き出したものは、絵画、俳諧、紀行文、写生文、小説、物語、短歌さらに片歌と、行くとして可ならざるものがない。しかも多藝に秀でたあまり、秀抜な独走作品が少い。

として、「綾足には己の才智をもてあましたやうなところがある」と評している(6)。前掲の『続近世畸人伝』の「才抜群にして」の一節を受けての評価といえる。

俳諧研究の分野では、まとまった綾足論の早い例として、頼原退蔵「涼袋の俳歴」がある(7)。これは、片歌説を「要するに故らに新奇な説を樹てて衆愚を眩惑し、しかも片歌一派の祖と仰がれようとする名利の念が契機の大部分をなして居た」とする。『こだま草』等の論難書と、『続近世畸人伝』の評を折衷した評価といえる。しかし頼原稿は続けて、

しかし一面から考察すれば彼の片歌説も畢竟当時の我が文芸界に瀾漫して居た古典崇拜の一つのあらはれであつた。単に彼の山師的な野心と銜学癖とが生んだ個人的問題としてのみ考ふべき事ではない。即ち真淵一派の国学鼓吹に刺戟されて、時代的風潮化した古典への憧憬が、俳諧の世界にもかうした形であらはれて来たのである。その点で涼袋は最も時代の空氣に敏感であつたとも言へる。彼の奔放に過ぎて真摯さを欠いた性格が、之を健実に育てて行く事が出来なかつたけれども、蕪村といひ暁台とい

ひ、実はやはりこの古典主義の匂の中から、彼等の新しい俳諧を得て来たのであつた。かうした時代的傾向の顕現として見る時、涼袋の主張と運動とも亦俳諧史上特殊の意味をもつて考へられねばならぬ。

と、蕪村や暁台と共通する時代の傾向を見出している。片歌説を俳諧史の流れの中に位置づけた重要な指摘である。これを承け、「当時の俳壇の惰性的無氣力を破り、古代の素朴な感動への回帰を示唆する点で、形式的に過ぎたとしても、安永・天明期の俳諧復興運動の一翼としての先駆者的意義を見出すことは出来る」という大谷篤藏の見解(8)など、蕉風復興運動との関わりから、時代的な意義を評価されるようになっていった。

戦後の綾足研究最大の成果は、『建部綾足全集』全九巻の刊行である(9)。これにより、綾足の活動の全貌が見渡せるようになった。そして、全集の刊行と平行して、多くの論文が発表された。この一連の研究において、中心的な役割を果たしたのは高田衛である。高田は「亡命、そして蜂起へ向かう物語——『本朝水滸伝』を読む——」(10)において、亡命者たちの叛乱を描く『本朝水滸伝』を近世封建社会の通念を逸脱した異色の小説と位置づけた。また、それに先行する「奇談作者と夢語り——秋成・庭鐘・綾足たちの世界」(11)において、『西山物語』の回向を拒絶する女の霊に、恋愛至上主義的な側面を見出し、そこに、兄嫁との密通により故郷を逐われた綾足の経歴を重ね合わせてもいる。両論文によって、近世の社会的通念を逸脱したところに独自の作品世界を築いた、異色の作家という新たな綾足像が提示された。

また、風間誠史の研究により、和文家という側面も新たに注目されることとなった(12)。他にも諸家によりさまざまな論が提出されたが、高田衛の提示した綾足像を刷新する新しい視点は出ていない。そういう意味で、高田衛の、綾足を時代から孤立した存在として評価する立場は依然として主流といえる。確かに高田衛の描いた綾足の姿は魅力的である。ただ、これを近世という時代の中に位置づける試みは今後もなされてよい。また、高田の論は兄嫁との密通と、それに伴う出奔という伝記的な事実を、過剰に作品理解に結びつけているきらいがある。他にも、先の頼原稿にもあつたが、綾足の、時に「山師的」といわれる言行が、作品の評価に影響を及ぼしている例は先行研究にまま見られる。

### 三 本論の構成

本論文では、右の綾足研究の状況を承けて、近世社会の中に綾足の文学を位置づけることをめざした。方法としてはこれまで注目されてこなかった享受を丹念に追ったところに特色がある。また、綾足の言行から彼の作品を考えることを極力控え、作品に即した綾足像を提示することに留意した。

以下に、本論文の構成に従って、内容を略述する。

第一部では、和文体読本の前提となる綾足の和学について論じる。和文体読本は擬古文で書かれたが、擬古文で書くことにどのような意味があったのか、それは当時の文芸思潮とどのように関わるのか、その一端を彼の学問を扱うことで明らかにする。

第一章、第二章は、綾足の論著の内容から、その学問の特徴を析出する。

第一章では、従来言及の少なかった綾足の片歌論書『とはしぐさ』（明和七年刊）をとりあげ、綾足の片歌説を、賀茂真淵周辺の歌論の影響を受け、太平の御代を志向する文芸として、俳諧の改革を企図したものと位置づけた。

第二章では、綾足の和学者としての活動の中核となる『旧本伊勢物語』（明和六年刊）について、当時の万葉仮名を用いた真名本が、初学者への啓蒙的な性格をもつことから、『旧本伊勢物語』もまた旧来の真名本の不備を補う、文意のとりやすい初学者向けの新たな真名本を企図したものであることを論じた。また真淵の『伊勢物語古意』を批判した『古意追考』をとりあげ、彼の本文校訂の方法や、注釈の特徴を述べた。綾足の本文校訂は、単一の正しい本文をめざす当時の一般的な校訂の態度とは異なり、意味が成り立つのであれば、異文をも許容する立場をとる点に特色がある。また、他の注釈に比べ、作品を解釈する際、物語の道德と自身の道德とを切り離している点に特徴があるといえる。その点では、勧善懲悪的な文学観がある程度相対化できている。

第三章、第四章では、特に享受の面から綾足の和学を文学史の中に位置づける。

第三章では綾足の『歌文要語』（明和二年刊）と『はし書ぶり』（同三年刊）を増訂した、『増補歌文要語』（文化五年（一八〇八）刊）

と『新撰はし書ぶり』（文政三年（一八二〇）刊）について、その成立事情を周辺の資料や内容から追った。『歌文要語』も『はし書ぶり』も、最新の和学の学説に基づいた歌文実作の手本であり、従来にない画期的な性格をもっていた。特に和文製作の参考書としては、享和頃でもいまだ代表的な書物であった。書肆奈良屋長兵衛は、綾足の和文家として評価を待み、両書の増補改訂版の刊行を企てた。『増補歌文要語』の編者早川広海や、『新撰はし書ぶり』の編者石津亮澄には独自の思惑があり、どちらも綾足の原本を単純に継承する性格のものではないが、増補改訂版の刊行は、綾足の歌書の、実作の場から発想された、実用性の高さが評価されたものといえる。第四章では、『本朝水滸伝』の改題後修本『芳野物語』（文化六年修）に注目し、同作が『水滸伝』を翻案した読本としてよりも、和学の書として読まれていた実態を明らかにした。また、著名な曲亭馬琴の『本朝水滸伝』文体批評が、和文が衰微した頃のものであり、綾足の時代にあつては、和文はそのまま雅の意識の反映であつたことを指摘し、近世における文章観の変遷についても触れた。

第二部では、和文体読本の文芸的内実を論じた。

第一章は『西山物語』を、第二章と第三章は、『本朝水滸伝』をそれぞれ対象とする。

第一章では、『西山物語』には、予言によつて長編構成を統御しようとする方法が見られるが、結果的に破綻しており、後の後期読本のように長編構成に結構性をもたらしには至っていないことを指摘し、その長編構成の方法はいまだ発展途上であることを指摘した。また、『西山物語』には、主人公大森七郎と大森八郎の対立を軸とする「ますらを」の物語と、七郎の妹かへと八郎の息子須美の悲恋を軸とした「みやび」の物語があり、作品全体がこの二つの物語の論理が複雑に絡み合う形で構成されていることも指摘した。そして、二つの物語の論理の対立を描くところに『西山物語』の結末の特色があることを述べた。

第二章では、『本朝水滸伝』は、従来『前々太平記』（正徳五年（一七一五）刊）を典拠とするものとされてきたが、これを再検証し、『日本王代一覽』（寛文三年（一六六三）刊）の方が典拠として優位であることを指摘した。また、『本朝水滸伝』は、成り上がりを憎む落魄者たちの暗い情熱が底流をなしており、単純な反乱の物語とすべきではないことを論じた。

第三章は、従来本筋には関与らない意味のない挿話とされてきた、秦金明の死について私見を提示した。暴虐をつくす主阿曾麻呂への諫言もむなしく、悲惨な死を遂げる金明だが、この金明の挿話には、諫言という行為の無力さを語るものであり、武力による反乱の

根拠を再確認するものとしてここに置かれていることを指摘した。また、『本朝水滸伝』は大伴書持の死や、不破内親王・塩焼王の死など、情緒豊かな場面を描くところに、作者の力量を感じさせる。馬琴はこうした場面を勸懲が正しくないなどの理由で批判するが、これは後世の読本観であり、むしろ、綾足の読本は物語に学び、勸善懲惡的文学観から独立した作品世界を作っている点に特色があることを論じた。

なお、特にことわらない限り、綾足の著作は『建部綾足全集』から引用する。その際、一部、濁点や句読点等の表記を改めた。また、割注や傍訓については論旨に関わらない限り、原則として省略した。なお、論旨に関わる場合、割注は（ ）に、傍訓は（ ）に入れて表記した。ただ、傍訓の一部についてはルビで示す場合もある。その他の作品の引用についても、意味のとりやすいように、濁点・句読点等を適宜施している。

注

- (1) 『国書人名辞典』第三卷（岩波書店、一九九六年）、「建部綾足」の項等を参照した。
- (2) 和文体読本については、『時代別日本文学史事典近世編』（東京堂出版、一九九七年）の「江戸読本Ⅱ」（稲田篤信執筆）に概説されている。この稲田稿は後に、綾足と秋成に関する部分を中心に改稿され、『名分と命録 上田秋成と同時代の人々』（ペリカン社、二〇〇六年）の第一部第九章「勸善懲惡と命録——建部綾足『本朝水滸伝』と『春雨物語』の主題」となったが、ここでは初出に拠った。
- (3) 『古典俳文学大系一四 中興俳論俳文集』（集英社、一九七二年）。
- (4) 『名古屋叢書三編第一七卷 横井也有全集 中』（名古屋市教育局教育委員会、一九八三年）。
- (5) 岩波文庫、二〇一四年。



- (6) 「建部綾足」。『保田與重郎全集』第五卷（講談社、一九八六年）所収。初出は『俳句研究』昭和二十三年九月号。
- (7) 『頼原退蔵著作集』第五卷（中央公論社、一九八〇年）所収。初出は、『国語国文』第三卷二一号（一九三三年八月）。
- (8) 『日本古典文学大辞典』第一卷（岩波書店、一九八三年）、「片歌」の項。
- (9) 国書刊行会、一九八六年～一九九〇年。
- (10) 『江戸幻想文学誌』（平凡社、一九八七年）所収。初出は、『文学』第五二卷第四号（一九八四年四月）。
- (11) 前掲『江戸幻想文学誌』所収。初出は、『文学』第四三卷第六・七号（一九七五年六・七月）。原題「奇談作者と夢語（上）（下）——秋成・庭鐘・綾足をめぐって」。
- (12) 『近世和文の世界——蒿蹊・綾足・秋成』（森話社、一九九八年）。



# 第一部

## 綾足の和学の諸相



## 第一章 片歌説の完成——『とはしぐさ』考——

はじめに

明和七年（一七七〇）九月、綾足は『とはしぐさ』を刊行する。片歌説に関する論著としては、すでに、『片歌道のはじめ』（宝暦十三年（一七六三）刊）、『片歌二夜問答』（同年刊）、『百夜問答』（明和二年刊）、『百夜問答二篇』（明和四年刊）がすでに刊行されており、『とはしぐさ』はそれに次ぐ、五作目の刊行片歌論書である。一作目の『片歌道のはじめ』を除く三作がすべて、門人からの問いや、他派からの論難に答える形式で綴られていたのに対し、本書は巻頭の綾足の言に、

さて思ふに、悪しく惑はしく、其事の違ひみだれたる物ぞ、此俳諧なりける。爰に、其逆<sup>タガ</sup>ひみだれたりといふ事どもを挙て、是詠まむ人々に、博く問ひまいらするなり。

とあるように、江湖の俳人たちに問いかける形式で書かれている。全編で徹底されているわけではないが、続く「たはやぎぶりの条」は、「是まづ事においておろそかならずや」「そはまた朽惜からずや」「四方の友がきしかおぼさずや」と問いかけを多用する。照応をはかったものと思しい。文体は熱気を帯び、気魄を感じさせる。これはいわば、従来、答える側として守勢に廻っていた綾足が、問いかける側に立ち、反転攻勢をかけようとしたものといえる。その意味で、数ある綾足の片歌説の論著の中でも、彼が最も注力したものだといつてよい。

ただ、従来の研究では、この点はあまり注目されていない。問いかけの文章であることを示す、題号「とはしぐさ」を、「とはしぐさ」と誤る例が多かったのも綾足の真意が汲み取れていなかったことの反映といえる（Ⅰ）。「とはしぐさ」は、確かに独特の語形だが、『本朝水滸伝』後編、第廿七条にも、光明皇后の問いに、大伴書持が、「はじめより御心深くおぼしめされて、とはしめたもふ御こと

につきて、此御とはしごとをおしはかり奉るに」と皇后の深意を推し量る場面がある。ここでは、皇后の問いを「とはしごと」とする。同様の用法である。綾足独特の表現だが、「とはしぐさ」と澄むのは、用例から見ても間違いない。

また、先行研究において、この『とはしぐさ』は、先の『片歌道のはじめ』、『片歌百夜問答』、『百夜問答二篇』などに比べて、言及される機会がきわめて少なかった。これは、同書の内容が片歌の理念に傾き、実作との関係に触れる部分が乏しいためであろう。また、俳諧に対して、過度の中傷に及んでいる箇所も散見される。そのため、生産性の低い議論として、敬遠されてきた面もある。本章では、『とはしぐさ』を綾足の片歌説の到達点を示す書物として、その意義を論ずる。特に、これまでいわれてきた、和学の影響の問題を精査し、片歌説を当時の文芸思潮の一類型として位置づける。また、その上で、『とはしぐさ』の回答を紹介し、片歌説の享受についても概括する。

## 一 『とはしぐさ』概要

それまでの片歌論が、門人や論難への回答という形式上の要請から、具体的な問題に即した各論的な趣があるのに対して、『とはしぐさ』は総論的である。まず、その内容を略述する。上巻十条、下巻十一条、これに鏡花坊の『華月一夜論』（明和二年刊）に反駁した一条を付す。各条の分量は均一ではない。なお、各条の内容を説明するにあたって、便宜的に番号を付した。

まず、自序にあたる「四方の国中にたはやぎぶりの片歌よみ給ふ人々に向ひて、やつがれ綾足おもふむねをまうす」で本書執筆の動機を示す。

冒頭「1俳諧ぶりの条并自あげつらふ」は本書一編の主題を説いたもの。片歌説の要諦である。件の短詩を「俳諧」と呼ぶことは歴史的に見て正しくないことをいい、また、俳諧が太平の御代の文芸としてふさわしくないこと主張する。問いかけはこの箇所集中する。

次の「2片歌の条」以下、「3上代の片歌」「4中世の片歌」「5万葉集の歌をもて片歌をあかす条」では、範とすべき片歌を記紀万

葉と拾遺・金葉の両勅撰集から例示する。

続いて「6発句といふ条」「7続歌の事并韻字どめてふ事をあげつらふ」「8切字てふ事助語の事并能順ばせを対話」「9俳諧より多くは聞得ずてふ事をあげつらふ并近頃の片歌」「10体用の事をわきまふる条」「11季方といふ事をあげつらふ并言の葉の実を論」までは、俳諧の用語等について、歴史的な根拠をもたないことを批判し、表現上の諸問題を論ずる。

対して、「12学の事」「13歌の学と俳諧のまなびと其けぢめをあげつらふ条」「14俳諧の家てふ事をあげつらふ」「15道の事」「16ころざしをあげつらふ」では、表現の問題を離れ、俳諧に専心することの愚を述べ立てる。これは、「俳諧の益は俗語を正すなり」（土芳編『三冊子』）との一節（2）をはじめとする、俳諧の益を論じた議論に反論を試みたもの。残りの「17文の事并仮名づかひの事」では、現行の俳文のあり方を批判し、仮名遣いにも言及する。それを端緒に、以下の「18学なうして言の葉をたのしむ事」「19言語をあげつらふ条」「20平話の古例」「21字音の古例」では、古語を学ぶことを、その意義まで含めて語り、最後に、「おのれ綾足かくまで申す。四方のたはやぎ人、此答へなからむや」と再び問いかけの体で一書を終わる。

## 二 『とはしぐさ』の達成

以上、『とはしぐさ』の概略を述べた。本節では、先行する論著と『とはしぐさ』の主張との差異から、その議論の要諦をまとめる。まず、「1俳諧ぶりの条并自あげつらふ」で、片歌提唱の根拠をはじめて明確に述べたことが注目される。従来、虚実織り交ぜた紀行『片歌道のはじめ』の楫取景良（魚彦）序の「くだれる世のよこなまれることをば、三篇なす刈そけつゝ、此片歌を科坂として、高き嶺にも登得べきことを、をさく教へむとなん」の一文や、あるいは、同書の本文中、

世の人あしき詞をこのみてへコレハ俳諧附合ナド也深く其道にまどひ落ぬるは、我こよひくらき道にいりていでむ所を失へるが

ごとし。君さきに片歌よみて、我道のひとつをひらき給ふ。其火のひかりを得たるがごとし。

と、道のたとえで象徴的に語られたように、くだれる世の、「あしき」言葉である俳諧を、正しき歌道に回帰させることを、片歌説の目的として述べていた。そして、何を「あしき」とするかといえば、『片歌二夜問答』では、

○輪問　これより古によりて事を正さむとす。奈何がすべき。

○綾答　其許は片歌をこのむ人なれば、片歌をよまむにはしかず。其故は、其事を正し読ゆゑに、みづから其事の正しきをしる。たとへば花の春といふ片歌よまむに、花の春はそも何の事ぞと正し、ゆく年とつかふは又出所ありやと正す。そが中に今の片歌は言を上つ世にもとり、中つ世にもならひ、また今やうの事も混ぜれば、其混じたる弁別をしる。是此を正し知るといはむ。今までの俳諧、其事を正さず。今より其源を正すに及では、今古の事、皆審に別たん。蓋短歌より正さむとするも又片歌より正さむとするも、其至る所は一ならん。

門人素輪の問いに対し、俳諧の言葉の典拠を古代に求め、また、形式等も含めて古代に範を仰ぎ、改めるべきと答えている。古代の言葉または古代の形式に則っているか否か。これが「あしき」／「正しき」を分かつ。しかし、なぜ、古代に範を仰ぐのか、その根拠はこれまでの片歌論著では語られなかった。それに対し、『とはしぐさ』では、範を仰ぐ根拠が詳細に述べられる。

懸まくも恐れれど、天の限は弥重雲の向伏きはみ、地のかぎり(ママ)は谷くゞの狭渡るはて迄も、大御光のいきたらはしけるより、人なほく猷猛からず、草木も動かず、波風もをさまれる御代なればなりける。斯までに貴き御代に住めば、せめて言の葉を宗とするものは、少しだもまがれるを捨て、直なる道に入らしめむ事を欲せざらむや。



と「まがれる」俳諧が、太平の御代の文芸としてふさわしくないことを言挙げする。「まがれる」はここでは、技巧的で屈曲した表現の句を批判したもの。こうした議論は、たとえば、田安宗武『歌体約言』（延享三年（一七四六）成立）自序（3）に、

貫之が古今和歌の序に、「和歌は人の心を種としてよろづの言葉とぞなれりける」と書けるにぞ、うたの源のことわりは尽きてぞおぼえ侍る。されば古き世の歌は誠に心よりいでたと見えて、その時のありさまもいま見るやうにぞ覚ゆる。かつ世の盛なりけるほどは歌のさまもまた盛なりける。古今集えらばれし頃よりは、少しく浅はかなるものいできにけり。

と、「世の盛なりけるほどは歌のさまもまた盛なりける」と御代と歌との照応を述べる。宗武はそのまま、

それより後、寛弘の頃よりは、まして世のなか乱れぬべき兆の、著るく知られるほどなれば、歌の風も衰ふる国の色見えて、心にもあらぬことをよみいだせし多し。たまさかには我心よりいでたと見ゆるもあれど、心うすくあさはかなめり。

世の乱れに従い、歌も乱れ、真情のこもらないものとなつたと批判する。その後中世に至り、さらに歌は衰えたという。しかし、

その後、世もますます乱れてあさましかりけるに、我君の遠つ御おやの御神、世の中を治めさせ給ひて、四つの海の波たゞず、民も戸ざしを忘れて、まことに世の勢も古にかへりけり。されどいかなるにか、歌のみ乱れたる世のまゝなる風なるぞなげかしき。

徳川家康により太平の御代が訪れ、それを契機として歌も古に還るべきと提言する。なぜならば、

然れども世の中みな後の風をもてあそぶ。ひとりこれに異なるはまたくあやしきを好むにあらず。彼の後の風こそ古をかへて人

の耳を新にすめれば、これぞ此のあやしきを好むてふものにして、君子のにくめるわざなり。えもやむごとくなくして、ひとり古の風をまなぶのみ。

今の歌は、古の風をみだりに変えたものであり、これを好むのは君子の為すところでないというのである。宗武の発言は、和歌を俳諧（片歌）に置き換えれば、綾足の片歌説の内容と論理的に変わるところがない。また掛斐高「江戸派の揺籃——加藤枝直と賀茂真淵——」（4）は、『歌の姿古へ今をあげつらふ詞』（元文二年（一七三七）成立）をもとに加藤枝直の歌論をまとめているが、和歌史の把握および、亡国の風を排し、太平の御代に適う詠みぶりを志向する点で枝直の歌論と宗武の歌論は相似形をなす。ただし、最終的に『万葉集』ではなく『古今集』の詠みぶりを称揚する点で枝直の歌論は宗武と相違する部分もある。

宗武と枝直は、ともに綾足が師事した真淵周辺の武家歌人である。ここから、太平の御代に適う和歌という考えが、当時、賀茂真淵周辺の武家歌人の間で共有されていた文学観であったと認めてよいであろう。歌論の中で開陳されているだけに、宗武や枝直の議論は対象を和歌に限定しているが、太平の御代に適う文学を志向する態度を、特に和歌のみに限定する必要はない。やや時代は下るが、『南畝集』第十六冊所収の文化四年（一八〇七）の詩（5）、

読稗史有感

稗史を読みて感有り

氣象心須楽太平

氣象心に須べからく太平を楽しむべし

近来稗史若為情

近来の稗史若<sup>いか</sup>為なる情ぞ

儻非讐敵模糊血

儻し讐敵模糊の血にあらずんば

尽是紅愁緑慘声

尽く是れ紅愁緑慘の声

これは、具体的には、当時の山東京伝および曲亭馬琴の読本のあり方を批判するものだが、そこで用いられる論理も「太平」の世と文学との照応を求めるものである。太平の御代との照応を文学に求めるのは、当時の文学観の一類型といえる。『とはしぐさ』の議論の根拠は、このような当時通行の文学観の一つに求められる。

先に述べたとおり、これ以前の片歌論では、ここまで整然と片歌説の根拠が語られることはなかった。ここに『とはしぐさ』の達成があるといつてよい。

では、綾足が志向した太平の御代に適う片歌とは、はたしてどのようなものであつたか。かつて田中善信は「綾足の片歌について」(6)の中で、『草枕』(明和三年序)の中で綾足が、「問ふやとぞ我も待つる春の日を」以下、『拾遺集』および『金葉集』に載る短連句の長句を、「中世の短歌の片歌」の例として挙げたことを承け、

すでに述べたように、片歌と俳諧は何ら異なるものではないというのが綾足の主張であり、『片歌東風俗』は、数句の旋頭歌の片歌を除けば従来の発句集と全く選ぶところがなかった。だが、右に挙げた連歌の長句のほとんどが発句の体をなしていない。季題と切字という発句の基本的な条件からみてすでに発句たるの資格を失っているものもあるが、それ以前に調べの上で俳諧の発句と著しく異なっている。綾足はここに自分が唱えた片歌の進むべき方向を見出したようである。すなわち従来の発句とは異なつた調べをもち、平明な中に雅味のある作風を庶幾するようになって、みずからの片歌論そのものから逸脱していくことになる。ここにおいて綾足は従来の俳諧とは異なつた独自の文芸を形成したといつてよからう。

と、綾足の片歌の最終的な形を「平明な中に雅味のある作風」と規定する。卓見である。片歌説の研究史において最もすぐれた指摘といつてよい。ただ、田中稿は『とはしぐさ』も、『二夜問答』『百夜問答』と主張するところは同じであり、この自らの庶幾する作風について綾足自身が論著で言及することはなかったとする。確かに系統立てて明言されることはなかったが、この田中稿の指摘に対応する記述は、『とはしぐさ』の中にも見てとれる。

まず、「8切字てふ事助語の事并能順ばせを對話」の中で、切字を否定する。

切字と謂ふ事こそ、ことに意得ね。言の葉もと文字の事にあらず。そがうへに、此きれ彼きれ、或は二きだに切し、三きだにきりしなどいふ事あり。おのれ若かりし時、是等の事はなごりなく伝へうけたりしが、ひとつだも言の葉のをしへにはなき事にて、彼のおそきよりおそきにつたへて、いとまぎらはしき事どもなり。

田中稿が指摘する通り、切字は発句の要件の一つである。原則として、これがないければ発句にはならない。「切字なくては発句の姿にあらず、付句の体なり」との芭蕉の言（『三冊子』）もある。綾足は『片歌二夜問答』以来、二句までの連句（「続句」という）は許容されるが、歌仙等、三句以上のものについては古代にないものとして否定する。連句を否定する以上、発句と付句を区別するものとしての切字は、必須のものではない。むしろ、切字によつて一句の先後関係が逆転する例なども多く、綾足が批判した「まがれる」俳諧いわば、技巧的で屈曲した表現の温床として、望ましいものではなかったであろう。切字を排除することによつて、おのずと、単線的で平明な句となる。

また、「10体用の事をわきまふる条」では、「田うち」、「畑うち」、「麦まき」、「雨降り」などの動詞を名詞化させた語の使用を、「ひなぶりたるさま」として戒め、「田うつ」、「畑うつ」、また間に「を」や「の」を入れて用言として使うようにいう。この決まりにより、俳諧とはかなり調べの異なつた句となる。この二点の指摘を意識するだけでも、綾足が『とはしぐさ』中に佳作として取り上げた門人たちの片歌、

雁がねを往くとやいはむ帰るとやいはむ  
しぐるればひと日くにもみぢつゝ

潮さゝに浦風きほひたづの鳴く  
園荒れてむかししのぶの草は生し  
今見よと朝がほの花の咲にけり  
此岡は朝日ゆふ日にうぐひすの鳴  
夕なぎの霞めるまゝにおぼろ月  
桃のはなつゝじあせみのうへに咲く  
ほろ／＼と雨降おちておぼろづき  
ほとゝぎす啼て雲よりくもに入る  
秋もはやときあらひ衣うつころぞ  
ひとりゐて我うつ衣いとさむし  
こと木より柳がもとの雪ふかし

これらの調べにかなり近づく。

また、こうした技法上の問題だけではなく、「18学なうして言の葉をたのしむ事」では、『拾遺和歌集』の村上天皇御製の長句「小夜更けて今はねぶたくなりけり」を、「かくなほなる心を、直にいひ出すこそ歌なれ」と激賞して、

歌はしひて学ぶにも及ばず。唯春のうぐひすの花にさへづり、秋の蟬の樹にうたふがごと、おのが心のまに／＼よろづの事を直に  
よまむとし給はゞ、まさに言霊のたすけあらむとおもふなりけり。

内容としての平明さを庶幾する立場もかように見てとれる。かくして片歌説はここに完成を見る。

しかし、綾足の内奥には、逡巡もあつた。

やつがれはいはく、其はじめ俳諧ぶりよみし時は、その友がきいとよしとて、愛ける歌おほかりき。今みればさる中には、とゝのひたるはひとくさも侍らず。さりとて、今よめるは、友がらのも吾のものをかしとは聞給ふまじ。されど今の歌に、ことばとゝのはず、つゞけ柄みだれたりといふ歌はひとくさもはべらず。

自身の句を顧みて、片歌提唱以前のは好評をもって同志に迎えられたが、言葉は整っていないかった。対して、今の自身の片歌を、「をかし」と思う者はいないであろうが、言葉の続きは、今の方がはるかにすぐれるという。いわば、自らの提唱する片歌が、詩としての興趣において俳諧に及ばないことを率直に認めたものといえる。詩の興趣をとるか、言葉の正しきをとるか、その逡巡の中で、綾足は言葉の正しきを選んだ。捨てたものの大きさも綾足自身、了解した上のことである。

以上、行論の都合上、言及できなかった章段も多いが、『とはしぐさ』の議論の要諦は確認しえたものと思う。では、この問いかけは、どのように迎えられたのであろうか。以下に見てゆく。

### 三 『とはしぐさ』の反響

『とはしぐさ』の問いかけを承け、いくつか回答というべきものが出されたので、確認しておく。ただ、それぞれの回答の主張するところは多岐に渡るため、前節までの内容に関連する部分のみをここではとりあげる。

回答として最も著名なものは、翌々散人の『こだま草』（明和八年刊）であろう。著者の翌々散人は、横井也有の変名。末尾に、

題号を『とはし草』といひ、いかようにも此答せよと巻の始にも書て、世上の俳諧する者に対して云故に、とし給、かくし給へと

うるさき会釈の詞あれ共、予は其答にはあらず。問ふ人ある故に聊思ふ所を書迄なり。山に心なし、呼べば響くこだまの如し。さればおとなげなく渠を罵るとにはあらねど、をのづから詞の不遜に似たるは此故なり。

とあるように(7)、綾足の問いに正面から答えたというよりは、軽くあしらったとでも形容する方が近い。その批判の内容を見れば、都而此人の俳諧を論ずる事、俳諧といふ物、何故に興じて楽しむ事ぞといふ根の合点ゆかぬと見えたり。連歌といふ事始りたるより其法にならひて、今日世上平生通俗の事を其俣の辞に云ひて、俗間にあらゆる姿情を句に作り興とする為にてあり。かつて古代を学び和歌に習ふ事にてはなし。ひなびたるは俳諧のもとよりなり。

綾足は、片歌、短連句、連歌、俳諧の連続性を強調し、片歌に還るべきとしたが、対して『こだま草』は俳諧を連歌の「法にならひて」、「俗間のあらゆる姿情を句に作り興とする」ものと規定する。連歌の作法を借りるが、本質は全く別の文芸であるとの主張である。俳諧を片歌史の中のひとつの風潮とみなす綾足と議論の背景が違いすぎる。これでは相容れるわけがない。また、

抑和歌の事は世々の帝に琢磨有て、和歌の風体調ひ定り上古の風に勝る事いふ迄もなし。それより連歌といふ物始り又俳諧は連歌の中より起れり。是古へをもどき道を変ずるにあらず。和歌は和歌と云、連歌は連歌と別れて立り。さら／＼昔によるにはあらず。俳諧猶新に開きたる翫び也。彼を以て是を妨げず、是を以て彼を忌まず。

綾足の論のそもその立脚点が真淵周辺の歌論に求められることは前述した。しかし、『こだま草』は和歌の風体は「世々の帝に琢磨有て」整定まったものとする。上古の風を理想とする真淵や宗武の歌論とは相違する考えである。綾足と『こだま草』は、このように前提となる文学史についての把握も共有できておらず、もはや論争の体をなしていない。確かに『こだま草』の議論は俳諧の本質を

端的にとらえ、現在にもそのまま通じる説得力をもつすぐれたものである。しかし、これのみから、『とはしぐさ』の享受を考えるのは危険であろう。他の回答についても併せて参照する必要がある。

次に、麦水の『とはしぐさこたへ』について触れる。明和七年十二月序、写本で伝わる。いま、麦水自筆とされる早稲田大学図書館中村俊定文庫蔵本(8)によって、その内容を示す。『とはしぐさ』の本文を平仮名にて写し、一段下げて、片仮名で自説を記す。『とはしぐさ』の「8切字てふ事助語の事并能順ばせを対話」は、小松の能順と芭蕉の邂逅の挿話。能順の句を芭蕉が誤って記憶していたことで不興を買ったとの内容を伝える。これが、麦水の知る芭蕉と能順の邂逅とは大分趣を異にしたらしい。そこで、「一夜俄二筆ヲ添」え、この書が成ったという。しかし、能順の挿話の件を除けば、麦水のいうところは、『こだま草』に比してはるかに綾足に理解がある。たとえば、「1たはやぎぶりの条并自あげつらふ」の太平の御代にふさわしい文芸として「まがれる」俳諧を片歌に改めるべきとする綾足に対して、麦水の立場は、

此条ノ文章、甚ダ雅也。誠ニ賞愛スベシ綾足ナル哉。而シテ、議論ニ到ツテ、拙キ事イカニゾヤ。子ノ云所ニシテハ、御代ノ貴キ事ハ久シ、曲レルモノハキノフ迄アリシト云ニ似タリ。芦間ノ蟹ノ横モ又正道ナレバ、唯形ノ直曲ヲ捨テ、心ノミノ雅不雅ヲ論ジ給江。

綾足は俳諧を「まがれる」言葉と批判したが、治まれる御代にあつても蟹が横歩きをやめないように、外形の「まがれる」さまのみ批判するのは本質的ではないとする。さらに、綾足が、同じ条に、『続日本後紀』嘉祥二年三月二十六日の、長歌が衰退し、今は僧達の間で歌われるのみとして、「今至僧中頗存古語」とある箇所を引き、江戸の現在では、「古語」についてなおさら成り下れる状況だとし、「道ある御代のしるしにぞ、やつがれらがたぐひまでも、かく正しく貴き例によらむ事をおもひ起す時也ける。四方の友がきしかおぼさずや」という綾足の問いに、



実、左思フ事也。我如キノ陋キ者モ、文字ノ道ニ交ルハ君ノ御陰也。去ニハ似タレドモ、併シ文中ニ、仁明帝文学僧徒ニ落シヲナゲキ給フヨリ、今ニシテハ猶スラニ侍ラントノ議論ハアタラズ。其ゴトクニ仮令セバ、今ハ鳥獸や文学セン。依テ文学野ニ落ンヤ上ミニアガラシヤハ、子ガ知ル所ニアラズ。盛衰ノ論ハ別ニ高眼ノ人有ツテ知ラン。其上、道アル御代ノ印ニゾヤツガレト云出ルハ尊大ナリ。

道の上下は、具眼の士が定めるもの。自分たちの知るところではないとする。また、一介の俳諧師が自ら道ある御代と断ずるのは、尊大ではないかと批判する。ただ、こちらは『こだま草』と違い、同じ文学観を共有している部分があり、論争の体を保っている。さらに、「2片歌の条」でも、上代の片歌を、言葉のつづき正しく、心の直きものとして称揚する綾足に対して、

今、子ガ述ル如ク、ノビラニミヤビナルハ上代ノ片歌也ト誰モ左思ヘリ。是ニ依テ芭蕉翁、モト爰ヲシトフ。故ニ今ノ蕉門ニ暫ク古調ノ名アリ。然レドモ衆人古調ノ源ヲ不知。半バヨリ捨テ下リテ又卑風ノ俳徒トナル者多シ。誠ニ悲シムベシ

と、かなり接近した立場をとる。結局のところ、芭蕉を譏る綾足の態度を批判し、また細部の議論では対立するものの、同じ俳諧の改革を企図するものとして、方法的な違いはあれ、共感する部分も多いということのようである。麦水はこの後、俳論『蕉門一夜口授』（安永二年（一七七三）刊）を著し、ここでも片歌説に言及するが、「綾足蕉翁を不知、混じて俳諧を譏る。定めて其いはれあるべし。予も俗俳を顧みれば其そしりなきにあらず」（9）と、ここでも同意できる部分はあるとする。ただし、

かた歌と名づくるが為に詩の如き句に遊ぶ事あたはず。蕉門には何とも名づけざるが為に詩の如き句もあり。万葉体の句もあり。俳言を入ざるはもとより也。種々に流行して遊びを放ホシイマ、にす。片歌の歌にばかりくまよりたるとくらべば、いづれ。

と、片歌が和歌のみを範とすることを、表現として貧しいと批判する。これも的確な指摘であろう。とはいえ、根本の問題意識は両者ともに重なり合う。片歌説が時代に即した議論であり、ある程度受け容れられる土壌があったことを示すものといえる。

最後に、韓国国立中央図書館所蔵の『とはしぐさ』に施された書入れについて言及したい<sup>(10)</sup>。書入れには「成祇云」とある。この成祇なる人物については、国文学研究資料館古典籍総合目録データベースに拠れば、『小づくる集』『文久二年句合六十五番』の二点の著作が確認できる。『小づくる集』は成祇の宗匠立机の時の俳書。その序に拠れば、

泉あり。其水、淡して且五味をかねたり。此泉や彼弭をもて巖をうがち、木をまろばしてあめつちにいのりし和漢奇泉の類ひにあらず。只主じの居する所に応じてわく。されば、其辺りに机を立、四時の学樹を植て甘泉亭と号す。楽しきかな。涌泉する広がれども、ひぢりこを交へず、塵埃をいれず。且朝暮是を掬に鳥獣なれしたがひてむ。

天保甲辰 花守岱年

とあり、京のいずれかの清水のほとりに居を構えていたと思しい。また同書収載の露赤発句の前書に、

から倭の古今をうかゞふに、詩あり、歌あり、また俳諧有り。こゝに伊東うじは、その俳諧の真に遊ぶ事、としありてこたび机をなん立らるゝ。そはいさぎよき功なりけらし。我も人も、ともに紙墨にむかひて、いさゝか賀を述るになん、

涌たちて玉ちる程の清水かな 露赤

「伊東うじ」とあるのに拠れば伊東氏か。一方の『文久二年句合六十五番』は、国文学研究資料館蔵の写本。成祇は判者を務める。筆跡が当該の書入れと酷似する。ともに成祇自筆とすべきか。なお、書入れには「慶応の今時に至りても」とあり、慶応年間に施された

ものと思しい。また、同書の裏見返しには書入れとは別筆で「喜随庵／楽々山人」と墨書される。旧蔵者であろう。書入れは詳細で、これも『とはしぐさ』の問いに答える意図で書かれたものといえる。ただ、書入れの性質上、内容は、やや細部への異論に偏向する。以下に数例を取り上げる。綾足が東奔西走し、俳諧に勤しみ、結果「悪しく惑はしく、其事の違ひみだれたる物ぞ、此俳諧なりける」との考えに至ったとの0序の部分の本文を承け、

成祇云、此条、綾足が西東走走して風交するとき、みだりがはしきことのみなりしならん、さるを悪しく惑はしく其事の違ひ乱れたるは俳諧なり、といふは一時、交り人の乱れにてさらに俳諧の罪にはあらじ。歌すら時代によりて、よみ方道にかなはず、此の道陵易すと歎き給ひし世もありしぞかし。慶応の今時に至りても、乱りがはしきよみかたの人も多し。さりとて、悉其事のちがひし人のみならんや。見の広からぬ故にぞあらん。

綾足が時代の問題として見ていたことを、成祇書入れは、綾足の出逢った人物がたまたま心底止しからぬ人物であったのだと、個々人の問題に還元する。

時ありて栄へ時ありて衰ふは世のさま也。俳諧の片歌、時勢こもぐなり。一時の陵遅をもて其道をそしるは綾足のとる処たがふなり。

ともいい、歌道の浮沈を時代と積極的に関連づける立場はとらない。情勢の不安定な、幕末の時局のさなかであれば、太平の御代を志向する文学観は、往時ほどの有効性をもたなかったであろう。確かに時代が変われば、問題意識の共有など望むべくもない。他、成祇書入れは、基本的に綾足の議論の不備を指摘し、批判的な態度をとる場合が多いが、たとえば、「12学の事」において、綾足が「俳諧

を学ぶ」ことを批判し、源流をたどれば古語の学であり、そこに遡って学ぶべきというのに対し、

此条、其源をきはむるは、いはでも也。誰か歌の道を学ばざるものあらん。されど、中には俗談平話も捨すとあるにより、皇国の史、歌学などはいらぬ事にする人、元禄年間より今に及びて多くあり。しかれども、その一派にして世上一般にはあらず。我党、いにしへに浜りて皇国ぶりを学ぶを詮とし、さて俳諧の、はいかいたることを心得る也。されば俳諧の片歌、同じく連歌をよむものゝ中には俳諧を学ぶといふこと云々と書べき也。

と、歌学や国史を学ぶべきとの綾足の見解に同意している。成祇は俳諧の源流が片歌にあることを認めているようである。書入れでも特に俳諧をさして「俳諧の片歌」と呼ぶことに抵抗はないものと見える。このように、基本的に和学を学ぶべきとの主張については同意するが、一方では、綾足が和学の知識を披瀝し議論をすすめていくのを「綾足の言葉を待たぬ」と、常識として退ける場合も多い。成祇書入れは、俳諧と和学が綾足の往時よりはるかに接近したことを物語るものといえる。この点については、綾足の出した方向性はある程度受け容れられたという見方も可能であろう(11)。

従来、『こたま章』の議論から、片歌説の享受を考える例が多かったが、『とはしぐさこたへ』や成祇書入れなどを見るに、細部の議論は批判されるものの、綾足の展開した議論が、全般的なものであったとはいえない。

おわりに

以上、『とはしぐさ』とその反響を中心に片歌説についての私見を述べた。一見、奇矯に見える片歌説も、依拠する歌論は当時通行のもの。また、それを俳諧に援用するにあたって前提とした俳諧史の把握も、当時、連歌の世界で行われていたものと特に目立った違いはない。俳諧に真淵周辺の歌論を援用したことを奇異に見るむきもあるかもしれないが、芭蕉しかり(12)、あるいは蝶夢と小沢蘆庵

の例など(13)、時の歌論と俳論との同調は、至極当然のことといえる。こうした立場から見れば、近世中期の俳諧の改革運動として、片歌説の登場それ自体に奇矯なところは見られない。また、論理的にも大きな破綻はないように思われる。では、なぜ片歌説は受け入れられないまま潰えたのか。俳諧や芭蕉を悪し様に罵る綾足の言行が、多く反感を買ったこと、また、和歌と違い、地方によりかなり分派がすすんでいた俳諧では、綾足の議論がかみ合うのは難しかったことなど、理由は様々であろうが、やはり俳諧の、詩としての興趣を否定するところまで踏み込んでしまったこと、また、真淵が当時の和歌の表現に新しい展開をもたらしたようには、綾足の片歌が、新しい表現をもたらせなかったことが、多くの人々を片歌説につまずかせたのであろう。

以上、『とはしぐさ』の内容と意義について稿者なりのまとめを試みた。『とはしぐさ』は片歌説の意義を述べた書としては最も整備された内容をもつ。冒頭でも触れたように、それまでの答える形式から、問いかける形式に転じたのは、綾足の気魄を示すものである。これ以後、綾足は直接片歌説の論著に手をそめることはない。それは『とはしぐさ』にかけた熱意のほどを物語る。まさに乾坤一擲の一書というべきものである。

このように、『とはしぐさ』の議論を位置づけることで、『続近世畸人伝』の以下の記述(14)、

此風を起して後いへらく、「俳諧は無用のあだ言也としりたるより止ぬ。片歌の用いられぬはもとよりの覚悟なれば、画といふ業をたてゝ口を糊す。人は用ずとも片歌の興起は我也、これがために俳諧といふ宝の山を出て、片うたといふ淵に身を投たり」と。つひに伊勢の能褒野、彼日本武尊薨じ給へるあとに石碑を建、また華山院右府公(常雅)に請て、片歌道守といふ四字を書いて賜りしを、梁上に掲て、「万ともしく心のまゝならぬ時は、これをあふぎて憂を遣」といへり。

「片歌道守」の扁額をながめて憂いを遣る綾足の姿も、また、一層の共感をもつて読まれるのではないか。

- (1) 『古典俳文学大系一四 中興俳論俳文集』(集英社、一九七二年)の翻刻など。
- (2) 『新編日本古典文学全集八八 連歌論集 能楽論集 俳論集』(小学館、二〇〇一年)。以下同。
- (3) 『日本歌学大系』第七卷(風間書房、一九七二年)。
- (4) 初出は、『文学』第五〇巻第二号・三号(一九八二年二・三月)、『江戸詩歌論』(汲古書院、一九九八年)所収。
- (5) 『大田南畝全集』第五卷(岩波書店、一九八七年)所収。同巻の解説(日野龍夫執筆)および、『読本事典』(笠間書院、二〇〇八年)カバー写真解説(大高洋司執筆)にこの詩への言及がある。
- (6) 『近世文芸研究と評論』第二〇号(一九八二年六月)。
- (7) 『名古屋叢書三編第一七巻 横井也有全集中』(名古屋市教育局教育委員会、一九八三年)。なお、同全集は「とはし草」をすべて「とはじ草」とするため、引用に際して改めた。版本に濁点はない。
- (8) 『とはしきこたへ』、半紙本二巻合一冊、文庫一八―四六〇。
- (9) 『古典俳文学大系一四 中興俳論俳文集』(前掲)所収。
- (10) 古五―五四―八〇。
- (11) 近世後期の資料では、発句を片歌と呼ぶ例もある。管見の範囲では、八戸市立図書館蔵『片歌草稿』(仙二―一〇三)や、岩崎美春『月の瀬日記』(二戸渉「江戸末期文人の大和月瀬梅見紀行」、創る・訪ねる・見る―文化創成の場としての名所研究プロジェクト論集、二〇〇七年二月)など。これらの資料は綾足と直接の関連はない。
- (12) 上野洋三『元禄和歌史の基礎構築』(岩波書店、二〇〇三年)Ⅲ―第3章「歌論と俳論」など。
- (13) 田中道雄「発句は自己の楽しみ」(『文学』隔月刊第一五巻二五号、二〇一四年九月)、同『蕉風復興運動と蕪村』(岩波書店、二〇〇〇年)第七章「思いやる心 (想像)の発達―二元的な主客の合一―」。
- (14) 『続近世畸人伝』(中公クラシックス、二〇〇六年)。

## 第二章 『伊勢物語』研究——『旧本伊勢物語』と『古意追考』——

はじめに

綾足の『伊勢物語』研究について稲田篤信は、「綾足に即すれば、明和四年に上落して以降、京都で国学者として活動した際の中心的なテーマの一つが勢語研究であつた」とする(1)。しかし、綾足の和学者(国学者)としての活動の中核にもかかわらず、ここから彼の和学者としてのあり方の、総合的な把握をめざした研究はほとんどない。むしろ、稲田が、本居宣長や伴蒿蹊、また谷川士清らの『旧本伊勢物語』についての言及を引き(後述)、「同時代の批評は綾足の意欲に反して、まことに厳しいといわねばならない」とし(2)、また、熊本大学国文学研究室所蔵の綾足の講釈を書入れた『真名伊勢物語』(3)を研究した長谷川強が、綾足を『伊勢物語』研究者として二流の感はやはり免れぬが」と評するなど(4)、厳しい評価が目立つ。先学のこうした評価を、稿者としても否定するわけではないが、彼の和学の中核として、やはり綾足に即した理解は必要と考える。そこで、本章では『旧本伊勢物語』(明和六年〈二七六九〉刊、以下旧本とも)と『古意追考』の二つの著作を中心に、綾足の『伊勢物語』研究の特徴について述べる。

### 一 『旧本伊勢物語』の評価

『旧本伊勢物語』は明和六年刊。上下二冊に「伊勢物語考異」を付した三冊本。版元は風月荘左衛門。この後、『女誠ひとへ衣』(明和八年刊)、『建氏画苑』(安永四年〈二七七五〉刊)等の綾足の著作を刊行する、綾足とは昵懇の書肆である。風月荘左衛門の日記、『日曆』の明和九年から安永二年にかけての記事にも綾足が登場する(5)。また、風月は、従来の六条宮撰『真名本伊勢物語』(寛永二十年〈一六四三〉刊、以下六条本とも)の版元であつた。

この『旧本伊勢物語』について、同書の金龍敬雄序は、

勢語、古書なり。其の世に行われること久しく、而して未だ曾つて其の撰する人のこと詳らかならず。蓋し天曆以後、好事の士の述ぶる所ならん。原本楷字、後、諸兒女に施さんと欲し、国字を以て写す。是に於て疑ふらくは誤れること多し。今坊間の数本、互に異同有り。吾誰に適從せんや。余の方外の友、東都綾太理、古学に篤く、国雅を善くす。嘗つて遺失したる旧聞を訪はんと、二酉陳編を搜索す。乃ち斯の写本を獲る。闕け誤れること有りといえども、而して諸坊間国字書に較ぶるに、文義精確なり。珍しきに之れ十襲すること啻だそのみならずや（原漢文）。

「二酉」は始皇帝の焚書坑儒をのがれた人が、大酉・小酉という二山の石窟に隠れて書物を蔵したところから、書籍を多く蔵する所をさし、「陳編」は古い書物をいう。また、「十襲」は、十重にかさねつつんで大切に秘蔵すること。綾足（綾太理）が「二酉」に「陳編」を搜索し、この『旧本伊勢物語』の原本を得たと述べる。それを秘蔵するのみでなく、新たに出版を意図したのだという。綾足自身も、「伊勢物語考異」の凡例で「こたび新に彫れる冊子は旧本とて人のもてりし物なり」と語っている。

しかし、これについては、本居宣長が『玉勝間』の中で、用字から「まことのふるき本にはあらず、やがて出せる人のみづからのしわざにぞ有ける」とし（6）、谷川士清も『旧本伊勢物語考』の中で、第九段の「かきつばたといふ五文字を句の上にすへて、旅の心をよめ」のところを、『旧本伊勢物語』が「五文字」ではなく、「五言」とする箇所をとりあげて、

異本ニ、五文字ヲ句ノ上ニ、六条本・古今集ニモ五文字トアリ。今五言ト云モノ、偽作ノ証也。時代ヲ弁ヘヌナマ古学者ノシワザナル知ルベシ。

と同様の見解を示す（7）。また伴蒿蹊も『続近世畸人伝』（寛政十年（一七九八）刊）の中で旧本の伝来を尋ねた際の綾足の態度について、



『古本伊勢物語』といふものを印刻せしを、予、「これはいづこよりとうで給ふものにて、真名伊勢とも異なるは、さだめて伝来あるべし」ととひしかば、唯微笑してありしは、其胸臆に取たる也。

「古本伊勢物語」というのは旧本をさす。それを「胸臆に取」った。すなわちここでも古本ではなく、綾足の創作という(8)。これら同時代の評価をもとに、『日本伊勢物語』は、荷田春満や賀茂真淵等の真名本重視の態度を背景に、綾足が新たに万葉仮名表記の本文を創作したものとされてきた(9)。稿者としてもこの説に従う。ただし、真名本偽作の意図については、いまだ考慮の余地があるのではないか。『続近世畸人伝』の描いた綾足は、片歌の祖たらんとした野心家であり、また「為す所いふところ虚実定まらず」という特異な言行の人物であつた。古本発見の功名を得んと偽作を行つたというのは、こうした綾足像には確かに似つかわしい。しかし、綾足自身は、旧本の来歴をことごとしく言い立てているわけではない。「旧本」とあるのは、外題と、「伊勢物語考異」の凡例(前掲)にあるのみ。また蒿蹊の問いに対し微笑のみで答えなかったというのは、偽作をほめかしているようでもある。その他、東京大学総合図書館所蔵の、『日本伊勢物語』(A006403)の見返しに、左記の加藤宇万伎の識語が載る(10)。

あやたりてふ人のもとより、旧本伊勢物語をえて写ぬ。なほ考あはせて、木にゑり、世にあまねくひろめんことをおもふ、う万伎にまづ案を見せつるとておこせしを見しに、またくむかし人のなせしにはあらで、契沖法師・あづままろ・わが加茂のうしなどの説にもとづきて、文の事はもとより、てにをはだにをさくしらぬ、いとまだしき人、みづからの心をくはへて、もとのことを、みだりにはぶぎ、或はそへて、むかしめかして、いつはり、あらたに書なせるもの也。目ある人、たれかはあざむかれやらん。もしあざむかるゝものありとも、やがて、むかしの人をあざむくつみおほかめれば、世にひろむる事はやめてよと、あかき心をもてきこえしを、きかで木にゑりたるは、かたはらいたくなん覚えける。

明和六のとしふみ月 藤原宇中伎いふ

これに抛れば、草稿の段階で『旧本伊勢物語』を一覧した宇万伎の諫めをきかず、綾足は出版を強行したことになる。では、日本の意義をことごとく主張するわけでもなく、また蒿蹊に日本の来歴をきかれ、黙して答えず、また宇万伎に批判されながらも、出版を強行した綾足の意図をどのように考えるべきか。以下に私見を述べる。

## 二 近世における真名本の意義

前掲の『旧本伊勢物語』金龍敬雄序は、序題に「楷書勢語」とある。先の引用に「原本楷字」とあり、「国字」と対に用いていることからすれば、「楷書」は真名の本文をさすものであろうが、「楷書」は書体の意味でもある。特に、旧本に先行する六条本の字体はやや崩した行書体で、平仮名の傍訓を有する。対して、『旧本伊勢物語』は楷書体に片仮名の傍訓。おそらく、序題の「楷書勢語」は行書体の六条本に対する、楷書体の真名本という、版相の違いによる命名と見る。

楷書体かつ片仮名の傍訓というのは、当時通行した寛永版本の『万葉集』(1)を意識したものといえる。このように、『万葉集』の版相を真似て、古典を真名本にする試みは近世に複数の類例がある(12)。では、そうした真名本はどのような意図で作られたのか。先行研究を基にまとめる。

『旧本伊勢物語』刊行の五年後、安永三年に『古今集真名字解』が出る。大本四冊。京、吉田四郎右衛門刊。『古今和歌集』を真名本にしたもの。同じ京出来の、新たに校訂された真名本であり、『旧本伊勢物語』との同時代性を指摘できる。編者は菊池春林。残念ながら現在その伝を詳らかにし得ない。春林はその跋文で以下のように、同書の成立背景を説明する。

つくばやまの峯よりおつる美名野川の、ながれての世々にもてあそべる古今和歌集は、いにしへのかしこきひじりの御代にえらびおかせ給ひて、まさぎのかづらながきためし、信田の杜のちえとなりて言の葉おほき物から、程ちかきわらはべの、あきなゆふな

なれしが、あるひ来りて、「此しふをよみならへるに、をんな文字はやすきに似て、あまぎかるひなの人の舌だみたるは、おのづから言たがひのこともあるにや。あるは言葉同じくして、こゝろのひとしからざるもの、なきにしもあらず。されば、かたはらにをのこ文字を書いてむや」と、わらはののぞみこひしかど、大江山いく野の道のふみ見ぬ身にしあればと、かたくなみけれども、此わらはのこゝろにきゝもわからず、せちにもとめしまゝ、しぐれふりおけるとよみし、まんえふしふの真名をはじめ、あるは旧記にあるところの文字を、かれこれ拾ひて、もしほ草のかきあつめたるは、いとをこがましけれど、よしやとてまかせぬ。されど此中にあげ用ゆる文字は、日本紀・続日本紀・三代・文徳の実録、あるは万葉集・新撰万葉集・古事記・古語拾遺・拾芥抄・江次第をはじめ、または文選・白氏文集・遊仙窟・史記、これらの文字を用ひて、いさゝかも愚案の文字をあぐることなし。たゞ文字の上にかへるもかへらざるも有は、旧記にのせたるを其まゝに用ひて書たり。もとよりひろくまなび、しげくきゝけむ人の見るべきにあらず。たゞ、わらはの読やすき便あらんこゝろにて、いさゝか其文字にて其こゝろをさとし安からしめんとて、安積の沼の浅はかなるを、かつ見る人のうしろゆびにゑまるゝ事しかり。

ここで春林は、昵懇の童から仮名では意味がとりにくいとして、真名で『古今集』を書いてほしいと要望があつたことを述べる。一度は断つたものの、結局その童の懇懇を否みきれず、同書をものしたという。ここでは、真名本作成の意図として、仮名本に較べて文意のとりやすいことをいう(13)。また、これに先行する刊行の真名本として、岡西惟中『真字寂寞草』(元禄二年(一六八九)刊)と素軒松菊『真字百人一首』(元禄八年刊)がある。『真字百人一首』には惟中の序があり、両者の影響関係は歴然。そして、どちらも序中で、真名になることによって、文意の明らかになったことをいう。

徒然草は兼好法師が作にして、世挙て称賞する所なり。此の書、言簡に、理幽にして、漢字和書兼ね通ずるに非れば、解することを得難し。浪華の一時軒惟中居士、真字を用て此書を写し、仮字を以て其の傍に附す。和漢の字義、是に於て釈然たり。実に騷壇の一助なり(『真字寂寞草』芝峰大随序、原漢文)。

百首の真字、女を變じて男と成し、靈を補て実と為す。謂つ可し、文字の匠王なりと。是の如くにして後解せざるの病無く、明ならざるの煩ひを免る。每首、義と字と昭著燦然、日星の光れるが如し。之を見、之を読んで孰れの人か仰望せざらんや（『真字百人一首』惟中序、原漢文）。

『真字寂寞草』は、「和漢の字義、是に於て寂然たり」と述べ、『真字百人一首』は「每首義と字と昭著燦然、日星の光れるが如し」という。昭著は明らかなこと。ここでも、『徒然草』や『百人一首』の意味が、真名にすることによって明瞭になったという。また同時に、『万葉集』や『日本書紀』、その他の漢籍など用字の根拠とした文献の字にも習熟できるといふ。右の如く、近世の真名本の序跋に抛れば、仮名主体の本文に比して、文意を理解しやすいというのが、真名本の意義の一つと考えられていたようだ。ただ、雲英末雄「深江屋太郎兵衛の出版活動」(14)が『真字寂寞草』について、「惟中の漢字に対する知識のほどが知られるが、衡学的な傾向も見られる」というように、難解な用字も多い。むしろ、頭書欄を設け、用字の出典を記すなど、字の学習に重きをおいているようである。『真字百人一首』も同様。『古今集真名字解』は出典注をもたないが、文意をわかりやすくするためだけとは思えない、凝った字を使う点は共通する。また、『真字百人一首』と『古今集真名字解』は、真名本の性質上、掛詞が表現できない。理解を助けるというには、致命的な欠陥である。とはいえ、どの本も、特殊な用字は意味の明瞭な語に使われている場合が多く、理解を妨げるようなものではない。また、真名本という形式は一般的な注釈書に比して逐語的であり、そこに真名本の利点もある。総体として、初学者を意識した教育・啓蒙的な性格の形式と認めてよいと思われる。

### 三 『旧本伊勢物語』の特色

それを確認した上で『旧本伊勢物語』の序を再度見れば、敬雄序も、「文義精確なり」と文意のとりやすさを旧本の優位性と見てい

る。ここで想起されるのは、本居宣長が、前掲『玉勝間』巻の五で展開した、真名本批判であろう。

伊勢物語に、真名本といふ本あり。万葉の書きまにならひて真字して書たる物也。六条宮御撰とはじめにあげたれば、その親王の御しわざと見もてゆけば、あらぬ偽にて、後の物也。まづ、すべての字のあてざま、いとつたなくして、しどけなく正しからず、心得ぬことのみぞ多かる。そが中に闇<sup>クラ</sup>うを苦<sup>クラウ</sup>勞、指<sup>オヨビノチ</sup>之血を及後などやうにかけけるは、たはぶれ書にて万葉にもさるたぐひあり。又東<sup>アツマ</sup>を熱間、云々にけりを迹利など書るも、清濁こそたがへれ、猶ゆるさるべきを、なんといふ辞に何の字を用ひ、ぞに社と、とに諾<sup>ト</sup>字を用ひたるたぐひ、いと心得ず。しかのみならず、思へるを思恵流、たまへを給江、又、こゝへ、かしこへなどのへをも、みな江とかき、身をも、これをやなどの、をも、をやといふ辞を面、親とかき、忘れを者摺<sup>ハスレ</sup>と書るなど、これらの仮字は今の世とても歌よむほどのものなどは、をさく誤ることなきをだに、かく誤れるは、むげに物かくやうをもわきまへしらぬえせものゝしわざと見えて、真字はすべてとりがたきもの也。

確かに六条本には宣長のいうように、第九段「わが入らむとする道はいと暗う細きに」の「暗う」に「苦勞」を、第二十四段の「およびの血して書きつけける」の「およびの血」に「及後」をあてるなど、解釈を助けるどころか、読みの妨げになるような特殊な文字遣いがある。対して『旧本伊勢物語』は、「暗う」に「暗字」、「およびの血」に「於余毘之血」とあてるなど、六条本に比して一字一音の仮名書きが多いが、解釈を誤らせるような文字遣いは原則採らない。他にも宣長が批判した、「熱間」(第七段他)は「東」「吾婦」、「迹利」(第四段他)には「耳来」「仁計利」など、「何」(初段他多数)には「南」、「社」(第六段他)は「序」「叙」、「諾」(初段他多数)には「止」「与」、「思恵流」(第十四段)には、「思徹留」、「給江」(第六十五段他)は「給」、「江」(第十八段他多数)は「徹」、「面」(第五十七段他)は「乎毛」、「親」(第三十八段)は「乎也」、「者摺」(第八十二段)は「忘礼」というように、旧本の用字は六条本に比べて、仮名の誤りも少なく穏当である。宣長も旧本に対し、「近き比ある人の出せる旧本といふなる真名の本も一つ有。それはかの

もものとはこよなくまきりて、大かた今の京になりての世の人のおよびがたき真字のかきざまなる所多し」と、平安遷都以降の用字ではないと偽書として批判しつつも、用字の正しさに一定の評価を与えている。実際に旧本は六条本に比べてはるかに意味がとりやすい。近世の人々にとって真名本は、仮名書きの本に対して意味がとりやすく、また漢字の学習にも利点がある本との認識であった。しかし、近世以前の成立とされる、六条本の『真名伊勢物語』は、そうした当時の真名本の通念には合致しない独特の用字をもつ。『旧本伊勢物語』には、この六条本の不備を解消する意図があるもの見てよい。『伊勢物語』の文意を漢字によつてとりやすくし、また、この場合は漢字学習というより、いわゆる万葉仮名の習熟にも役立つ。このように、『旧本伊勢物語』は、近世の真名本の通念を體現した新たな真名本というところに意味があつたものと考えたい。偽書製作という側面を必ずしも否定するものではないが、やはり綾足の本意は、初学者向けの啓蒙的な著作というところにあつたものと考ええる。綾足の和学の書が、総じて啓蒙的な著作であることも傍証になろうか。偽書製作という側面はあくまで付随的なものと考えたい。そのため旧本であることをことさらに強調する気もなく、また、宇万伎に偽書であることを指摘されても、それほど痛痒を感じなかつたということであろう。

#### 四 『古意追考』について

綾足の『伊勢物語』研究に関する書物として、もうひとつ注目すべきは、『古意追考』である。同書は、賀茂真淵の『伊勢物語古意』の条々を取り上げ、批判したもの。写本で伝わる。本文中、『旧本』に言及するところから、『旧本』刊行後ほどなく成立したとされる。内容については井上豊に逐条的な解説が備わる(15)。井上稿は、『古今和歌六帖』に重出する和歌の指摘や、方言や地名など綾足の実体験に基づく考証に、一定の評価を与えてはいるものの、

以上を通観するに、「追考」は「古意」の説を誤解したり、曲げたりして、強弁を加えている場合が少なくなく、単なる付会説や揚げ足とりに終っていることもある。とくに反切の濫用が目立つ。旧註を自説のようにして説いた場合もあつて、「追考」そのも

のにも欠陥が目につく

と全体的にかなり手厳しい。確かに、注釈史の中にこの『古意追考』を置いて、綾足自身の創見を汲み取ろうとすれば、井上稿のごとき結論に帰着せざるを得ない。その点、井上稿の評価は的確である。しかし、ことさらに『伊勢物語古意』に異を唱える『古意追考』には、真淵とは異なる綾足の注釈の特徴がよく顕れている。そこで、同書に基づき、綾足の注釈の特徴を概括したい。結論から述べれば、『古意追考』における綾足の注釈は、①異文への関心と、②道義的な解釈に与しないことの二点で、真淵とは異なっている。これを綾足の注釈の特徴と認めてよい。

## 五 異文への関心

まず、『古意追考』の本文研究の方法について述べるが、それに先立ち、『古意追考』と『旧本伊勢物語』との関係について整理しておきたい。『古意追考』は『旧本伊勢物語』刊行以降の注であり、文中に「旧本」が度々登場する。しかし、旧本の本文を無条件に他本よりすぐれたものとはしていない。第十六段、紀有常は、長年連れ添った妻が、「年ごろあひ馴れたる妻、やうく床離れて、つるに尼になり」、出家するとうきょうきに、「まことにむつまじきことこそなかりけれ、今はと行くを、いとあはれと思けれど」、困窮ゆえ何も持たせてやれないことを歎き、親しい友の男のもとへ、自らの立場と、歌を書いて送る(16)。

手を折りてあひ見し事をかぞふればとおといひつゝ四つは経にけり

これを真淵の『伊勢物語古意』は定家本の本文を採り、「とお(を)」といひつゝとするが、綾足は「六条本にも旧本にも十々五つとはべれば」と六条本と旧本に共通する「十々五」つ(旧本は「十止乎五」)が意味的に穏当という。理由は以下の通り。

手を折りてあひなれし年月をかぞふるに、とをとを五つと折て大かた五十年ばかり也。其内四十年はしかとそひとげし中なるをと聞へて、此方おだやかかなり。とをといひつゝよつもへにけりといふ時は手を折てみるに、しかと四十年也ものゝきはまりしにて、おだやかならずきこゆ。

五十年にもおよぶ婚姻生活。往時に比べ疎遠となつた妻だが、それでも、仲睦まじかつた四十年を思うと、不如意な身がやるせない。そのような有常の心情を詠んだ歌という。「十といひつゝ」で四十年としては、有常の複雑な心情が読み取れていないと批判するのであろう。「十々五」つの本文を認めたとしても、一首の解釈としては強引で無理がある。ただ、ここで、旧本を無条件に採ることをしていない点は注目される。根拠を示した上で、旧本と六条本に共通する本文を採っている。また第十九段の「御達」の語について、「御達」の用例が乏しいことを理由に、旧本と六条本に共通する「児達」を採る。なお、この「児達」については上田秋成も『豫之也安志夜』（寛政五年（一七九三）刊）中で贅意を示す（17）。ただし、現行の注釈は、「御達」説に拠る。

右の例は、六条本と旧本が一致しているため問題は少ないが、旧本の独自本文を採る例もある。第二十三段、井筒の歌を、『伊勢物語古意』は六条本の本文から「筒井津々ゐづゝに懸し麻呂が長生にけらしな妹見ざる間に」（18）とするが、綾足は旧本の独自本文を用いて、「長」を「髪」とする。ただこれも、返歌に「くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき」とあるので、返歌との照応を意識し、「髪」の方が適切としたものである。「またたけのおひるといふ詞あらず」と「おひる」との整合性も「髪」がすぐれるという。定家本は「過ぎにけらしな」なので、「おひる」についての指摘は妥当か。このように、旧本の独自本文を採る場合も根拠を明確にしている。見方を換えれば、『古意追考』における本文に関する議論は、そのまま旧本の校訂の論拠を示すものになつていえる。

以上、見てきたように、旧本の文義が精確であることを強調はするものの、それに特権的な地位を与えているわけではない。ここからも、綾足にとつて旧本の価値が新出の古本ということよりも、文意の精確さにあることが見てとれる。



さらに、『古意追考』からは綾足の特徴的な本文観が見てとれる。第二十一段、愛し合っていた男と女。ささいなきっかけから、突然、女は男のもとを去る。久しくして、女が男に歌を送る、「今はとて忘るゝ草のたねをだに人の心にまかせずも哉」。男の返しは、「忘草植ふとだに聞く物ならば思けりとは知りもしなまし」。この歌のやりとりから、二人は再びものいい交す仲となるが、二人の仲は昔のままというわけにはいかない。そして、男が女に歌を送る。これを『伊勢物語古意』より引用すれば(19)、

わすれんと思ふ心の付故尔有しより異に物ぞかなしき

真淵は男の歌を「いかで忘れてしがなてふ心の付より、かへりて物悲しきの増れりと也」のように、結局、もとの関係に戻ることはなく、男は、なんとかして女のことを忘れたいと思い、それにより悲しみがつのる意という。これに対し綾足は旧本の「忘牟止(わすれんと)」であれば、真淵の解釈の通りだが、六条本の「忘寛与(わすらんと)」(20)の本文に従うならば、「もしこなたの事をわすれもやせんといふ心」という。女の歌に、「今はとて忘るゝ草のたねをだに人の心にまかせずも哉」と、自分のことを忘れてしまったのではないですか、となじられてより、いつそう悲しみのつのる意とする。この解釈の対立自体は従来からのものであり、目新しい議論ではない。ただ、真淵がこの箇所の手書に、

今本に初句をわするらんとし、三の句をうたがひにとありてそれにつきて説どもあれど、皆ことわりよろしからず。古本ぞ是もよき也。恐らくはその説を助けんとて、歌の句を後なをせしなるべし。さる例多ければ也。

と明確に本文に優劣をつけ、「わするらんと」する本文を後の改竄とするのに対し、綾足は、真淵の「わすれんと」の解釈を「心ばへいとよし」と評価するが、「六条本にむかひてはむかふのことになるとしるべし」と解釈の差異を指摘するのみで、本文に優劣をつけていない。意味が通らない解釈については綾足も否定するが、そうでない限り、基本的に本文に優劣をつけず、異文を許容するのが『古

意追考』の立場といえる。他に、第五十一段、全文を引くと、

昔、おとこ、人の前裁に菊うへけるに、

植へし植へば秋なき時や咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめ

歌の初句、定家本の「うへ(ゑ)しうへ(ゑ)ば」を、真淵は六条本をもとに「遷植者(うつしうゑば)」とする。「今本に、うへしうへばとあれど、こはうつしうゑばを誤れること、古本に、遷植者とかき、業平家集にもうつしうゑばとあるにて知べし」という。また、この歌は『古今集』にも出るが、「古今集の今本に、うへしうへばと有も、つとへと誤り、植のかなはうゑなるを、うへと誤りなどせしもの也」と、これも誤りとしている。対して綾足は、

真淵此歌を今本にうゑしうゑばと有を誤也といへるは、つばらならず。古今、古本にもうゑしうゑばとあり。しかるに家の集には、うつしうゑばとありて、并に六条本、又此旧本もしかり。真淵此方により。しかれども、うゑしうゑばとあるを誤とはいひがたし。うゑしのしは助語にて、たしかにうゑてあらんならばとことばをかさねていへる也。此詞の例多し。(中略)うたがふらくは、伊勢物語の作者うつしうゑばと引出したるを、家の集とてあるさうしに記写の者書たがへたる歟。うゑし植ばにて心よくきこゆ。うつしうゑばなほさら也。

「うゑしうゑば」でも間違いではないとして、『伊勢物語』が『古今集』の歌の初句を「うつしうゑば」に改め、『業平集』の書写の際、『伊勢物語』の影響により、こちらをも「うつしうゑば」と書き誤ったとする。「うつしうゑば」の方を古形として認めつつも、定家本の「うゑしうゑば」を誤りとするのは、行き過ぎとたしなめる。

このように、『伊勢物語上意』は、正しい／誤りの二分法で異文を裁断し、単一の本文の古形をめざすところに、本文校訂の特色が

ある。真淵はありうべき唯一の本文でないとき、その本文を「誤り」とする。そこでは、複数の本文の併存はありえない。対して、綾足も、本文の古形を想定はするものの、異文にも寛容である。綾足の「誤り」とは、意味の通らない本文をさす。そして、むしろ表現の違いに注目し、二様の解釈を併存させようとするところがある。

綾足は異文の生む、表現の微妙な差異にきわめて自覚的である。右の例からもそうした傾向が見てとれるが、他にも第八十二段、惟喬親王の一行が交野に桜狩りに出、日暮れて禁野の天の川のところで、業平（本文「馬頭」）が親王に酒をさしあげようとする、まづ、歌を詠めという。馬頭はこれに、「狩り暮らし柵機つ女に宿からむ天の河原に我は来にけり」の歌で応じる。返歌を詠じ得なかつた親王にかわり、紀有常が返す。

一年に一度来ます君待てば宿かす人もあらじと思

なお、この歌は『古今集』にも出る。これを、『古意追考』では、真淵の説を挙げ、評する際には、

真淵此歌を説るは、此君は彦星也。宿かす人は織女也とみて、かく定まりたる君ある故に宿はかさじといふ也。一わたりきこゆるに似たり。

真淵が定家本および『古今集』の本文「君待てば」に基づいて行つた解釈に対し、六条本に「君成者（きみなれば）」とあることに留意する。

こゝに君なればとあるにつきては、すこしくこゝろとあるにつきて、一とせにひと度来ます君あればとよめば、これまた真淵の説る心のごとし。うたがふらくは、君まてばと有を、此物語の記者君あればとかへつらんか。さるを真名に君あればとあるにて、例

にならひて君なればとよみきつるものか。

「すこしくころとあるにつきて」は意味が通らない。誤写か。ここでは、綾足が自説のあることをいうと考えておく。綾足の自説では、「君侍てば」と「君あれば」ならば、同じ歌意になるので、『伊勢物語』の作者が「君侍てば」から「君あれば」に本文を改めたという。そして、綾足の解釈では、『伊勢物語』はもと真名で書かれたとするので、「君あれば」に相当する真名を訓ずる際に、「君なれば」の本文が生まれたとする。別のいい方をすれば、『古今集』（または定家本）の「君侍てば」と、六条本「君なれば」の間に、「君あれば」の本文があつたと仮構するものである。旧本では、この推定に添うように「君有者（キミナレバ）」となる。こうして本文の生成過程を説きつつも、綾足は、「君なれば」での解釈も試みる。

こゝに君なればといふ詞につきて此歌を説時は、ニアノ反ナにて君にあればとなる故に、すなはち此君は惟喬親王をさして申なり。かりくらしの歌は織女つめに宿からんといひかけつるまゝに、こは宿かす人もあるまじきとおぼゆ。そはいかにとなれば、ひとゝせに一たびならでは来まさぬ君にておはしませば、かくゆくりなく其さだめの外に此天の川におはしまして、にはかにやどらんとしたまふなればと也。かくみる時は、君なればといひしことばにかなひはべらんか。こたへ歌を紀有常みこにかはり奉りてよみたれば、なりひらのこたへ、又親王への御いらへとをこめてよめる也。すなはち、親王を彦星として、其君なればといひつゝ、さてまことになり平の申さるゝごとく、たなばたつめの外宿かす人もあらじとおもふ也との心也。

一年に一度定まつた日だけに、来訪する君であれば、今回のように、突然、天の川に向向いても宿を借してはもらえまい、と解して、「君なれば」の「君」を、彦星に見立てた親王とするのである。これは、秋成が『豫之也安志夜』に「古本に君成者と書り。さては歌のころ、たゞに親王のまれ人なるを云のみ。君まてばの方、天の河てふ地につきて面しろし」と指摘するように、「君成者」では、やはり興趣に乏しく、解釈にも少し無理がある。そもそも、綾足も「物語の記者」の意図した本文は、「君あれば」であり、「君なれば」

は後に発生した異文と見る。しかし、その一方で、「君なれば」とする異文に着目し解釈の違いを言挙げしようとするのである。

このように、真淵は、本文を対照させ、古い本文へと向おうとする。対して綾足は、一方では、真淵と同様に、本文の生成過程を明らかにして、古い本文を判定していく態度もあるが、その一方で、本文の細かな異同が生み出す、意味の差異を丁寧に拾い上げようとする態度も見られる。ここに『古意追考』の一つの特徴がある。これは、「伊勢物語考異」の凡例に、

○はつかに違ひたりと見えて、意いことなるものあり。そは必記せり。たとへば而と泥のことばの類なり。又違ひたりと見ゆるも、いづれにてもさてあるべき物はもらせるもあり。いと事しげゝればなり。

とあるのと同様の立場である。「伊勢物語考異」成立の背景にも、綾足の解釈の差異への強い関心がある。「伊勢物語考異」は綾足の本文観の反映として、『旧本伊勢物語』に付されて然るべきものであった。あるいは、本文の細かな差異から得られる意味の違いに気を配るのは、「伊勢物語考異」をものした作者ならではの、物語の愉悅に浸るものといえるかもしれない。

## 六 道義的解釈から離れる

「道義的な解釈から離れる」とは、やや熟さない表現だが、後世の道徳から、物語を切り離して解釈することという。注釈史の観点から、順を追って記す。日野龍夫「国学以前の古典享受」は(21)、『伊勢物語』第四十九段の解釈について、村岡典嗣『本居宣長』の指摘を基にその展開を整理する。まず、第四十九段の本文を定家本によって示す。

むかし、おとこ、妹のいとおかしげなりけるを見をりて、

うら若みねよげに見ゆる若草をひとの結ばむことをしぞ思

と聞えけり。返し、

初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ける哉

この段は、兄が妹に恋する話と読むか否かで、旧注と和学者による新注が対立する。旧注はこれを否定したが、契沖の『勢語臆断』以来、新注では妹への恋を読むものとする。『勢語臆断』には、

すこしけそうじて此歌をよまれたるなり。下になりひらの事を、ひとつ子にさへありければとあれば別の腹の妹にや。(中略) 異腹の妹などは后にたゝせたまへる事も其例おほければ、昔はくるしからぬ故ありければこそ、しかりけめ。此事、内典外典によりていへば、おぼつかかなからぬにしもあらねど、本朝は神道を本とす。然るに神代より有ける事なれば、みだりに議すべからず。後に嫌はしき事となれるをもて、昔を難すべからず。又、昔をもて後の例とすべき事にもあらず、或抄にしひて業平をたすけて、けさうにはあらずといへど、さらば斎宮二条后などの事はいかにかおもへる。たゞありのまゝにさて有なん。

とあり(22)、日野稿はこの箇所について、

兄が妹に懸想するという解釈自体なら、前述のように従来もないではなかった。しかしそれは、『名女情比』の例に見るように、近世においては、道徳的非難をともなう形でのみ存在を許されていたと思われる。しかるに契沖は、この段の妹は異母妹であろうと推定して、わが古代には異腹の兄弟の婚姻は禁じられていなかったことを述べ、後世の道徳をもつて古典を裁断せず、ありのままに受け止めるべきことを主張する。これは、古典は、それが成立した時代の風俗や物の考え方の中にもどして読まねばならないという、それまで誰も思いつかなかった画期的な認識を示すもので、契沖の学問的精神の集約として、歴大な著述の中からこの一節を選び出した村岡氏に敬服する。

と、その意義を説明する。この「後世の道德をもつて古典を裁断せず、ありのままに受け止めるべき」という態度は、契沖以降、真淵の『伊勢物語古意』も継承している。しかし、そのあり方については不徹底な部分もある。以下詳細に見る。

まず、第四十九段について、『伊勢物語闕疑抄』より旧注の解釈を示す(23)。「闕疑抄」では、兄の歌を、「常には業平の妹をけさうじて読といへどもしからず。いもうとを不便に思ひて、憐愍にていへる也」とし、妹の返歌を、「是ほど我を大切におぼしめす事と有がたくおもふ也」と読む。こうした旧注の見解に対して、先の契沖や、真淵は兄の妹への懸想と読む。真淵も契沖と同様、『伊勢物語古意』において、

そもく／＼皇朝のいにしへは、同腹たはくるは大なる罪ある事、紀などにしるせり。異母なるは后にしも立給へりしなれば、いまざりし事知べし。後世もてはかるべからず。

を根拠に、兄の歌を、「かくばかり共寝しよげなる若人を、ひとのものとなさんがかひなき心ちすと也」としている。対して女の歌は、

本にはなぞもかくめづらかにおもひもよらぬことば、有ぞとがめて、末には、少しやはらぎ、笑ふ様にて、かゝるあひだには有まじき事ぞてふ心もおかず、ひたぶるなる御物思ひよといふ也。

の意味という。兄の懸想を妹が軽くたしなめるというのが、一段の趣旨となる。これに対し、綾足の『古意追考』は、妹の歌を、

歌の心は、こはおもひかけざるめづらしき御言をうけ給るものかな。さばかりへだてなくみづからをおぼしけるかといふ意也。物をおもひは恋ぢ也。又物はかたちなきをさす詞にて、こゝにはわれをおもひ給ふかなといふ心にもみゆべし。

兄の思いを驚きとともに肯定的に受け止めるものだという。妹の歌の解釈自体は、先の『闕疑抄』と基本的に同じである。ただ、「物をおもひは恋ぢ也」と兄の歌の解釈を換えたため、一段の趣は全く違ったものとなった。ここにおいて、全き兄弟の恋物語が完成する。こうした綾足の解釈の背景には、契沖・真淵と同じく、異腹の兄弟の恋は忌むべきものではない、との認識があろう。『古意追考』では、この点に言及はないが、綾足は片歌論書『百夜問答』（明和二年刊）において、門人の為谷が、『伊勢物語』のこの段を、「はらかなの礼なきに似たり」と、兄妹の守るべき礼節を、逸脱する行為ではないかと尋ねたのに答えて、旧注と新注の解釈を紹介し、道義的に問題のない章段であると答える。新注の説に言及するところを引けば、

又一つの説は、またく異腹の妹にて、在五のこゝろある歌なりしかば、いにしへのためし、みな異腹のはらからはあひとつげり。此物がたり、はた其ためしをもて書るならん。其後の源氏の物がたりなども、これらにならひてかける物なり。

このように、綾足は、異腹の妹ならば兄弟の恋も罪ではない、との説を継承している。むしろ、妹の歌を兄の思いを肯定的に受け止めるものと解釈する点で、契沖や真淵に比べて、徹底しているというべきであろう。異腹の妹との恋を忌むことはなかったとしても、妹の返歌に兄の恋慕をたしなめる意図を読みとつてしまふ、契沖や真淵の解釈はむしろ不徹底である。道義的に問題がないのであれば、妹が兄の愛を受け容れても構わないはずである。契沖や真淵の解釈は、やはり自らの道義的な立場に縛られているといわざるをえない。同様の例は、たとえば第五十五段でも指摘できる、

むかし、おとこ、思かけたる女の、え得まじうなりての世に、

思はずはありもすれど事のはのをりふしごとに頼まるゝ哉



真淵の解釈は、

こは、かく成てより後は其人はおもひもかけずあるにやしらねど、はやくいひてしことのあれば、まだ時としてはおもひたのまるゝと也。こは、はしの詞につきていふなれど、少しおだやかならぬ心ちすめり。然れば、これもかゝる古歌のあるにはしの詞を加へたるにや。そのもとの心は、たゞあふとはなしにことばのみよき人の上をよみたるならん。

本文の「え得まじうなりて」は、人の妻となつたことをいう。人の妻となつた今でも、男は女の昔の言葉を思い出して、たのみとしてしまう。真淵は、詞書によつて解釈すると、「少しおだやかならぬ心ちすめり」として、詞書は後に加えられたものであり、歌自体は、逢う気がないのに、言葉のみ思わせぶりの女にあてて歌つたものとする。真淵は自らの道義的な立場をあらわにする。そして、歌のみを取り出せば、道義的な問題はないと、物語の成立以前にさかのぼつて自らの道義的な立場との整合性をつけようとする。真淵の注釈には彼の倫理観が明確に反映されており、時に『伊勢物語』に対して批判的である。対して綾足は、

此歌真淵かうがへのごとく、女の男もちたる後の事にて、代といふことばよく聞ゆ。歌の意はひたすらにおもひたえてあるならば、それはそれまでのことなれども、すこしうちにおはしたる心ばへのことばに出て、折ふしごとにはたのまるゝぞと也。

過去の言葉を頼みにしてしまう、というのが真淵の解釈であつた。人妻となる前の女の発言をさすものであつて、女の言動は道義的にも問題はない。しかし、綾足の解釈では、女の今の言葉の端々に、男への思いをほのめかすところがあり、それを頼みにしてしまうというのである。真淵が「おだやかならぬ心ちす」といった解釈に、綾足は積極的に踏み込んでいる。綾足なりに歌の表現を素直に理解しようとしたものであろうが、結果的に、綾足の解釈は真淵に比して、道義的な立場から自由なものとなつてゐる。これは、物語内の道徳と自らの道徳を切り離すことに、一応、成功しているものといえる。

前掲の日野稿は、浮世草子調の俗解本『昔男時世妝』に、このような兄弟の全き恋物語が出ることを報告し、道義的に無責任でありえた民間レベルの古典享受と規定しつつも、それが国学の解釈を準備した可能性を示唆している。『古意追考』の解釈も『昔男時世妝』と共通するが、綾足の解釈は、契沖や真淵らの、後世の道徳から物語を切り離し、ありのままに解釈することを推し進めたものであり、『昔男時世妝』の道義的な無責任さとはやや性質を異にする。また、綾足は、女訓書『女誠ひとへ衣』の「操をまもるてふ教をいふ三の条」で、

さは女の罪咎のおもき、此あやまちに過たるはなし（これは女のをとこふたり見てふ事のみだれをいふなり）。さるは世に物語のあるとあるも、おほくは此みそかごとをつゝみなくかいのせし。こは後のをみなだちのいさめにもとかいつけはべらむが、かいざまいとなまめきて、人の心のうごくべき筋どものをかしくもあはれにもうち見ゆれば、これをさる罪咎なる事とおもはで、おのづからうきたる心におもひよるはしとも成行まし。殊更源氏の物語は、むすめだつ人には見すまじき文なりと、ある人のたまひける、ことわりぞかし。又落窪の物がたりは、いかにも女の鑑とも教とも成べきものなり。

『源氏』より『落窪』を女子に勧めるというのは真淵の自説であり、ここでは、道義的な立場において真淵と共通する。ただ、「かいざまいとなまめきて、人の心のうごくべき筋どものをかしくもあはれにもうち見ゆれば」と、道義的な問題は了解しつつも、人の心の繊細な動き描くことについては、「をかしくもあはれ」なものと評価している。女が二夫に見えるような、不道徳な場面であっても、時に「をかしくもあはれ」なる趣をもつことを、綾足は自覚している。この自覚は、綾足の解釈にも影を落としているのではなかろうか、だからこそ、契沖や真淵に比べ、おのれの道義的な立場から自由な解釈ができたものと考ええる。

ここに、たとえば、後に本居宣長が「物のあはれを知る」説を大成し、勧善懲悪の文学観を脱したのにつながる、過渡的性格を認めることも可能だろう。また、綾足の和文体読本のあり方との関わりも重要であろう。曲亭馬琴は「本朝水滸伝を読む并批評」において、

綾足の『本朝水滸伝』の「勸懲」が正しくないとして批判している。しかし、綾足は自らの和文体読本『西山物語』と『本朝水滸伝』を「物語」として書いている（第一部第四章で詳細に論ずる）。つまり、綾足は物語を書くにあたって、「をかしくもあはれ」なる世界を描くために、あえて「勸懲」を徹底させなかったと考えてもよいであろう。綾足の読本の作品世界はこのような綾足の物語研究に一つの淵源をもつものといえる。

おわりに

以上、やや雑駁であつたが、綾足の『伊勢物語』研究の特徴をまとめた。『旧本伊勢物語』という、初学者を意識した啓蒙的な真名本の出版や、『古意追考』や『伊勢物語考異』から窺える本文の差異への関心、また『古意追考』のおのれの道義的な立場と、物語の解釈を切り離す点など、綾足の和学の特徴の一端を明らかにした。従来、綾足の和学については、その反切による語源解釈の多用や、牽強付会の説など、未熟な面ばかりが強調されてきたきらいがあるが、真淵とは違った独自の立場も窺える、注釈史の一齣として尊重すべきものである。

注

- (1) 『建部綾足全集』第七卷、「旧本伊勢物語」解題。
- (2) 前掲稲田篤信解題。
- (3) 「綾足講真字伊勢物語」として『建部綾足全集』第七卷所収。
- (4) 「建部綾足の伊勢物語講釈」（『武蔵野文学』二〇号、一九七二年二月）。引用は『近世文学考』（汲古書院、二〇〇七年）に拠る。

- (5) 大谷篤藏「風月莊左衛門『日曆』中の綾足」(『芭蕉晩年の孤愁』角川学芸出版、二〇〇九年)。初出は『建部綾足全集』第一巻月報2(国書刊行会、一九八六年六月)。
- (6) 『本居宣長全集』第一巻(筑摩書房、一九六八年)。以下同。
- (7) 北岡四良『復刻 近世国学者の研究——谷川士清とその周辺——』(皇學館大學出版部、一九九六年)「旧本伊勢物語考——解題と覆刻——」。初出は、『皇學館大學紀要』第二五輯、一九七七年三月。なお、この「五文字」を「五言」とする箇所は『玉勝間』にも同内容の指摘がある。
- (8) 『続近世畸人伝』(中公クラシックス、二〇〇六年)。
- (9) 前掲、『建部綾足全集』稲田篤信解題や、『真名本 伊勢物語 綾足校訂』(翰林書房、一九九五年)解題(木村晟執筆)など。
- (10) 同書については、中村幸彦「上田秋成伝浅説」(『中村幸彦著述集』第二二巻、中央公論社、一九八三年)や足立雅代『旧本伊勢物語』の成立背景(『国語国文』第五九巻第一〇号、一九九〇年一〇月)に言及あり。
- (11) 寛永二十年刊。古活字版付訓本の覆刻。
- (12) 近世出来の真名本については、足立雅代「真名本と和漢聯句——『真字寂寥草』の場合——」(『国語国文』第五八巻第四号、一九八九年四月)に拠る。
- (13) 『古今集真名字解』については、龍草廬が所蔵の真名本と内容が同一であるとして、春林の手になることを否定した(雲岡梓「龍草廬『真字古今集』をあげつろひし詞」と菊池春林『古今集真名字解』——『古今集』真名本の研究——」、『日本文藝學』第四九号、二〇一三年三月)。本章では、近世における真名本の意義を考えるための資料としてとりあげた。『古今集真名字解』が春林の編でないとしても、本章の論旨に影響はない。
- (14) 『江戸文学』第二五号、一九九六年五月。
- (15) 井上豊『賀茂真淵の業績と門流』(風間書房、一九六六年)第六章第七節「伊勢物語と意追考」の吟味。

- (16) 『伊勢物語』の引用については、『新日本古典文学大系一七 竹取物語 伊勢物語』（岩波書店、一九九七）に拠る。底本は、学習院大学蔵伝定家筆本。以下、「定家本」というのはこれをさす。
- (17) 『上田秋成全集』第五卷（中央公論社、一九九二年）。
- (18) 『伊勢物語古意』の本文。『伊勢物語古意』の引用は、『伊勢物語古注釈コレクション 第五卷』（和泉書院、二〇〇六年）に拠る。底本は宝暦九年橘千蔭写の写本。
- (19) 定家本では、「わする覧と思心のうたがひにありしよりけに物ぞかなしき」。
- (20) 「わすらんと」は『古意追考』に引用される形。実際の六条本の本文は定家本と同じ「わするらんと」。綾足の誤りか。未詳。
- (21) 『宣長・秋成・蕪村 日野龍夫著作集第二卷』（ぺりかん社、二〇〇五年）。初出は、『小島憲之博士古希記念論文集古典学藻』（塙書房、一九八一年）「国学以前・素描」。
- (22) 『契沖全集』第九卷（岩波書店、一九七四年）。
- (23) 前掲『新日本古典文学大系一七 竹取物語 伊勢物語』所収の本文に拠る。

### 第三章 歌書出版の享受——『増補歌文要語』と『新撰はし書ぶり』——

はじめに

埼玉県立浦和図書館所蔵『片歌二夜問答』(LA911.1)には、綾足の講義に基づくものと思しき書き入れが施されている(1)。書き入れの内容は、本文の議論の補足や古語の語釈など。これを見るに、「いぶかり」に「ふしんの事」、「かいつけて」に「これはかき付て也」、「めやすからん」に「見やすき也」、「まにく」に「まゝと云事也」、「審<sup>ツバ</sup>に」に「つまびらかな事」、「ひたぶるに」に「ひたすらといふ事也」、「わいだめ」に「わかち也」など、古語としてはかなり基本的なものにも、丁寧に語釈が付されている。彼の和学の書の読者は、主に彼の俳諧の門人たちであつたとされる。門人たちは、この書き入れが示すように、基本的な古語の意味も定かには知らぬ人々であつただろう。綾足にとつて、彼らへの教育啓蒙は重要な課題であつた。

そこで、『歌文要語』(明和二年(一七六五)刊)や『はし書ぶり』(同三年刊)、また『後篇はしがきぶり』(安永二年(一七七三)刊)などの著作を、綾足は著すことになる。

『歌文要語』は標題の通り、歌文に用いるべき語彙を、記紀万葉および中古の物語などから抜き出し、意義で分類したもの。明和二年十二月刊。小本一冊。巻末に「吸露菴蔵板」とあり、その下に、須原屋市兵衛・三河屋半兵衛の二書肆の名が記載されている。便宜的、「語彙」としたが、中には文の一節のとき長い項目もある。収録語彙数は八四〇。語彙の下に双行小書きにて出典と、語によっては語釈も付す。収録語彙八四〇を出典別に整理すると、『万葉集』が四二八、『日本書紀』が一四三、『源氏物語』が七六、『延喜式』が四六、『和名抄』が四〇、『古事記』が二四、『伊勢物語』が一七、『土佐日記』が一六、『宇津保物語』が一三、祝詞が九、催馬楽が八、『大和物語』が五、『拾遺和歌集』、『続日本紀』、『落窪物語』がそれぞれ四、『真名伊勢物語』、『古今集』、『竹取物語』がそれぞれ一(二)。題号に「歌文」というが、八代集からの出典はほとんどなく、中心は『万葉集』。これが全体の半数を占める。その他、『日本

書紀』『古事記』『延喜式』など上代の文献が多い。上代の文献から語彙を収集して、小本の歌書に仕立てるとするのは、当時の歌書としても斬新であつた。『万葉集』の語彙を集めたものとしては、『万葉仮名遣』（元禄二年（一六九八）刊）が同じく小本で出されているが、こちらは、万葉仮名の用法を示したもので、意図するところが異なる。そのため、『歌文要語』のような意義分類ではなく、かなの順を採用する。語釈も少ないなど、形式的にも相違する。他に、散文からの収録語彙が多いところも『歌文要語』の特徴である。これは歌文の「文」を意識したものであろう。当時、和文のためと謳った語彙書などはなく、この点も新しい。『万葉集』の語彙には、後述の「ミヤビヒト」など、綾足独自の訓もあり、また語釈も丁寧で初学者への配慮を示すと同時に綾足の学問の成果をあらわしている。

『はし書ぶり』は、八代集の中から端書（詞書）を、文を書き習う人の便りとするため、抜き出してまとめたもの。歌を端書と併せて挙げる場合もあるが、わずかに六例に過ぎず、基本的に端書のみ。これも割注にて語釈等を示す。小本一冊。刊行は明和三年七月。『歌文要語』と同じく、「吸露庵蔵板」とあり、須原屋市兵衛・三河屋半兵衛の二書肆を記す。綾足凡例には、「こはそのかいぎまを見習ふべきために、かつぐ／かいつめぬるなり。其用うべき詞は、すでに歌文要語に出せり」とあり、内容の上でも『歌文要語』と対をなすものとの位置づけがなされている。題詠に関する歌書はすでに多くあつたが、端書に関する書などはなく、さらに歌をほとんど挙げないというのは、これもまた斬新なものであつた。また、後に『後篇はしがきぶり』を安永二年正月に刊行する。こちらは江戸須原屋市兵衛のほか、大坂荒木佐兵衛、京都梅村宗五郎の三肆。こちらは吸露庵蔵版ではないが、出版には門人、藤原夜波美・橘琴之らの尽力があつたことが、二人の序跋より窺える。八代集から端書を録した前編に対し、後編は綾足自身の手になる端書載せる。上代語を多用し、また内容は、「君に奉る詞」「祖父に奉る詞」など人事の場に関する端書が中心であり、近世社会への即応を意図したものである。前編と相補的な関係にある。

『万葉集』を規範としてその重要性を言挙げし、また和歌に合わせて和文を提唱したのは、賀茂真淵であつた。綾足はこの真淵和学に対応する歌書として、『歌文要語』以下を出版したといえる。それを小本で出したことに、実作の場を意識した、実用的な本たらしとの意図を見る。当時新しかった真淵の和学をいち早く実作の場に対応させようとしたことに綾足の出版活動の意義が認められる。

以上、綾足の小本の歌書出版の概要を簡単にまとめた。さらに、この『歌文要語』と『はし書ぶり』は、綾足の和学の書としては、珍しいことだが、後、文化文政にかけて『増補歌文要語』（文化五年〈一八〇八〉刊）、『新撰はし書ぶり』（文政三年〈一八二〇〉刊）という増補改訂版が製作・刊行されている。そこで、この増補改訂版の刊行の背景を明らかにし、享受という視点から、近世の歌書出版における綾足の活動の意義を跡づけたい。なお、この『増補歌文要語』『新撰はし書ぶり』については、『建部綾足全集』の解題（３）や、また刊行に関与した早川広海、石津亮澄、書肆奈良屋長兵衛といった諸家の伝記研究中にわずかな言及（４）があるのみという状況のため、ここでは、内容も含め、成立背景を詳細に論ずる。

## 一 『増補歌文要語』概要

まず、『増補歌文要語』について述べる。『増補歌文要語』の版元奈良屋長兵衛は、寛政二年（一七九〇）改正の『板木総目録株帳』に、同書の板株を取得している旨の記載があり（５）、奈良屋の歌書目録にも書名が見つけられる。後述の小原広敷序や林景寛跋に拠れば、その後の和学の進展から誤りと見られる点が散見されること、また収録語彙が少ないという『歌文要語』の不備を解消するために、『増補歌文要語』は企画されたようである。

まず、『増補歌文要語』の書誌を内藤記念くすり文庫蔵本（請求記号、三八二二九）に基づき略記する。中本二冊（十七・九センチ×十二・〇センチ）。浅葱色布目地表紙。題簽に「増補歌文要語 続編上（下）」（綾足の『歌文要語』に対して続編と称したか）。行数については、半葉毎に五行。双行小書き。界線あり。柱題「歌文補」。刊記に「文化五年戊辰七月吉日／京都 額田庄三郎／江戸 西村源六／同 同宗七／大坂 葛城長兵衛」。綾足の『歌文要語』（以下、原本とも称す）は、十五・五センチ×十一・二センチ（６）。これに比べると、『増補歌文要語』の方がやや縦長で大きい。この時期の小型の歌書は中本型が主流となので、それを承けて中本とな



ったものであろう。版面の方は、上下が子持ちの双边であつた原本の匡郭を、单边とするなど細かな点を除けば、概ね原本の趣きをよく写している。

編者は甲斐の早川広海。本姓は安田氏で、俳号を漫々といい、多善（多膳とも）と称した。寛政十年京都に上り、賀川満定に産科を学ぶ。その後、大坂に出て吉益掃部について内科、享和二年（一八〇二）には長崎に赴き、蘭方も学んだ。享和三年に帰郷し、開業。俳諧は、蘭更・可都里に師事し、和学を荒木田久老について修めている（7）。

序に、「享和三とせ霜ふり月みなもとの広養父」。跋は年次を記さず、「美作国 林景覧しるす」とある。「みなもとの広養父」は小原広敷をさすこと、綿谷雪に指摘がある（8）。小原広敷は、清水浜臣『甲斐日記』に「市川のあかたつかさの下司なる小原広養父」とあり（9）、市川の里正の下司という。『広海歌集』（10）にも多くその名が見え、広海とは郷里を同じくすることもあり、昵懇の間柄であつたと思しい（11）。跋者の林景覧については未詳ながら、『広海歌集』に「小林景覧」という名が三箇所に見え、大坂を発つ折に和歌のやり取りをしている。おそらく同一人であろう。在坂中の歌人と見るべきか（12）。昵懇の人間に序跋を依頼したものと見える。

早川広海自身の「附言」には「享和元年六月難波津の旅のやどりにして甲斐国早川広海しるす」とあり、享和年間にすでに成稿していたものと思しい。確かに広海はその後、長崎に赴き、帰路大坂に寄るものの、刊行の文化五年にはすでに甲斐に帰郷しているため、年立てから考えても妥当な成稿時期といえる。

## 二 『歌文要語』と『増補歌文要語』

以下、『増補歌文要語』の内容について述べる。小原広敷序に、

さきに歌文要語てふふみのあなれど、ことすくなく、もれたるも多かめればとて、わがとも早川広海、ことのついでにこれかれの文の中より、いとみやびたる言の葉をとうで、さきのふみにくはへて、ものまなべる人のたづきとなしぬ。うひ学のともがらこのふみをしもよく見て、なほよくまねび、ふみぶりの時よをたかへずものかきなさんにはなほしかずけり。

とあり、原本『歌文要語』の収録語彙の少なさを、主要な古語の脱漏への憾みをいう。また景覧跋ではその他、広海が原本の誤謬を正したことに言及している。

近き世に歌文要語といふ書のあなれど、その中には、なほさだかならぬこと、いぶかる所もありて、蛙なす力なき学びには、くもり夜のまどはしかるべきを、こたび広海大人難波に來まして、何くれと古言解あかし給ふまにく、かの書にもらせし事を、古き書どもにかうがへあはして、浦辺の芦のかりそめに書つづられしは、いさゝむら竹いさゝけなる事にしあれど、初学のたにはいともめでたき是のひとぢぞよ。

「初学のたには」は初学のためにはの意。『万葉集』に用例を持つ上代風の表現である。では、その誤謬の訂正とはいかなるものであつたか。広海自身の「附言」には、

さきにおこなはるゝ歌文要語の文の中に、こともときざまも、いかにぞやとおもふ事のあなれど、なま／＼なる学びに、かにかくといはんも、人わらへなるわざなめれば、原本のまにく／＼置ぬ。されど猶ことときひがめ、思ひ誤れりとおぼゆるは、打捨置がたくて、こち／＼あらためて、さておのれが心にをかしと思ふ言どもを、なにくれと書くはへつ。えせわざするしれもの、となとがめ給ひそ人。

このように、原則、綾足の原本を尊重したこと、どうしても間違いだと思われる点のみ訂正に及んだことを述べており、景覧跋に対して謙遜ともとれる書きぶりである。しかし、実際には同書の中身はとも綾足の原本を尊重しているとはいいたい。以下、詳細に両書を比較し、この点を明らかにする。

まず、全体の構成だが、両書ともに引用書目とその略称を巻頭に掲げる。『増補歌文要語』では原本に見られなかった『新撰字鏡』『紫式部日記』の二書を追加している。ただ、原本は本文中で『新撰字鏡』に言及があるので、実質は『紫式部日記』のみを新たに用いているといえる。略称は一部変更、部立ては原本と共通だが、最後の二つ「○ことばの品くさぐさ」「○神仏の部に用う（『増補歌文要語』は「用ふ」べきことば）」の順序が『増補歌文要語』では逆となる。これは、部立てにあてはまらない言葉を集めた「ことばの品くさぐさ」の後に「神仏」の部を立てる原本の構成を非合理と見たものであろう。

次に個々の収録語彙だが、原本の語彙数は先述のように八四〇。『増補歌文要語』は一二八と、『増補歌文要語』の方が二八八多い。しかし、差分の二八八は単純な語彙の追加というわけではない。収録語彙には大幅な出入りがある。もちろん、「天の部に用ふべきことば」の「空は墨をすりたるやうにて日もくれにけり ○源」（「源」は『源氏物語』。出典を示す）のように、原本をそのまま引く例も二七例存在する<sup>(13)</sup>が、全体から見ればわずかである。その他の語彙は、仮名遣いや用字の変更、語釈の追加、あるいは類語への差し替えなど何らかの形で原本に手を加えたものや、広海自身が新たに追加したものとなっている。以下、原本の語彙に広海がどのように手を加えているのか、具体的に見る。

まず、凡例にある通り、原本の誤りを正すもの。たとえば、原本「地の部」の「○地震（ナヒフル）」○日（「○日」は『日本書紀』）を『増補歌文要語』は「○地震（ナキ）」○日（なみふるともいへり）」としており、原本の契沖仮名遣いの誤りを訂している<sup>(14)</sup>。他、「人の部」の「豪傑（イサオシビト）」の訓を「イサヲ、シビト」に改めるのも同様の例といえる。また、「衣の部」の「麻太良夫須麻 ○

万」を「万太良夫須麻」とする例は原本の引用の誤りを訂したもの（『万葉集』に「麻太良夫須麻」の用字は見られない。「ことばの品くさぐさ」中の「横言（ヨコミト）」○万」を「横辞」とするのも同様の処置。

右は単純な引用の誤りだが、その他、原本刊行以降の和学の成果を取り入れて、語を訂した例もある。「人の部」の「○游士（ミヤビ、ト）」○万 風流人（ミヤビヒト）也」の修訂はその好例であろう。『増補歌文要語』はこれを「○風流士（ミヤビヲ）」○万」とする。この語は、『万葉集』巻二における、石川女郎と大伴田主の贈答歌「遊士と我は聞けるをやど貸さず我を帰せりおその風流士」（一二六）、「遊士に我はありけりやど貸さず帰しし我そ風流士にはある」（一二七）の「遊士」「風流士」の訓を採録したものである（15）。鈴木淳に拠れば（16）、綾足の訓ミヤビヒトには、「宮人」との混同を避ける意図があり、荷田春満・賀茂真淵の用いた訓ミヤビトと、本居宣長が提唱した訓ミヤビヲの間の過渡的な訓と位置づけられるという（17）。広海が拠ったのは橘千蔭『万葉集略解』（寛政八年刊）に載る宣長の説であろう。他にも『増補歌文要語』には『万葉集略解』の影響と思しき箇所が散見する。

たとえば、原本「山の部」の「須蘇廻（スソワ）」○万」の語。『増補歌文要語』はこれを、

須蘇廻（スソミ） ○万 廻をわと訓（ヨム）はわろし。みと訓べし。証有。

とする。「須蘇廻」は『万葉集』巻九、「登筑波山歌一首」の反歌、「筑波嶺の須蘇廻の田居に秋田刈る妹がり遣らむ黄葉手折らな」（二七五八）に拠る（18）。橘千蔭『万葉集略解』はスソワの訓を本文では採用するものの、

スソワは麓にめぐれるなり。宣長はスソミと訓むべしと言へり。

これも宣長の訓スソミを挙げる。『増補歌文要語』もこれに拠ったものと見える。なお、「須蘇廻」は『万葉集』にこの一例のみだが、「須蘇未」の用字が二例（三九八五、四三二六）ある。広海という「証有」はこれを指すものであろう。

なお、その他『増補歌文要語』が「○野豆可佐（ヌツカサ） ○万」「○春野焼野火（ハルノヤクヌビ） ○万」等、「野」をヌと表記する点も当時の和学の学説を反映してのものである（19）。綾足の原本にも、「○野鳥雞（ヌツドリキミシ） ○日○万」（20）のように、野をヌと表記する例はあるが、「○野火（ノビ） ○万 春野をやく火」や、「○山乃頭可佐 ○万」の語釈に「野豆可佐（ノヅカサ）」の語が出る等、『増補歌文要語』ほど徹底されていない。

右の諸例は、広海による『歌文要語』補訂のうち、その意図が比較的理解しやすいものである。しかし、『歌文要語』と『増補歌文要語』の語彙の出入りについては、合理的な説明がつかないものの方がむしろ多数を占める。例えば、原本「天の部」、

月人壮（ツキヒトヲトコ） ○万 月也。月読とも。

この「月人壮」という語であるが、『増補歌文要語』はこの語を削除し、替わりにとすべきか、

月読壮子（ツクヨミヲトコ） ○万 月也。

の例を挙げる。前者は『万葉集』巻十に、後者は巻六にそれぞれ用例を持ち、引用の誤りや、綾足の後の新訓等はなく、「月人壮」の語を削除する理由はない。広海自身、自らの家集において、

八月十五日夜（寛政十二年）

此夜らもいたくだちぬわが宿の木ぬれにゆつれ月人をとこ

と「月人をとこ」を用いての詠歌もある。広海の側に、「月人壮」を収録しない合理的な理由はない。強いて理由を求めるとすれば、綾足の『歌文要語』に対する一種の対抗意識を想定するのが妥当なところではなからうか。単純な増補改訂をする意図は広海にはなかったと見るべきであろう。

収録語彙数に話を戻せば、『歌文要語』の語彙数八四〇のうち、『増補歌文要語』がほぼそのままのかたちで再録するのは、先にも述べたとおり、二七例。右に挙げたように、なんらかの改変を施して再録した例はおよそ七四例<sup>(2)</sup>。両者を加えても一〇〇程度。残りの七〇〇強を『増補歌文要語』は捨て去っている。つまり『増補歌文要語』の語彙一二八のうち、一〇〇〇以上が広海による追加。いい換えれば、九割は広海が新たに収集した語彙ということである。綾足の『歌文要語』を増補したというよりも、広海は綾足の『歌文要語』に倣い、自らの『歌文要語』を新たに作ろうとしたというべきである。あるいは、綾足の収集した語彙すべてを原本にあたって精査するよりも、こちらの方がはるかに作りやすかったという理由もあろうか。

なお、九州大学附属図書館蔵本の『歌文要語』(五四五／カ／九)は、『歌文要語』一冊と『増補歌文要語』二冊を取り合わせたもので、大きさは、十五・六×十・八センチと、『歌文要語』に合わせて『増補歌文要語』も小さくつくられている(刊記を欠く)。また、無窮會神習文庫本『歌文要語』(二〇八一六)と『増補歌文要語』(二〇八三四)も大きさが揃えられている(こちらは十五・九×十一・二センチ)ので、これも本来はツレであったと見るべきであろう。こちらの『増補歌文要語』は前掲の刊記を備えている。重複語彙が少なかったために、併せて売られることもあったと考えられる。

しかし、重複語彙がある点や、序跋の内容から見ても、『増補歌文要語』は単独で用いられることを意図しているように見える。ただ、その場合、題簽に「続編」とあるのが不審である。このように、『増補歌文要語』は全体の編集がやや不統一である。これは、書肆の側と広海の側との間に編集に関して、なんらかの齟齬があったものと考えられるが、これについては『新撰はし書ぶり』の編集のあり方と併せて後述したい。先に『新撰はし書ぶり』の概要について述べる。

### 三 『新撰はし書ぶり』概要

まず、大阪府立中之島図書館蔵本（二二四―六）に拠つて、『新撰はし書ぶり』の書誌を示す。中本（十七・八×十二・二センチ）二冊。浅葱色布目地表紙。外題「新撰はし書ぶり 下」（上は題簽に欠損あり）。大きさや表紙は『増補歌文要語』に合わせたものか。匡郭は四周单边。ただ、上部を区切り頭書欄を設ける。柱刻は丁数を載せるだけの簡素なものだが、ノドに「はし書上（下）」と記す。先の『増補歌文要語』とは違い、版面に、綾足の原本を意識した跡は認められない。序は「文政二のとし冬 荷田信美」。他に、「文化十四年七月」の石津亮澄の凡例をもつ。巻末には付録として、『落窪物語』の消息文を抜き出したものが付く。刊記は「文政三年庚辰歳三月／書林／京都 額田正三郎／河南四郎兵衛／江戸 須原屋茂兵衛／前川六左衛門／大坂 山川屋清右衛門／奈良屋長兵衛」となっている（22）。

凡例を記した石津亮澄は大坂の和学者。尾崎雅嘉に和歌を学び、のち、本居大平に入門。本書も彼の手になると思い。内容については、すでに『建部綾足全集』の「はし書ぶり」解題に述べられているが、『はし書ぶり』原本の端書をすべて収録し、さらに二倍近い分量を増補したもの。こちらは『増補歌文要語』と違い、収録された端書に出入りはない。内容上の細かな違いとして、部立てに、原本にない、「哀傷部」「賀部」「離別部」が追加されている点が挙げられる。原本の綾足凡例に、部立てについて、

又、わかれ・哀傷など、こまかにわかたんもあまりにうるさかるべければ、物にしたがひて、雑とまじらひの部に入れぬ。

とあるのとは、考えを異にする。ただし、二倍以上の端書を収録する『新撰はし書ぶり』にとつては当然の措置といえる。また端書だけでなく、歌を掲出するか否かという点も、綾足『はし書ぶり』が、

○はし書と歌とひきあはせて意をうべき物は、ならびに歌も出せり。

とするのに対し、『新撰はし書ぶり』凡例は、

亦、うたとてらしあはせぬべきものは、是をもあげてかしら書とす。もとよりはし書といふもの、上にもいへるごとく、歌の心をあかさなために、かけるものおほければ、歌をいさざれば、はし書のやうをも、くはしくはしらぬものなれば、おほかたはいだせり。

と述べる。綾足『はし書ぶり』が全二一七例中、六例しか歌を出さないことは先に述べた通り。対して『新撰はし書ぶり』は全三四八例中、二八三例に歌を載せ、その割合は大幅に増加している。これは綾足の凡例に「もはら文書ならふべき人のためにのみせるわざ」とあるように、和文の手本という側面を強く出していた原本に比べ、『新撰はし書ぶり』が、むしろ歌を詠む際の、端書の手本という面に重点を置いているためであろう。

そして、本書の成立に関して、最も注目されるのは、亮澄凡例の以下の一文である。

はし書ぶりといふ文は、さきに建のあやたりがものせしがあるを、それには引出たるはしがき数おほからずとて、さらに、甲斐の国人、早川広海が補ひものししを、今はそのふたつをひとつにあはせて、又原本には、本書のしるしも、古今後撰などやうに、かきしのみにて、巻のついでをしるさぬを、ものたらぬこゝちして、今はことごとく本書によりて、一二などゝついでをしるしつ。



綾足の原本と広海が増補した「はしがきぶり」を併せて『新撰はし書ぶり』として刊行したという部分は興味深い。また、亮澄の凡例の末尾には、「此くさぐさのことどもは、さきに、広海がものせる書のはしにかけものゝあるを、今又、これかれとかきくはへてものしつ」と、凡例自体も広海の稿をもとにした旨を書き添えている。『綾足全集』の『はし書ぶり』解題は、この凡例に触れ、

これによれば早川広海編にかかる「はしがきぶり」が別に存在したことになる。早川広海は、綾足の『歌文要語』の増補版を刊行しており、或いは『はし書ぶり』増補も編んでいたかもしれないが、その存在は確かめられていない。

と簡潔に述べるが、ここではもう少し広海の関与のあり方について踏み込みたい。『大坂本屋仲間記録』『新板願出印形帳』によって確認すれば、『新撰はし書ぶり』の出願は、文政元年に、

増補新撰はし書ぶり

撰者 甲斐国

広海

全部式冊

開板人

本町二丁目

奈良屋長兵衛

右のように広海を撰者として出されている。この時は不備があつたらしく、同二年二月に二度目の出願をしている。こちらも撰者は「甲斐国 橘広海」とある。刊年も接近しており、以降の出願も見られないため、現『新撰はし書ぶり』の出願と見てよい。ここから、亮澄の果たした役割はあくまで補助的なものと考えられる。

ここで想起すべきは、先の『増補歌文要語』の編纂態度であろう。「増補」と謳いながら、その実は再編に近いもので、用例の出入りも甚だしい。広海の撰した「はし書ぶり」もおそらく、そうした態度で編纂されていたと考えてよい。亮澄凡例の「そのふたつをひとつに併せて」という箇所も、その推定を裏打ちする。広海の「はし書ぶり」の原本との出入りの多さを整理し、完全な増補版に仕立てあげるとというのが、亮澄の役割であつたと思しい。実際、『新撰はし書ぶり』は原本の端書きをすべて収録している。

右の『新撰はし書ぶり』の編集から、先にあげた『増補歌文要語』の諸問題も、ある程度説明が可能である。おそらく版元奈良屋の意図としては、『増補歌文要語』も、『新撰はし書ぶり』のような完全な増補版を目指したものであった。ところが、広海の『増補歌文要語』は、その意図とはかなり違ったものとなった。広海自身にも自覚はあったであろう。『増補歌文要語』広海凡例にある原本を尊重したかのような口ぶりは書肆の目を欺くための韜晦の身振りと思しい。詳しい経緯は資料が残らないために不明ながら、版元奈良屋と広海との間のなんらかの確執を、『増補歌文要語』と『新撰はし書ぶり』の編集から想定することは許されるであろう。

なお、補足として亮澄と奈良屋との関係について。中澤伸弘の先行研究を基に(23)、略記する。まず、橋本稲彦『紫文製錦』との関わりについて。これは『源氏物語』を抜き書きし、題を設け整理分類したものである。中本八冊。巻四の巻末に「文化十癸酉六月吉旦／大坂書林宣英堂奈良屋長兵衛板」とあるが、『大坂本屋仲間記録』によれば、二冊ごとに、編次をかえて順に出されたものらしい。この三巻の末尾に以下の注記がある。

此ふみ恋部に題をまうくる事は、凡例に橋本氏のことわれりしには、ことたがひたるやうなれど、こたび板にえらんとするをり、題なくとはいとさうぐしく、又うひ学の人のためにもやくなからん、などいふ人のあるに、橋本氏既に身まかりたれば、さらにはかるよしなきを、石津亮澄ぬしは此ふみにつきて、はじめより彼人とともに校合などせられしかば、つきなからずとて、これにあとらへつけて今あらたに題をまうくる事にはなりぬ。猶これより下の巻々の校合はみな石津氏のなせる処也。

葛城輝敖識

これは同書の稲彦凡例に「恋部は題をまうけがたきゆゑあるによりて、すべて題をまうくることなし」とするのに反し、巻三恋部が「初言恋」「通書恋」以下、二十八の題を設け、分類したことへの書肆の弁解ともいべきもの。石津亮澄の同書への関与が知られる。また先に、『新撰はし書ぶり』に『落窪物語』から消息文を抜き出したものが付録として付くと述べたが。その奥に、

すべての物語どもの中の消息文は、上しを略きて、その大意をのみ書たれば、言すくなくて、うひまなびの人は、まどはしかるべし。この落窪ものがたりに見えたるは、外の書どものよりは、はじめ終ありて、心得やすかめれば、今は是のみを出せり。猶源氏ものがたりのは、紫文消息といふ書にあれば、それによりて見るべし。

とあり、この付録が、『源氏物語』の消息文を抜き出した『紫文消息』（橋本稻彦編、文化四年、奈良屋長兵衛他刊）と対をなす旨が述べられている。『紫文消息』（および『紫文製錦』）は、頭書欄を設けることや、ノドに書名を記すことなど『新撰はし書ぶり』と版面が酷似している。版式を合わせたものであろう。奈良屋と亮澄と、また稻彦との一連の仕事として捉えるべきものである。

その他、『和歌新呉竹集』（文化十五年刊）の凡例には、

これはさきの呉竹集にもれたる詞どものおほかるを、古人池永秦良くちをしくおもへりしにや、これかれの注尺書の中よりたづね出て、かのふみと同じさまなる事どもを、こゝらあつめおけりしを、ふみあき人かつらぎもとなり、つたへもたりしなり。こたび書きよめて、すりかたぎに物すとて、おのれにかうがへたゞせよとこふ。秦良も浪速人にて、名をきゝわたりし人なれば、いふにまかせて一わたりよみわたすに、ふとあやまてりと見ゆると、仮字のたがへる処のあるとをたゞしあらためて、かえしあたふついでに、このふみとさきの呉竹集とをあわせ見ば、いにしへの雅言の注尺をもとめんに、おほかたもるゝものはあらじ、とおもふよしをひとくたりそのはしにものする事になむ。

葛城基成（奈良屋長兵衛をさす）から依頼され、池永秦良の『和歌新呉竹集』を校訂した旨の記述がある（24）。これも『新撰はし書ぶり』の刊行に類する事例として注目される。このように亮澄は物故した人物に代わり奈良屋版の小型の歌書の校訂に携わることが多かった。また、先に述べた確執もあろうが、甲斐帰郷後の広海に代わり、奈良屋が校訂を依頼する人物として昵懇の亮澄はまさに適切といえる。

#### 四 刊行の背景

以上、『増補歌文要語』と『新撰はし書ぶり』刊行の経緯を摘記した。ここで改めて、この時期に大坂で綾足の二書の増補改訂版が出された意味についてまとめておく。まず、注意すべきは、二つの増補改訂版に共通する綾足の原本を尊重しようという意識の低さである。

『歌文要語』『はし書ぶり』二書の増補に携わった早川広海は、国文学研究資料館所蔵依田喬長宛広海書簡(25)では、依田喬長所望の『冠辞考』の替わりとして、『詞草小苑』を送っている(26)。二書以外にも綾足関連の書物を所持しており、綾足の学問にかなり親しんでいたものと見えるが、『増補歌文要語』の内容を見る限りではその学問を尊重していたようには思われない。

亮澄についても同様である。先に『新撰はし書ぶり』が端書だけでなく、多くの和歌を載せる点で、綾足の『はし書ぶり』と性格を異にする点について触れた。これは当時の題詠批判の流れと関わるものであろう。高野奈未「賀茂真淵の題詠観」(27)は、真淵が題詠に替わる詠歌の形態として、端書の重視および、屏風絵を基に歌を詠むことを奨励したと指摘する。亮澄は同じ文政三年に『屏風絵題和歌集』を刊行し、屏風絵を詠んだ和歌を分類、整理している。『新撰はし書ぶり』『屏風絵題和歌集』ともに、題詠批判によって新たに注目された歌詠の形態に対応する、和歌の工具書と位置づけられる。こうして見ると亮澄は亮澄自身の意図を持って『新撰はし書ぶり』の編集に関わったものといえそうである。その意図と綾足の原本の姿勢との間には明らかにズレがある。しかし、『新撰はし書ぶり』が巻末に『落窪物語』の消息文を収載するように、原本の、和文の手本としての性格は全体として失っていない。

編者らの立場は概ね右のように想定しうる。広海も亮澄も概して綾足の学問への評価は高くない。ただし、『増補歌文要語』を『歌文要語』原本と併せて売り出し、また亮澄に依頼し、綾足と広海の「はし書ぶり」を併せて一書にさせるなど、版元奈良屋長兵衛の側には、綾足の原著へのこだわりがあったものと見える。それは、『続近世畸人伝』(寛政十年刊)以来の和文の名手としての綾足の名望に恃むところがあつたものと考えたい。

文化文政のこの時期の奈良屋は、同種の小型の歌書を多数刊行している。行論の中で触れたものも含め、管見に入ったものをあげれば、『あやはとり』（漫々編、文化元年、奈良屋長兵衛他刊）、『紫文消息』（稲彦編、文化四年、葛城長兵衛他刊）、『新撰和訓部類』（稲彦編、文化七年、葛城長兵衛他刊）、『紫文製錦』（稲彦編、文化十年奈良屋長兵衛他刊）（28）、『歌文用例』（文政元年、葛城長兵衛他刊）、『万葉二聖集』（亮澄編、文政二年、葛城長兵衛他刊）、『屏風絵題和歌集』（亮澄編、文政三年、奈良屋長兵衛他刊）、『万葉梯』（稲彦編、天保五年、葛城長兵衛刊）など。当然遺漏も少なくないであろうが、これのみでも、真淵以来の和学者の歌論に対応した和歌の手本書や、これも真淵の提唱以来盛んに行われた、和文の手本書等を多く出している。和学の隆盛を受けて、初学者向けの書物を、主に中本型で、次々に刊行していったものと見える。

また、これも中澤伸弘にすでに言及があるが（29）、吉備津神社編『藤井高尚伝』（30）は高尚の著作のうち、「雑書」として「うひぶみのしるべ」なる一枚摺を紹介している。少々長いが全文を引く。

おのれいつとなく胸をやみて、あつしくなりけるままに、くすしをとめて、こぞの冬より都にまゐり、四條の大路なる立売町といふ処に、がうなのやうに人の家を借りてをるに、怠るとはなけれど、すこしよろしければ、物習はんといふ人々をつどへて、伊勢の物語・源氏の物語などとききかせ、又題を出してうひぶみの書き習はすとて、文会といふ事せしに、そのをり城戸千楯が懷よりとり出でて見せけるは、紫文製錦又は増補歌文要語などとうはがきしたる書なり。めづらしくおぼえてかたはしより見しに、製錦は春・夏・秋・冬・恋・雑の部を分ち、かずかずの題をしるして、その題にあひたることばの類を、源氏物語のなかよりとり出でて、あまた書き列ね、要語もくさぐさの部をわかつて、同じ類の詞をあつめたるさまは似たるものから、こはもろもろの物語・冊子・日記やうのものにわたりて広し。うひまなびの人の為には、いともいともよき書どもかな。これによりてなば、題の文をかかむこと、いとたやすかるべく、中昔のよき文のさま、おかしき詞のふりをも、はやく見習ひかきなならひとりなん。そもそも、文はよく学びえたらむには、おもふ心のくまものこさず書きあらはしぬべく、何にてもしるしおきて、千とせの後にも伝ふべきわざぞかし。かくやんごとなきものなれば、人にも教へて書かせまほしくて、かねてより思へりしは、うひ文ならはすに、始の程はまこ

とにありつることは書きえがたく、題によりてともかくものせんは、やすかるべしと思ひとりて、題を出しつつかかせけるに、見するにたよりよき書のなきなん、あかずくちをしかりしを、此ふた書を見つけたるうれしき。よき方人えたるこちしけり。ましてかきならふ輩は、しるべの人をさきにたてて、しらぬ道ゆくやうになんおぼゆべき。かかる書どもの世になからましかば、たとへば、花紅葉月雪などのやうのこと、かかむとするにも、いまだしきは物語冊子などの文、そらにえおぼえねば、例となるべき詞をここかしことめても、とみに探しいでがたく、倦みてはやみもし、又今の世のいやしき詞つきにかきなどしなまし。しかすれば、わろき癖のつきてなほりがたきものになん。文化八年四月二十六日。藤井宿禰高尚

同書に拠れば、「欄外に大阪本町二丁目書林葛城宣英堂・奈良屋長兵衛」と記すという。高尚による『紫文製錦』と『増補歌文要語』の広告文というべきものである。『紫文製錦』『増補歌文要語』ともに奈良屋の書物であり、奈良屋の依頼に拠るのであるが、「文会」の最中に城戸千楯が懷中から二書を取り出したとあるので、あるいは千楯が間に立ったものであろうか(31)。『増補歌文要語』(および『紫文製錦』)の和文製作への益を述べる高尚の口調の向こうに、和文の流行を意識し、「文会」という和文製作の現場に自らの本を売り込まんとする奈良屋の意図を見るのはあながち間違いではないであろう。和学に益ある書物を体系化した、尾崎雅嘉『群書一覽』(享和二年(一八〇二)刊)は、「和文類」という部立を立て、『歌文要語』、『はし書ぶり』、『後篇はしがきぶり』をとりあげる。この部立にて採録されるのは、綾足の書の他、『扶桑拾葉集』、『扶桑拾葉別集』、『拾遺後葉集』、『文の栞』といった文集と、伴蒿蹊の『国文世々の跡』『訳文章諭』のみ。実作の際の参考書は綾足の本のみといえる。和歌についてはともかくも、和文の参考書は享和になつてもいまだ少なく、綾足のこの本が当時も代表的なものであった。和学の流行を意識し、和文関連の書を中本で積極的に刊行していった奈良屋が、綾足の小本の歌書の再刊を企てたのは当然のことであった。

おわりに

『増補歌文要語』および『新撰はし書ぶり』の内容について略述した。刊行の背景に当時、小型の歌書の出版、また和文関連の書物の出版を多く手がけていた奈良屋長兵衛が、綾足の和文の作り手としての評価を意識し、増補版の刊行を主導したことを確認した。これは第一部第四章で指摘する、勝尾屋六兵衛・吉田新兵衛の『本朝水滸伝』改題後修、加賀屋善蔵による『西山物語』再印と併せて、この時期の大坂の書肆が綾足の和文に注目していたことと軌を一にするものである。ただ、実際に増補改訂に携わった広海や亮澄の思惑もあり、奈良屋の意図が充分に果たされたかは疑問なしとはしない。

『増補歌文要語』および『新撰はし書ぶり』の刊行は、書肆の主導によるものであり、また和学の流行を前提としている。ある程度の需要が見込めたのであろう。対して、綾足の『歌文要語』や『はし書ぶり』は冒頭で示した通り、「吸露庵蔵板」と、綾足の蔵版であった。需要があったというよりも、この本によつて、門人たちを教化し、歌文の製作へ専心させるために刊行されたものであった。

また、『歌文要語』のように、『万葉集』や『日本書紀』等の上代の語彙を集めたものや、『はし書ぶり』のように端書のみを集めたものを小本の歌書で出すという発想が、当時の歌書出版の流れでいえば、破格なものであった。その新たな形式を生み出したものは、特定の先例などより、綾足の和学が実作の場と密着したものであったところに求めるべきであらう。たとえば、すでに指摘があるが、綾足の門人による小本の枕詞研究書『詞草小苑』（平湯鞍・藤原熊在編、安永二年刊）は、発語（いわゆる枕詞）を、枕詞ではなく、それがかかる言葉から検索できるように作られている。いわば実作の場から発想された、枕詞研究の書といえる。『歌文要語』や『はし書ぶり』の新しさも、自らの志向する歌文を、門人たちにも実作させるための工夫に拠るものであろう。『増補歌文要語』や『新撰はし書ぶり』などの増補版が作られたのも、こうした実作の場から発想された、実用性の高い書物であったためといえる。

注

(1) 玉城司「建部綾足の俳諧と片歌」(『国文学解釈と鑑賞』第七四卷第三号、二〇〇九年三月)は「綾足の妻きつ(橘・沖津)の書き入れか。筆蹟はきつの筆蹟によく似ている」とする。本章では、綾足の和学がどのような層に向けられたのかを問題にする意図でとりあげる。書き入れの主については特に問わない。

(2) 一つの語彙に対し、複数の出典を挙げる場合もあるが、ここでは、一つ目の出典のみを採った。

(3) 『建部綾足全集』第七巻。『歌文要語』解題は稲田篤信、『はし書ぶり』解題は風間誠史がそれぞれ担当している。

(4) 綿谷雪「遊学中の早川広海」(『伝記』第一〇巻第二二号、一九四三年二月)、清水茂夫「早川漫々の研究」(『山梨大学学芸学部研究報告』第一六号、一九六六年二月)、中澤伸弘「近世後期出版書肆の二側面——宣英堂葛城基成伝記傍証——」(『國學院雑誌』第九八巻第四号、一九九七年四月)、同「近世後期浪花国学者石津亮澄の一考察」(『國學院雑誌』第一〇〇巻第九号、一九九九年九月)、同「三人の広海——近世後期歌人伝の再検討——」(『皇學館論叢』第三六巻第一号、二〇〇三年二月)、石川博「江戸期の文化人——早川漫々とその周辺——」(『山梨学院生涯学習センター研究報告』第二二輯、二〇〇九年三月)、管宗次「石津亮澄について」(『武庫川女子大学紀要 人文社会科学編』第五八巻、二〇一〇年)等。

(5) 大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録』に拠る。

(6) 『歌文要語』は内藤記念くすり文庫蔵本(三八九六七)にて採寸。『歌文要語』の大きさは諸本に拠って差があるのだが、一部(後述)を除いて総じて『増補歌文要語』より小型。

(7) 清水茂夫「早川漫々の研究」(『山梨大学学芸学部研究報告』第一六号、一九六六年二月)に主に拠った。帰郷の年次には諸説あるが、ここでは清水論文に従う。

(8) 前掲綿谷論文。注(2)参照。

(9) 『甲斐叢書』第一巻(第一書房、一九七四年)。



- (10) 安田登『早川漫々伝』(一九三三年) 所収。
- (11) 国文学研究資料館蔵甲斐国下井尻村依田家文書、早川広海書状、二六通一綴(27D-4049) にも広敷の名が出る。
- (12) 以下、『広海歌集』に「小林景覧」の名が出る箇所を引用する。

難波を出でたゝんとする時、小林景覧が許につかはしける  
ありつゝもことしかよはゞ五百重山千へへだつとも何かいとはん

\*

難波を出でたゝんとする時、増井成之が我よりさきにかへる君かなとよみておこせたりけるかへし  
よしや君難波の春を待ちつけて梅のにほひにたぐふべらなり

おなじ時、橋本稻彦が旅のやどりにつかはしける

立ちかへり又あふことも難波がた浪のなごりは見るめさへうし

おなじをり小林景覧の歌にこたふ

みづのえの浪のなごりはつきせねど松とこそ聞けいざかへらなん

\*

難波を出でたゝんとする日、雪の降りければ、小林景覧が許より、人みなのをしむ心のつもりてや八重降りしけるけさ  
の白雪とよめるかへし

白雪のつもるは人の心にて何のこゝろかはやもけぬらん

- (13) 本文に挙げた一例と、「馬場」「煉炭」「宇良末」「許母利奴」「真木流」「路乃長手」「路乃久麻尾」「春者張乍秋者散落」「夕まぐれ人のまよひに」「火あかうともして物いふ人三たり四たりゐたり」「湯巾」「鉤」「矢形尾乃鷹」「千鳥数鳴」「鳧我音」「蛤」「春日尔張流柳」「おほひやれば」「頼もしかなれ」「こよなう」「武家」「麻比波」「梟」「具」「神税」「戒」の二十六例がそれにあたる。
- (14) 『日本書紀』には「那為」とあり、『歌文要語』と同じく明和二年刊の楯取魚彦『古言梯』も「なゐ」で採録。
- (15) 新日本古典文学大系に拠った。
- (16) 『江戸のみやび』(岩波書店、二〇一〇年)第一章「みやびを」の誕生(初出は『國學院雜誌』第一〇七卷第一号、二〇〇六年一月)。
- (17) ただし『歌文要語』原本は、「ことばの品くさぐさ」に「於曾能風流士(オソノタハレヲ)」の訓も収録している。語釈に「於曾は愚也。訥たることば也」とあるが、罵りの表現として「タハレヲ」にも捨てがたいものがあつたということか。
- (18) 現行訓。注(14)に同じ。
- (19) このヌという表記については白石良夫『古語の謎』(中公新書、二〇一〇年)第三章に詳しい。
- (20) 『野鳥雞』は原本ママ。本来「雉」とあるべきところ。
- (21) 改変した語彙と認定したものについては、後掲の付表を参照。
- (22) 国文学研究資料館蔵本(ナ二―二三五)および、国会図書館蔵本(二〇九―三〇八)のように、「文政二年辛辰歲三月」の刊記を持つ(国会本は上から墨書し「文政三年庚辰」に訂正)本も存在する。年記のみ信じればこちらの方が早いが、干支の誤りが不審な点、また国文研本に早印とすべきか疑問のため、後の改刻と考えておく。
- (23) 前掲「近世後期浪花国学者石津亮澄の一考察」。
- (24) ただし『和歌新呉竹集』の出願記録に拠れば、同書の開板人は河内屋嘉七となっている。未詳。

(25) 前掲甲斐国下井尻村依田家文書、早川広海書状、二六通一綴(27D-4049)のうち一通。全文は下記の通り。文中の「杉田日記」は清水浜臣著、文化七年刊。时期的にはそれ以降。

貴書忝奉存候。杉田日記御返却被下忝。さて冠辞考も竹取物語抄も、下拙方二ハ無之候。竹取もの語写本、入貴覧申候。御歌、甘心仕候。冠辞考の代に、詞草小苑、差上申。書物直段付、忝奉存候。写候間御返却申候。

正月六日

(26) 注(2)の石川論文もこの書簡の内容に言及している。

(27) 『近世文藝』第八七号(二〇〇八年一月)。

(28) ここは二編の刊記に拠った。

(29) 前掲「近世後期出版書肆の一側面―宣英堂葛城基成伝記傍証―」。

(30) 一九四〇年発行。

(31) なお、注(29)の中澤論文が指摘するように、千楯(蛭子屋市衛門)も奈良屋とともに高尚の『松屋文集』『消息文例』の刊記に名を連ねる書肆であり、三人ともに既知の間柄であった。

### 第三章 付表

歌文要語	増補歌文要語
〈天部〉○朝日子（アサヒコ） ○催 朝日也。	〈天部〉○朝日子（アサヒコ） 前編
〈天部〉○月人壮（ツキヒトヲトコ） ○万 月也。月読とも。	〈天部〉○月読壮子（ツクヨミヲトコ） ○万 月也。
〈天部〉○夕星（ユフヅ、） ○万 暮の明星也。	〈天部〉○長庚星（ユフツヅ） ○万○和
〈雲霧〉○居雲 ○万 動かざる雲也。○伊 二たちゐる雲やまずとあるは動くさまなり。	〈雲霧〉○中空にたちゐる雲 ○伊 動く也。
〈雲霧〉○登能雲入（トノグモリ） ○万 多奈雲入（タナグモリ） とも。たなびきくもりの略。なべてくもりたるを云。	〈雲霧〉○棚雲利（タナクモリ） ○万 棚引曇る也。
〈風雨〉○雪こぼすがごとくふりて ○伊	〈風雨〉○雪こぼすがごとくふりてひねもすやまず ○伊 ごとは如く也。ひねもすは終日也。
〈地部〉○丘墓（オクツキ） ○万 おきつきとも。	〈地部〉○於久都伎（オクツキ） ○万 おきつきとも。墓也。丘墓とも書り
〈地部〉○馬場（ウマバ） ○延喜○源	〈地部〉○馬場（ウマバ） ○式○源
〈地部〉○地震（ナヒフル） ○日	〈地部〉○地震（ナキ） ○日 なゐふるともいへり。
〈山部〉○末辺（スエベ） ○万	〈山部〉○末辺（スエベ） ○万 嶺也。
〈山部〉○須蘇廻（スソワ） ○万 ふもと也。	〈山部〉○須蘇廻（スソミ） ○万 廻をわと訓（ヨム）はわろし。みと訓べし。証有。
〈山部〉○多知夜麻（タチヤマ） ○万 越中の立山也。	〈山部〉○多知夜麻（タチヤマ） ○万 天に高く見ゆる也。立山（タチヤマ）は越中のたちやま也。
〈水部〉○明之門（アカシノト） ○万 明石也。門（ト）は海中に山両（フタツ）ある間をいふ。俗これを瀬戸と云。明石にかぎらず何々の門（ト）と書べし。鳴門（ナルト）など云類也。○万ニ川門（カハト）ともよめり。	〈水部〉○明之門（アカシノト） ○万ニ薩摩乃迫門（サツマノセト）ともあり。
〈水部〉○宇頭之保（ウヅシホ） ○万 渦なり。	〈水部〉○宇頭之保（ウヅシホ） ○万 渦（ウヅ）まく潮（シホ）なり。
〈水部〉○波奈利蘇（ハナリソ） ○万 はなれ磯なり。	〈水部〉○波奈利蘇（ハナリソ） ○万 離れ磯也。れいの反り也。
〈水部〉○垂水（タルミ） ○万 飛瀧（タキ）也。	〈水部〉○垂水（タルミ） ○万 今云飛瀧（タキ）也。古くは急流をたきといふ。

### 第三章 付表

〈水部〉○石橋（イハハシ） ○万 字意のごとし。	〈水部〉○石橋（イハハシ） 補○万 飛石の如く石をならべてわたる也。
〈水部〉○打橋（ウチハシ） ○万 橋柱なくて打わたせる橋也。	〈水部〉○打橋（ウチハシ） ○万 移（ウツシ） 橋の意也。
〈水部〉○橋のつめ ○催 橋の際なり。	〈水部〉○橋のつめ 今もいふ。
〈水部〉○二楫貫（マカヂヌキ） ○万 今の舵（カヂ）にあらず。今の櫓（ロ）なり。貫（ヌキ）とは漕ぐをいふ。船の左右にあるゆゑ二楫（マカヂ）といふ。	〈水部〉○真櫓貫下（マカチヌキオロシ） ○万 今の楫にあらず。今の櫓（ロ）也。貫下は漕をいふ。船の左右にある故二楫（マカチ）といふ也。
〈道路〉○狭国（サクニ） ○延喜 せまきくになり。	〈地部〉○狭国（サクニ／サキクニ） ○式 せまき国なり。
〈道路〉○峻国（スルドキクニ） ○延喜 山ぐに也。	〈地部〉○峻国（スルトキクニ／サカシキクニ） ○式 山ぐに也。
〈季節〉○欲和多之（ヨワタシ） ○万 夜わたし、夜明し也。	〈季節〉○欲和多之（ヨワタシ） ○万 夜明（ヨアカ）し也。
〈季節〉○三更（ヨナカ） ○万	〈季節〉○三更（ヨナカ） ○万 さ夜中のさは真とおなじくて小（サ）にはあらず。
〈季節〉○守時鼓（トキモリノツヰミ） ○万 今の刻（トキ）の太鼓也。	〈季節〉○時守之打鳴鼓（トキモリノウチナスツヰミ） ○万
〈人部〉○大夫（マチギミ） ○日 まうちぎみ也。太政大臣はおほいまちぎみ。	〈人部〉○大臣（オホマヘツキミ） ○万
〈人部〉○豪傑（イサオシビト） ○日	〈人部〉○豪傑（イサヲシビト） ○日
〈人部〉○大丈夫（マ斯拉ヲ） ○日 ○万 物にまされる人をいふ。	〈人部〉○大丈夫（マ斯拉ヲ） ○日 ○万 真進荒男（マ斯拉ヲ）也。
〈人部〉○游士（ミヤビヒト） ○万 風流人（ミヤビヒト）也。	〈人部〉○風流士（ミヤビヲ） ○万
〈人部〉○安豆麻乎能故（アヅマヲノコ） ○万 乎登古（ヲトコ）とも。あづまをとこは昔より勇気あることによめり。	〈人部〉○安豆麻乎能故（アヅマヲノコ） 補 あづまは東南の国をいふ也。
〈人部〉○八多籠良（ヤタコラ） ○万 奴等（ヤツコラ）也。やつといふ詞は○竹取ニかぐや姫てふ大盗人のやつと有。○源ニことにもあらぬやつともあり。	〈人部〉○やつ ○竹ニかぐや姫てふ大盗人のやつ。○源ニことにもあらぬやつとあり。人をいやしめていふ也。
〈人部〉○郎女（イラツメ） ○万 家の女也。	〈人部〉○異羅菟比咩（イラツヒメ） ○日 ○続ニ伊良豆売（イラツメ）。○万ニ郎女（イラツメ） 家の女也。

### 第三章 付表

〈人部〉○阿母刀自（アモトジ） ○万 内をつかさどる女を刀自と称す。	〈人部〉○阿母刀自（アモトジ） ○万 母をいふ。阿毛は意母といふに同じ。阿（ア）と意（オ）と相通。刀自は戸主（トヌシ）の意にて内をつかさどる女をいふ。
〈人部〉○一母同産（ハラカラ） ○日	〈人部〉○一母同産（ハラカラ） ○日 同腹の兄弟也。
〈人部〉○吾妹（ワギモ） ○万 我妻を云。人の妻をもよみたる哥あり。	〈人部〉○吾妹子（ワギモコ） ○万
〈人部〉○海子（アマコ） ○万 漁夫。	〈人部〉○白水郎（アマ） ○万 海人（アマ）也。
〈支体〉○見津礼（ミツレ） ○万 身やつれの略語也。	〈支体〉○三礼二身津礼（ミツレニミツレ） ○万 身やつれに身やつれといふ。
〈衣部〉○麻蘇渥毛知（マソデモチ） ○万 両袖もち也。	〈支体〉○麻蘇渥毛知奈美太乎能其比（マソデモチナミダヲノゴヒ） ○万 両袖（マソデ）を持（モチ）て涙を拭ふ也。
〈衣部〉○麻太良夫須麻（マダラブスマ） ○万 斑衾（マダラブスマ）也。雑色の衾也	〈衣部〉○万太良夫須麻（マダラブスマ） ○万 班（マダラブスマ）也。雑色の衾也。
〈衣部〉○烝被（ムシブスマ） ○万 あたゝめし被（フスマ）也。	〈衣部〉○烝被（ムシブスマ） ○万 今の蒲団にあたる。
〈食部〉○筍尔盛飯（ケニモルイヒ） ○万 筍（ケ）は今の椀の類。○伊ニ飰子（ケコ）の器に盛るとあるは組椀の類也。	〈器部〉○筍（ケ） ○万 ○和ニ介（ケ）。今の椀の類。
〈食部〉○かれいひ ○伊 乾飯（ホシイヒ）也。むかしは旅ゆく人は是を貯へて持つ也。又旅づとにもたるかれいひともよめり。又餉の字。○和名 加礼比於久留（カレヒオクル）。加礼比（カレヒ）俗食ヲ以て人ニ遣ル也。	〈食部〉○保志比（ホシヒ） ○字 乾飯也。
〈家居〉○吾宅（ワギヘ） ○万	〈家居〉○和何弊（ワカヘ） ○万 吾宅也。
〈家居〉○相與（クミド） ○日 夫婦の寝所也。	〈家居〉○久麻刀（クマド） ○万 男女共。臥所也。
〈器部〉○弓腹（ユズエ） ○古ニ弓腹振立（ユズエフリタテ） 弓末也。○万ニ弓腹振起（ユズエフリオコシ）。今弓枝（ユンヅエ）といふは誤れり。	〈器部〉○弓上振起（ユズエフリオコシ） ○万

### 第三章 付表

〈器部〉○小角（クダ） ○万 軍中の笛也。	〈器部〉○小角（クダ） ○万○和 久太能布江（クダタノフエ） 軍中の笛也。
〈器部〉○埵二口（ツボツキフタクチ） ○延喜	〈器部〉○埵二口（ツボツキフタクチ） ○式○和ニ木謂之壺瓦謂之埵。
〈器部〉○笈（フミバコ） ○和名 不美波古（フミバコ）。文箱也。	〈器部〉○ふばこ ○伊 文箱（フンバコ）也。
〈器部〉○指櫛（サシグシ） ○万 往古は男もさせり。つま櫛はつまみ櫛にて上の方へ長き櫛也。	〈器部〉○指櫛（サシグシ） ○万 つまぐしはつまみ櫛にて上の方へ長きくし也。
〈器部〉○左堤（サデ） ○万 今のさで網（アミ）なり。	〈器部〉○左堤（サデ） ○万 今のさで網也。さでさしになどよめり。
〈器部〉○銚四柄（テヲノヨエ） ○延喜	〈器部〉○銚四柄（テヲノヨエ） ○式○万ニ手斧（テヲノ）。
〈器部〉○鉞一枚（カンナヒトヒラ） ○延喜	〈器部〉○鉞一枚（カンナヒトヒラ） ○式○万ニ真鉞（マカナ）
〈恋部〉○婦屋（ツマヤ） ○万 閨中也。	〈家居〉○婦屋（ツマヤ） ○万 上に同じ。（※上は「○久麻刀（クマド） ○万 男女共、臥所也。」）
〈恋部〉○朝影尔吾身者成奴（アサカゲニワガミハナリヌ） ○万 朝日の影のごとくほそり瘦たる也。	〈支体〉○朝影尔吾身者成奴（アサカゲニワガミハナリヌ） ○万 朝日にうつれる人影のごとくほそり瘦たる也。
〈恋部〉○密通而（シノビタハケテ） ○日○源二人ふたり見はべりしを。	〈恋部〉○密通而（シノビタハケテ） ○日 字意のごとし。
〈恋部〉○為軽如来細腰（スガルノゴトキコシホソ） ○万 為軽は蜂の一種。	〈人部〉○腰細之須軽娘女（コシホソノスガルヲトメ） ○万 須軽は蜾蠃也。女の腰の細きをたとふ。／〈生部〉蜾蠃（スガル） ○万○日 腰の細き蜂也。
〈生部〉○加万目（カマメ） 万 鷗（カモメ）也。	〈生部〉○加万目立多都（カマメタチタツ） ○万 鷗立たつ也。
〈生部〉○蘆鶴（アシタヅ） ○万 共に其居所を呼ぶ名なり。	〈生部〉○蘆鶴（アシタヅ） ○万 白鶴也。
〈生部〉○可良須等布於保乎曾杼里（カラストフオホヲソドリ） ○万 鴉（カラス）といふ大詐鳥（オホヲソドリ）。訇（ノリ）たることばなり。	〈生部〉○可良須等布於保乎曾杼里（カラストフオホヲソドリ） ○万 来まさぬ君をころくとはなくとよめり。
〈生部〉○味村（アヂムラ） ○万 味（アヂ）は仮字。海辺にあぢといふ水鳥有。村は群なり。	〈生部〉○味村（アヂムラ） ○前編 あぢのむら鳥ともよめり。

### 第三章 付表

〈生部〉○布都馬（フツマ） ○万 肥馬也。	〈生部〉○布都馬（フツマ） ○万 ふとり馬の略、肥馬也。
〈生部〉○鮪釣鰹釣（シビツルカツヲツル） ○万	〈生部〉○堅魚釣鯛釣（カツヲツリタヒツリ） ○万
〈草木〉○鹿尾菜（ひづきも） ○和名 比頭木毛（ヒヅキモ）。○伊ニひじきも。	〈草木〉○ひじきもといふものをやるとて ○伊 鹿尾菜（ヒジキ）也。○和 比頭木毛（ヒヅキモ）。
〈草木〉○多麻毛（タマモ） ○万 玉は称号のみ。藻也。○一説に玉のごとき実を生じたるをいふ。	〈草木〉○多麻毛（タマモ） ○万 玉のごとき実の生じたる藻也。
〈草木〉○小豆（アヅキ） ○和名 阿加安豆木（アカアヅキ）。	〈草木〉○阿豆枳（アヅキ） ○日○和 阿加安豆木（アカアヅキ）。小豆也。
〈草木〉○簾薄（ハタス、キ） ○万 広ごりたる薄也。正字芒（ス、キ）。	〈草木〉○旗須為寸四能乎押靡（ハタス、キシノヲオシナミ） ○万 旗すゝきはひろごりたる芒（ス、キ）也。篠をおしなびけ也。
〈ことば〉○宴（ウタゲ） ○日 歌酒の略。	〈ことば〉○宴（ウタゲ） ○日 うちあげの略。酒のむをいふ。
〈ことば〉○鋒心（トゴ、ロ） 万 励（ハゲシ） きこゝろ也。	〈ことば〉○利心（トコ、ロ） ○万
〈ことば〉○雄心（ヲゴ、ロ） ○万 をとこごゝろ也。	〈ことば〉○雄心（ヲゴ、ロ） ○万
〈ことば〉○打細（ウツタヘ） ○万 ひとへにという義也。	〈ことば〉○打細（ウツタヘ） ○万 編に也。一向といふに同じ。
〈ことば〉○横言（ヨコゴト） ○万	〈ことば〉○横辞（ヨコゴト） ○万 邪言也。
〈ことば〉○妖偽（オヨヅレゴト） ○日 流言也。	〈ことば〉○妖偽（オヨヅレゴト） ○万○続流言也。いつはりごとの意也。
〈ことば〉○安多良安多良（アタラアタラ） ○万 新（アタラ）也。惜みたる詞。	〈ことば〉○安多良安多良（アタラアタラ） ○万 惜たる詞なり。新（アタラ）也といふはわろし。新はあらたといふべき也。
〈ことば〉○宇礼多伎（ウレタキ） ○万 ○伊 憂痛（ウレタキ）也。	〈ことば〉○宇礼多伎（ウレタキ） ○日ニ慨哉（ウレタキカナ）。



## 第四章 『本朝水滸伝』の享受——改題本を端緒として——

### 一 『本朝水滸伝』改題本

前章に引き続き、近世後期における綾足の著作の出版から、その文芸の享受の諸相を考える。本章では、『本朝水滸伝』（前編安永二年（一七七三）刊、後篇は未刊）を対象とする。『本朝水滸伝』の版本には、「芳野物語」と改題された後修本が存在し、すでに『建部綾足全集』解題にも言及が備わる（一）。施された改変はわずかだが、『本朝水滸伝』の享受を考えるための端緒として、俎上に載せる。

まず、改題本出来の時期について略述する。『綾足全集』解題は、「文化九年申五月／書肆／浪華 勝尾屋六兵衛／皇都 吉田屋新兵衛」の刊記をもつ本（以下、文化九年本）と「発行書肆／京都 林伊兵衛／大坂 浅井吉兵衛／江戸 前川六左衛門」の刊記を有する本（以下、無年記本）の二種をあげるが、その他、先行する後印本の「寛政十三年酉春／補刻／皇都書肆吉田新兵衛」という刊記を流用した本（二）も存在する（以下、刊記流用本）。刊記流用本に「補刻」とあり、判断に迷うところだが、『大坂本屋仲間記録』出勤帳に、同書についての記載があり（三）、文化九年（一八二二）の修と見てよいようである。以下に関係箇所を抜き書きする（便宜的に番号を付した。また括弧内は引用者による注記）。

#### ①三月廿日（文化九年、以下同）、定日寄会

一、勝尾屋六兵衛より、本朝水滸伝買板帳切被願出候付、出銀取ル、売上証文持参。

#### ②五月十一日、定日寄会

一、勝尾屋六兵衛より、本朝水滸伝外題替願被出候付、出来本改、追而差出し可申様申遣し候事。

③同（九月）廿日

一、かつを屋六兵衛より、本朝水滸伝外題替、芳野物語外題替届書相認ル、并ニ添章出す。

④九月廿九日、西御番所惣年寄衆中溜り所より差紙、藤弥方江過急ニ罷出候様、折節差支ニ付河太被罷出候処、本朝水滸伝京願ニ候処、外題当地御聞濟之義、先例可在之哉否、以書付天満組惣会所へ差出し可申旨被申付候事。

⑤十月四日、吉野物語外題替、当地御聞濟之先例、帳面吟味之上、俳諧初心式ト草画早手本ト急要節用集ト三品、口上書を以天満組惣会所へ差出し候、尤藤弥出勤被致候事。

これによれば、文化九年三月に勝尾屋六兵衛が板株取得、同五月に、外題替願を出す。その後、九月に届書提出、という流れのようである。しかし、『本朝水滸伝』が元々京出来の書物であつたため、大坂本屋仲間による外題替の当否が問われ、先例を確認するといった事態に発展している。ただ、それも十月はじめには先例が確認され（『俳諧初心式』等三点の書物については未詳だが、おそらく先例であろう）、無事外題替の運びに至つたようである。以上、『大坂本屋仲間記録』出勤帳の記事から、この改題本の修が文化九年本の刊記の通り、同年に勝尾屋六兵衛の手によつてなされたことが見てとれる。無年記本はおそらくそれから大分下る時期のものといふことになる。刊記流用本については疑問なしとはいえないものの（4）、これによつて年次を繰り上げる必要はないものと見る。なお、右のように届出自体は、勝尾屋の手でなされているものの、この改題後修については、同じく文化九年本の刊記に名を連ねる吉田屋新兵衛の意向も大きかつたものと考え（後述）。

ここで改題本の体裁についても触れておく。表紙は縹色布目地。外題は無辺の刷り題簽で、順に「芳野ものがたり」「よしの物語」「与之廻母乃家太理」「三」とある。題簽の位置については、左肩にあるものと中央にあるものの二種があり、本によつて異なる（5）。意図的なものであろう。板面については『綾足全集』解題に、

この改題本では、序題、目録題などを全て「芳野物語」又は「よし野物語」と改め、柱刻の「本朝水滸伝」の文字を削る他、改題に伴って序の文章も一部埋木修正を施している。内題は無い。

とあつて、付け加えるべきことはない。序の埋木修正とは「又是を水滸伝と号けし事は」とあつたのを「又ひとつに水滸伝と号けし事は」と改めたことを指す。

まとめてみると施された改変はわずかなのだが、実際にこの改題本を手にとってみると、受ける印象は初印本と大きく異なる。太字の楷書体で刻された外題が姿を消し、「水滸伝」の名が版面から取り除かれると、大本であること、枕詞を多用した序文など全く古物語の体であることに気づかされる。素朴な筆致の挿絵もなにやら古物語めいており、この印象を助長している。題簽を中央に置く本が存在するのも、古物語の刊本の体にならったものであろう(6)。「水滸伝」の名がわずかに序文に残るものの、それも一名扱い、本名はあくまで「芳野物語」ということを強調する改刻といえる。「水滸伝」の名を版面から削ることで、当初、表に出ていた『水滸伝』の翻案ものという性格を後景に追いやり、かわつて『擬古物語』としての性格を前景に出した本に作り変えるというのが、改題本を出版した書肆の意図と見てよい。

なお、『本朝水滸伝』は初印本から大本で出されているが、これについては「元禄以前頃から数多く出版され続けている軍記物語類の系統と考えて大本としたかと推定される」という説(7)と、「王朝物語の系譜に列なる新しい古典としての読本であることを目指した」という説(8)の二様の見解を見るが、わずかな手直しで古物語の装いとなったことから勘案し、後者のように物語を意識したものと解したい。

前節では便宜的に「古物語」としたが、これは、「物語」の語のさす範囲が多様であり、また現在通行のいわゆる「王朝物語」の語を近世のそれにそのまま用いることにも躊躇を覚えたためである。ここでいうのは、諸研究にいわれる(9)歌書として、和学の書としての「物語」のことである(以下、ジャンルとしての「物語」をいう場合は基本的にこの意味で用いる)。書名に「物語」とある場合、必ずしもこの意識で用いられているとは限らないが、「芳野物語」に關していえば、和学の書としての「物語」意識に基づくものであることは動かない。綾足がそうした意図をもつてこの原題をつけたことは、すでに指摘されている(10)。「本朝水滸伝」は序にいう通り、書肆の手によって名づけられたと見てよい。では、作者没後に、別の書肆によって、綾足の当初の意図に添うかたちで「芳野物語」に戻されたのには、どのような背景を読み取るべきであろうか。

ここで参考にしたのは、改題本に先行する尾崎雅嘉の書目解題集『群書一覽』(享和二年(一八〇二)刊)である。この卷之三「物語類」に『本朝水滸伝』が「吉野物語」として収載されている(11)。詳細は、中島正二「物語たちの分類学」(12)に詳しいが、『竹取物語』、『大和物語』、『源氏物語』などとその諸注釈の掉尾に、綾足の『西山物語』と『本朝水滸伝』が連ねられている。雅嘉は、同書の例言において、

一、此書二十四門にわかつて、をのく其類の書を挙るといへども、見ん人、しめてその部目に泥みて搜索することなかれ。たとへば日本紀は国史の部に収むといへども、其第一・第二の神代卷の末書は神書の部に収め、大和物語・源氏物語等はもとより物語の部に収むといへども、平家物語・栄花物語等は其時の実録なれば、雑史の部に収むるがごとし。

と、その分類が独自の見識に基づく内容分類であること、また、

一、遠境僻邑の人、国学に志はありながら、書をもとむるたよりなきともがらの、しるべともなさんとおもふところあれば、国学に益あるものは、瑣屑の俗書及び予が自撰の書といへども、繁蕪をいとはずしてこれを載。

「国学に益ある」書物は俗書なども煩雑になるのを厭わず載せた旨を述べている。『本朝水滸伝』も他の物語同様、和学に資する書物と見て載せたと考えるべきであろう。以下に解題の部分を引き。

吉野物語〈一名本朝水滸伝〉 十卷〈九本〉 同上

弓削道鏡・恵美押勝・和氣清麿等の事を基としてつくれる物語にて、詞は古き事どもより考へあはせて、今やうの事どもを昔ざまにかけり。今これを水滸伝と名づくることは、作れるをもむきの、よくかのふみに似かよへばなりといへり。○刊本は巻の一より巻の十までありて、巻首に明和十年正月大神大夫藤原加祢与序あり。同年刊行す。

吉野物語続編〈写本〉 十卷 同上

刊本は第一条より第二十条までをしるせり。此書は第二十一条より第五十条までを載たり。巻末に第五十一条より第七十条までの目録を挙げたり。按ずるに涼岱、友人風月某に就て金聖歎が評する所の七十回の水滸伝をよみたるよし聞り。其後此物語を作れると見えたり。もつぱらかの書の風韻を模せり。

引用中、「同上」とあるのは、「西山物語 三卷 建涼岱」に続けて挙げられているために作者名を省略したもの。『本朝水滸伝』を物語の伝統に連なる作品と見る雅嘉の立場からは、「本朝水滸伝」なる題号より、序にある「よしの物語」の方が意図に適うものであった。そのため、「吉野物語」の名で収載されたと見てよい。

そしてまた、「本朝水滸伝」を「一名」と表記することも注目される。改題本が序文を「又ひとつに水滸伝と号けし事は」と改刻していることと符合する。『群書一覽』のこの記事が、改題本出版に影響を与えた可能性は高い。

### 三 後修本の背景

もちろん改題本の背景として、『群書一覽』のみを根拠としてとりあげるつもりはない。以下に当時の京坂における綾足の評価を書肆の動向を中心にとめ、傍証とし、改題本の背景をより明確にする。まず、周知の事柄ながら、三熊花顛『続近世畸人伝』（寛政十年（一七九八）刊）の一節を取り上げる（13）。

国風の文章はもとも古雅にして、筆の鼓舞比類なし。先に俳諧せし時も、其家風の文章ども、人を絶倒せしめたれば、古言にてもかくのごとし。俳諧の書、物語ぶりの書、片うたの書、画帖など著述数多印行す。

綾足の文章の才を言挙げするこの一文は、当時の京坂の綾足評価を牽引していったものと見える。『続近世畸人伝』を補綴した伴蒿蹊もまた、綾足の和文を高く評価していたことは、すでに風間誠史の研究が備わり（14）、また、管宗次「群書一覽成立攷」（15）は、伴蒿蹊説を書き入れた、雅嘉旧蔵『折々草』について触れており、雅嘉は和文家としての綾足の評価を蒿蹊と共有していたと見てよい。『群書一覽』にはその他、「草子類」に『折々草』と『すずみ草』、「和文類」に『歌文要語』『はしがきぶり』『後篇はしがきぶり』など（16）、綾足の和文に関連する著作を載せており、綾足和文への関心は高い。この点、先の推定を裏打ちする。

また、次に掲げるのは、寛政から文化文政にかけての綾足の著作の再刊についてまとめたもの。括弧内は書型、冊数、書肆。

寛政六年（一七九四）『すずみぐさ』刊（半紙本一冊、京、菱屋孫兵衛他四肆）

享和元年（一八〇一）『本朝水滸伝』印（大本九冊、京、吉田新兵衛）

文化五年（一八〇八）『増補歌文要語』刊（小本二冊、大坂、葛城長兵衛他京江戸三肆）

文化九年（一八一二）『芳野物語』修（大本三冊、大坂、勝尾屋六兵衛・京、吉田屋新兵衛）

文化十年（二八二三）『西山物語』印（大本三冊、大坂、加賀屋善蔵）

文政三年（二八二〇）『新撰はしがきぶり』刊（小本二冊、大坂、奈良屋長兵衛他京江戸五肆）

やや幅広く期間をとったが、上方において綾足の著作は細々と行われており、それらがすべて和文に関連した著作であることは注目される。『続近世畸人伝』において提示された和文家としての綾足の評価が、上方における綾足の享受を規定していった結果といえる。こうした綾足評価を念頭に置いて、「本朝水滸伝」という書名を考えたとき、やはりその異質な響きは否定しがたい。初印の当時は目新しかった『水滸伝』の翻案という要素も、江戸で『忠臣水滸伝』（寛政十一年前編刊、享和元年後編刊）が刊行された後ともなれば、その『水滸伝』趣向取りの様相は少々迂遠に過ぎ、白話愛好の徒を満足させえたとは思われない。評価の中心は自然、綾足の表現の側に移っていったことであろう。当時のものと思しい吉田屋新兵衛の蔵版書目（17）にも、

本朝水滸伝（綾足大人作／全九冊）

一名よしの物語といふ。唐土の水滸伝にならひ、古体の和文を以て奈良の代のことを書たり。和学家は見給ふべし。

とあり、「和学家」を主要な読者として設定していることが窺える。「水滸伝」の称と書肆の思惑との乖離は大きく、むしろ「水滸伝」の称が足枷となっていた。そこでこの吉田屋が、勝尾屋とともに一計を案じ、改題本の後修を行ったということであろう。吉田屋新兵衛については、光井文華「狂歌師文屋茂喬の活動」（18）に狂歌師としての活動と併せて、その事跡がまとめられているが、秋成の『海道狂歌合』（文化八年（二八一二）刊）の出版を見るに、改題に積極的な書肆であったように思われる。『海道狂歌合』の諸本については、丸山季夫に研究が備わるが（19）、序跋の有無や、柱刻の差異など細かな点が違う本が多い。中でも秋成の狂歌から、渡辺南岳と河村文鳳の画を独立させ、売り出した改題本『南岳／文鳳』街道双画』に、吉田屋新兵衛が狂名文屋茂喬の名で記した序が興味深い。

海道狂歌合は秋成の翁いまそがりし時、たはれにのみて南岳・文鳳のふたりに画かゝせ、二ツの巻となし、おのれにゆだね、板にゑらせ給ひぬ。しかあるに、画をこのめると歌を好める人とありて、かたみにこはるゝまにく、かみ下の巻を分ちてひきげり。歌のかたをはなちたるはさもありなむ。画のかたをわかちて狂歌合といはんはあやなきわざなれば、かりに海道左右画となづけぬ。こは翁の本いにあらざめれど、やむことなくて、かくはなしつ。ねがはくは歌の巻とあはせて、絵の趣をもみ給へかしと、かしこみてまうす。

読者の側の需要を鋭敏に察知し、書物の形を変えていこうという姿勢が窺える。また内容と題号の齟齬に配慮し、よりふさわしい題号を書物に与えようとの意思も見られる。これは『本朝水滸伝』改題後修の事例とも相通ずる。外題替の手續きを実際に行つたのは勝尾屋だが、改題にあつては、吉田屋の意向も大きかつたものと考ええる。

また、年表中、文化十年の『西山物語』後印本は、半紙本の初印本とは異なり、大本で出されている。『本朝水滸伝』の改題本に倣つて、より「物語」らしい装いで印行を意図したものであろう。刊記に拠れば、改題本と書肆は異なるが(20)、別の書肆がすぐに追隨したということは、改題本が一定の成功を収めた証左といえる。

他にも、韓国国立中央図書館に所蔵の改題本が一本ある(古五―四四―六八)。大本合二冊。「巻懷書屋」の蔵書印が三箇所に捺されており、もと三冊本と思しい。吉田屋新兵衛の蔵版書目あり。文化九年本の一種だが、他に類を見ない特徴をもつ。改題本が、初印本および後印本にあつた「本朝水滸伝」の柱題を、全丁削つていることは前述した。しかし、この韓国国立中央図書館本は、序二丁(丁付「序一(一)(二)」と、目録八丁(丁付「巻之一(一)(八)」のみ、柱題を削る。つまり、序と目録のみ改題本の版木を使用し、本文は改題以前の版木を使用していることになる。いわば、改題以前の後印本の本文を流用して、それに改題本の表紙、序、目録、広告、刊記、裏表紙を付け、三冊に綴じ直した本が、この韓国国立中央図書館本の原態といえる。管見の限り、他に例を見ない。差し替え箇所から見て、取り合わせ本の合綴等とは性格を異にする。おそらく書肆の手による差し替えであろう。巻末の蔵版目録からすれば吉田屋新兵衛と見てよい。本書もまた改題本の成功を背景に、書肆の手にあつた後印本の在庫を改装し、改題本の体裁に近づけて出すこ



とを意図したものと考えられる。序と目録の差し替えにより、外題・序題・目録題の「芳野物語」が強調される。序に、「又ひとつに水滸伝と号けし事は」とあるので、「本朝水滸伝」の内題、尾題、柱題などが本文に残っていても問題はない。少ない差し替えで、「芳野物語」の題を印象づけようとしたものといえる。本屋が在庫を処理するために腐心した跡が窺えると同時に、これもまた、改題本の成功の傍証となるものである。

以上、『本朝水滸伝』の享受について、上方の動向を中心に述べたが、たとえば『南畝文庫蔵書目』(21)も、「物語」という部立てを設け、「伊勢」「源氏」「住吉」「落窪」などの中に、「吉野物語八卷」を加えている。六巻本は未詳ながら、作者名に「建部綾足」とあり、『本朝水滸伝』を指すものと見てよい。ただ、この「物語」という部立てのうちには、綾足の『折々草』や上田秋成の『藤簍冊子』なども含まれており、やや特殊である。ただし、和学への志向が『本朝水滸伝』をここに採録させた点は動かないであろう。この『南畝文庫蔵書目』の例を併せて考えれば、あるいは、右に述べてきた『本朝水滸伝』の享受を上方のものに限定する必要はないかもしれない。

#### 四 馬琴の批評

『本朝水滸伝』の同時代評として著名な馬琴の批評について、ここまで言及せずに来た。この批評に関しては、稲田篤信の研究(22)などが備わるが、その前提を詳細に検討したものはない。前節までの行論を基とすれば、馬琴の批評の背景もより正確に捉えられるものと思う。以下とりあげる。

馬琴は「本朝水滸伝を読む并批評」中で、以下のように述べている。

この策子、本名は「吉野物語」、一名は「本朝水滸伝」、その「本朝水滸伝」としも名づけしは、事の『水滸伝』に似たればとて、書肆のわざなるよし序に見えたれど、そは飾言也。素より『水滸伝』に擬して作れるものなれば、「本朝水滸伝」は本名也。文人

のそら言かゝること多かり。

現在では綾足が元々「吉野物語」の称を用いていたことが書簡によつて知られるため、馬琴のこの説は否定されている。ただ、馬琴がこの一文から『本朝水滸伝』の総評をはじめた意味については、なお考える余地があるように思われる。

馬琴は後の『近世物之本江戸作者部類』（天保五年（一八三四）稿）の中で、白話を基にした長編小説として『本朝水滸伝』の先駆性を高く評価し、綾足を読本作者の始発に位置づけている。そうした馬琴の立場からすれば、「本朝水滸伝」こそ本名であるとの発言は当然の帰結ともいえる。しかし、それと同時に、当時の綾足評価への馬琴の違和感をこの一文の背後に想定すべきように思う。当時、「吉野物語」の称がむしろ通行していたからこそ、それに対抗するかたちで馬琴はこうした物言いをする必要があつたのだと考えたい。そもそもこの批評は、当初『本朝水滸伝』の版本および後編写本を借り受けた小津桂窓への返礼として書かれたものである。第一の読者として想定されているのは、桂窓であろう。桂窓自身、鈴門の和学者であり、その和文への関心から、一本を所蔵していた可能性は十分にある。残念ながら桂窓の『本朝水滸伝』への言及は伝わらないが、桂窓との貸借に関するやりとりを馬琴の書簡から拾つてゆくと、天保二年五月二十一日小津桂窓宛書簡の中では（23）、

当春御出府の節、御物がたりありし、綾足が『本朝水滸伝』後編写本、御幸便之節、御允借被下候様、奉願候（傍線引用者、以下同）。

と「本朝水滸伝」の称を使うのだが、それが、同年七月朔日の書簡では、

綾足『よしの物語』後編之事、先便御勞煩申試候処、御承知被下、便り宜き時節、被遣可被下段、忝奉存候。決して急ギ不申候。いつ二ても御都合よき比にて宜御座候。

「よしの物語」へと変わっている。これは同年八月十一日の書簡でも、

『よしの物語』等の事、決して急ぎ不申候。来冬御出府之節、御携被下候ても宜御座候。

と同様。馬琴日記の方でも(24)、同年八月廿六日の条、

一、昼後、いせ松坂小津新蔵状、八月十八日出一封、同人江戸うけ店小網町岩佐やゝ届来る。おみち、請取書、遣之。右は七月廿一日、是を遣し候書状の返事也。此内、『よしの物語』写本共二部并に『拳隼』等、去る並便にて飛脚へ出し候案内、且、たのみ遣し候『事迹合考』、京都に一本有之、写させ候よし申来る。

および九月三日の条に、

一、いせ松坂小津新蔵より、先便案内有之候紙包、飛脚やゝ着。おみち、請取書、遣之。右は、『よしの物語』前後合八冊・『拳隼』二冊、差越し候也。

同じく「よしの物語」を用いている。しかし、これが九月十六日桂窓宛書簡から変化する。

一、かねて奉願候、『本朝水滸伝』前編板本主巻都合巻、外に同書写本第二編、別に『拳隼』『問答抄』、共に壺封、早速御差出し被成下、右は九月三日に飛脚やより無相違着仕候。

このように、「本朝水滸伝」に戻り、以後、書簡も日記もこちらに統一される。馬琴が一時、「よしの物語」の称を使っていた理由は、おそらく桂窓がそちらを使っていたからであろう。ちなみに桂窓の所蔵本は、前編がおそらく改題本、後編は「本朝水滸伝」の刷り題簽をもつ五冊本であることが、批評および書簡から推定できる(25)。単純に外題のままの呼称というわけではない。桂窓自身が「よしの物語」の称が適当と見ていたと考えてよいだろう。馬琴も一時はそれに倣う形で「よしの物語」を使っていたが、実物を(特に後編を)目にして「本朝水滸伝」が本来の書名と確信したのである。先の批評の一文はこうした背景を持つている。いわば桂窓の題号の扱いおよびその背景にある「物語」としての読み方を否定する意図をもって書かれているといえる。馬琴はこの「総評」の前に「作者の書きざまを批評す」として和文体読本そのものの意義について辛辣な批判を加えているが、あるいは、「物語」としての読み方への批判はそこからはじまっていると見るべきで、この箇所はその念押しのようなものか。

なお、後述するように、桂窓自身も馬琴と同様、和文についてやや懐疑的な立場をとっていたようだが、そのことは『本朝水滸伝』を和文でものされた「物語」として見ていたことと矛盾するものではない。

## 五 馬琴と桂窓の文章論

馬琴は、この後、天保八年の「南総里見八犬伝第九輯下帙中巻第十九簡端贅言」中で再度、『本朝水滸伝』をとりあげている(26)。

しかるに近世、建部綾足が西山物語、及本朝水滸伝(一名吉野物語)は、をさく古言もて綴るものから、就中本朝水滸伝は、その趣、浄瑠璃本とかいふものに似たる条ありて、今の俗語もまじりたれば、木に竹を接たるやうにて、且時好に称ざりけん、僅に二編にて、果さざりけり(第二編は写本にて伝ふ)。又村田の翁が筑志船物語は、今古奇観第二十六なる蔡小姐忍辱報讐といふ一編を、皇国の故事に翻案して、古言をもて綴れる也。然しも能文の所為なれば、必初学の為に、資助になるよし多からむ、惜むべ

し、この翻案半分にて、翁は簀を易にき。いかで門人に続出する者ありて、原本の局を果たせかしと、吾一知音は眩きけり。そも国学者流にて、且和漢の稗史さへ、愛る余力あれば也。とばかりにして俗の看官は、いまだその書を知らぬもある歟、行わるゝこと広からず。

後半は省略したが、小説の文体は俗語によるべしとし、和文体読本が広く行われていないことを述べた文脈と了解される。ここで再び、「一名吉野物語」と本名と一名の扱いが逆転していることは注目に値する。『近世物之本江戸作者部類』もまた「本朝水滸伝へ一名吉野譚」とする。かつて『群書一覽』の中で、和学に資する書物として評価され、「吉野物語」の題の方が適切とされたものが、時を経て、文学史的意義という評価基準から再度「本朝水滸伝」の題が本名として採られることになったのである。

服部仁「再説、馬琴の文章意識」は、馬琴と桂窓の文章論をとりあげ、両者が和文について批判的な立場をとっていたことをとりあげている。ただ、兩人ともそれをまだ声高にいうことができたわけではないらしい。先の『八犬伝』の序文中、村田春海の『筑志船物語』への言及までとりあげたのは他でもない。「本朝水滸伝を読む并批評」において、馬琴は春海について、

村田春海が筑志船物語は、趣向は唐山の小説をとりながら、雅言もて綴りしを、みくにまなびする人は愛よろこぶもありぬべけれど、初篇のみにて次篇をつぎいだすに及ざりしをもて、その書の行れざりしを知るべし。凡この翁達、おのゝ文つくる才は有ながら、いかにぞや、今の草紙物語を雅語正文もて綴りては、勞して功なく、且雅語正文にては、情を写してその趣を尽すことの得なしがたきよしを悟らで、俱に綾足の余涎を甜りしは、千慮の一失にやありけん。かへすぐもえうなきすみぞ有ける。

「俱に綾足の余涎を甜りしは、千慮の一失にやありけん」(27)と舌鋒するどく批判していたにもかかわらず、『八犬伝』の「簡端贅言」では、「初学の資助」になるであろうと、和文体読本の意義を認めるような発言をしている。これは批評から序までの五年ほどの歳月が馬琴の考えを変化させたともとれるが、特定の人への慰み草として書かれた批評と、刊行を意図した「簡端贅言」とでは当然、事情

も異なるであろう。必ずしも意見の変化と見る必要はない。さすがに江戸派の大家春海を出版物の中で悪しざまに言うことは憚られたということであろう。むしろ、批評の方をより率直な見解と見たい。

小津桂窓もその「八犬伝第九輯下秩中之愚評」の中でこの序文に賛意を寄せている。服部稿とも重複するので、やや要約してとりあげる(28)。桂窓は「古今転じ来れる語勢をしらず」、「只古を雅とし今を俗と」することを誤りとして退ける。自身名付けて「雅俗一致」の説。そして宣長が「堂上方の近来の御うたを近世風とていやしめ」たことをとりあげ、「その近世風よき風にあらねど、これ自然一体をなしたるその比の風」として堂上の和歌をむしろ肯定し、「本居風のうたは中々に、古をはらんとする臭気おほく、時代たがひて、後世よりみばいかゞあらん」と宣長風の和歌の方に難色を示す。さらには文についても「長嘯子の和文などは自然転じ来れるさまをみるにたる文体なれど、本居翁は甚あしくいはれたり」と述べる。擬古文のあからさまな技巧性をしりぞける態度と敷衍することができる。近代的な和歌論、文章論にかなり接近しているものといえるが、桂窓自身は自らの説について、

われ常々雅俗は一致といふ説をいへども、未ひとの伏せしを聞ず。

と述べ、また、

われ本居門に出てその家の説をうべなはざるは、尤罪ふかきことなれど、さりとして心になはざるをいはいかにせむ。

と葛藤を表明してもいる。こうした立場は当時にあつては、むしろ新しい考えであり、いまだ世上に受け入れらるものではなかったというのが実情ではなからうか。それだけ和文の流行というものが人々の間に広く浸透していたものと解釈したい。

とはいえ、伊丹椿園『女水滸伝』(天明三年(一七八〇)刊)序文に(29)、

我邦また涼俗なる者の著せし本朝水滸伝あり。作意の巧拙はしらず、文辞、上世の体に擬したれば、識者の案上にも到るべし。

とあるのに比べれば、時代の懸隔を感じさせるところである。椿園は、文芸的内実についてはともかく、その文辞の点で、『本朝水滸伝』が知識人の読むところとなつたであろうと、その文体に無条件で一定の評価を与えているが、馬琴は「今の俗語もまじりたれば、木に竹を接たるやうに」と、その文体をむしろ批判的に語っている。椿園と馬琴を「読本作者」として同列に扱うことは、その学識の点などにおいて問題もあるが、二人の考えの違ひは、和文に対する意識の多様化を反映するものであろう。和文をものすることが、そのまま雅への憧憬であつた時代がすでに過去のものとなりつつあり、擬古に傾いた和文を銜学的なもの、不自然なものとして排斥する態度が知識人の間にきざした時代、とここでは馬琴の批評の背景をまとめておきたい。そしてこれがそのまま近代の文章意識へと接続してゆくこととなる。

#### おわりに

改題本を端緒として、『本朝水滸伝』の享受史を素描した。些細な題号の違いではあるが、『本朝水滸伝』の読者にとっては、どちらの題号を使うかがそのまま作品の享受のあり方と密接に結びついており、軽々に扱うべきではない。

現在では『水滸伝』翻案の初期のもの、という文学史的意義を中心に評価されることが多い『本朝水滸伝』だが、むしろ上方での綾足評価を追う形で、和学の書としての評価というのが、近世における同書の享受の実態であつたと考えられる。改題本はそれをあらわす好例であり、『西山物語』の再印もまた同様である。

そして、そうした評価に対抗する意図が、馬琴の「本朝水滸伝を読む并批評」の基調の一つとなつている。馬琴の批評が題号にこだわるのも、そうした態度の表れと見たい。

この評価の転換の背景としては、和文に対する意識が多様化し、批判的な立場をとる者が現われてきたためと考えられる。しかし、

馬琴の春海への配慮や、桂窓の葛藤が示す通り、そうした考えをもつ者はまだ少数派であり、彼らの考えを自明のものとして受け入れられる土壌は整ってはいなかったと見るのが実情に近そうである。和文の流行の裾野が思いのほか、大きく強固なものであったということであろう。

対して、綾足の頃の意識といえ、古語をもつて文章を書くことは、そのまま雅の意識の体现であった。やや素朴に過ぎるようにも思うが、馬琴が述べたような疑念の入る余地はおそくなかったのものと考える。

注

(1) 『建部綾足全集』第四卷(国書刊行会、一九八六年)。風間誠史執筆。

(2) 新潟大学附属図書館佐野文庫蔵本および、鶴岡市郷土資料館蔵本がこれにあたる。所見は国文研マイクロ。先行する後印本については、注(1) 諸本解題参照。

(3) 木越俊介氏ご教示。引用は『大坂本屋仲間記録』第二卷(大阪府立中之島図書館、一九七六年)に拠る。

(4) あるいは京の書肆吉田屋新兵衛が大坂本屋仲間における外題替の手続きを俟たずに刊行しようとしたものか。未詳。

(5) 管見の範囲で示せば、左のものは新潟大佐野文庫蔵本(刊記流用本)、青森県立図書館工藤文庫蔵本、韓国国立中央図書館本(文化九年本、※ただし韓国国立中央図書館本については子細あり。後述)、九州大学附属図書館蔵本、国会図書館蔵本(以上無年記本)。中央のものには、刈谷市立中央図書館村上文庫蔵本(無年記本)がある。

(6) 一華堂切臨『源義弁引抄』(慶安三年(一六五〇)成立)に、「一華堂云、定家の青表紙を周防国守にて一覽せり。紙は備中のかいた也。外題は青表紙に定家の打付書也。百四代後土御門院宸筆にて、式の外題をまんなかにをし給へり。源氏外題を今世に正中にをすは、是を例とせり」(『批評集成・源氏物語』第一卷、ゆまに書房、一九九九年)とある。物語本の外題を中央に置くのは、当時慣例と化していたと見てよい。



- (7) 横山邦治『読本の研究』（風間書房、一九七四年）序章。
- (8) 長島弘明「作者・絵師・書肆・読者―綾足と秋成の物語を例に―」（『日本文学講座』五、一九八七年六月）。
- (9) 中島正二「物語たちの分類学」（『江戸文学』第三号、二〇〇一年二月）など。
- (10) 長島弘明『本朝水滸伝』の構想」（『日本文学』第三五卷第八号、一九八六年八月）。
- (11) 『群書一覽』に『本朝水滸伝』が載ることは、すでに前掲中島論文や木越治「ふたつの「誤り」から」（『江戸文学』第三六号、二〇〇七年六月）に指摘がある。鈴木淳「江戸の卷子本」（『文学』第一〇巻第四号、二〇〇九年七月）中に稿者の名でとりあげられているが、稿者の調査に拠るといより、実際は、右の先行研究に拠る。
- (12) 注(9)参照。『群書一覽』巻三「物語類」の書目を具体的に以下に示す。なお異本および注釈書については、ここでは省略した。竹取物語、宇津保物語、浜松中納言物語、住吉物語、伊勢物語、大和物語、落久保物語、源氏物語、狭衣、和泉式部物語、とりかへばや、今物語、今昔物語、宇治大納言物語、宇治拾遺物語、四季物語、堤中納言物語、秋夜長物語、松帆物語、大納言物語、女郎花物語、紅葉葉物語、西山物語、吉野物語。
- (13) 『続近世崎人伝』（中公クラシックス、二〇〇六年）。
- (14) 風間誠史『近世和文の世界』（森話社、一九九八年）第1章第6節。
- (15) 初出は、『近世文芸』四七号（一九八七年十一月）。のち『群書一覽研究』（和泉書院、一九八九年）に収録。
- (16) 他、「歌学類」に綾足の門人の手になる『詞草小苑』を載せる。
- (17) 所見は前掲、青森県立図書館工藤文庫蔵の『芳野物語』（文化九年本）。吉田新兵衛は初印本の刊記にはその名がなく、寛政十三年刊の後印本から名前が出る書肆。ゆえにこの蔵版書目はその頃のものと見てよい。
- (18) 『武庫川国文』第四〇号（一九九二年一月）。

- (19) 古典文庫『秋成狂歌集』(一九七二年) 解説。
- (20) 刊記には「凌岱先生著／文化十年酉十二月／浪華書林／心斎橋北久太郎町 加賀屋善藏」とある。
- (21) 『大田南畝全集』第十九卷(岩波書店、一九八九年) 所収。同書の付記によれば、南畝が山崎美成に依頼して作成させた自家の蔵書目録という。「物語」の項に挙がっている書名は、伊勢物語、源氏物語、住吉物語、落久保物語、今物語、幻夢物語、児物語部類、早器物語、松蔭物語、鳴門中将物語、折々草、吉野物語、つづらぶみ(『伊勢物語』『源氏物語』の関連書目を一部省略)。
- (22) 稲田篤信『名分と命禄』(ぺりかん社、二〇〇六年) 第九章「勸善懲惡と命禄」(初出は『時代別日本文学史事典 近世編』(東京堂出版、一九九七年)「江戸読本Ⅱ」)。
- (23) 以下、引用は『馬琴書翰集成』第二卷(八木書店、二〇〇二年)に拠る。
- (24) 『曲亭馬琴日記』第二卷(中央公論社、二〇〇九年)。
- (25) 前編を改題本としたのは、批評に、「ゑりまき十まき〈合本三冊。前篇なり〉」とあり、三冊本であること、また先の引用で「水滸伝」の名の扱いを「一名」とすることから想定した。後編については「うつしまき十まり五まき〈合本五冊。後篇なり〉」とあり、また、天保三年十月二十一日河内屋茂兵衛宛書簡に「此度いせよりかりよせ候同書、外題を板行にいたし候間」とあるところから、刷り題簽をもつことがわかる。刷り題簽をもつ本には、関西大学図書館本があるが、関係未詳。
- (26) 引用は新潮日本古典集成別巻『南総里見八犬伝』八(新潮社、二〇〇三年)。なお、以下の行論に関しては、服部仁「再説、馬琴の文章意識」(『曲亭馬琴の文学域』(若草書房、一九九七年)所収。初出は『読本研究』第四輯上套、一九九〇年六月)に多くを拠っている。
- (27) 「俱に」とあるのは、春海の前に雅望、真顔の例を挙げるので、彼らを指す。
- (28) 『天理図書館善本叢書12 馬琴評答集』(八木書店、一九七二年)。

(29) 石川秀巳・磯貝寛子・宝田かほる編「〈翻刻〉女水滸伝」(『読本研究』第九輯、一九九五年一〇月)



## 第二部

### 和文体読本の研究



## 第一章 『西山物語』考——分裂する語り——

はじめに

第一部では、和文体読本の前提となる綾足の学問のあり方について述べてきたが、この第二部では、和文体読本の文芸的内実を論ずる。本章では、『西山物語』（明和五年〈一七六八〉刊）を対象とする。同書は、文学史の上では、都賀庭鐘の『英草紙』（寛延二年〈一七四九〉刊）や上田秋成の『雨月物語』（安永五年〈一七七六〉刊）などと並び称され、初期読本の代表作と位置づけられている。しかし、絵入りの半紙本五卷五冊、文体は原則、和漢混淆文を採用する『英草紙』『雨月物語』に対し、半紙本三卷三冊、挿絵はなく、文体は記紀万葉の言葉を用いた和文（擬古文）、さらに、古語に典故を付す『西山物語』は、体裁の上でも当時の読本とは一線を画す。これを初期読本の範疇に含めて考えるのは、曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』（天保五年〈一八三四〉成稿）などの後世の評価に拠るものである。確かに、後世から見れば、長編読本の先駆として位置づけることも可能である。そこで、『西山物語』の構成を論じ、読本史における位置づけを試みる。

### 一 太刀の呪いと予言

『西山物語』は前年に京都で起きた渡辺源太の妹殺し、いわゆる源太騒動に取材し、大森七郎・八郎という同族の両家の確執と、その板挟みにあつた若い男女の恋愛譚を描く。同じ事件を基に、後に上田秋成が「ますらを物語」（文化三年〈一八〇六〉成稿）あるいは「死首の咲顔」（『春雨物語』中の一編。文化五年成稿）を執筆しているが、ともに短編である。『西山物語』が長編構成をとるのは、綾足が長編を志向する作者であることに起因する。では、『西山物語』は、源太騒動にどのような要素を加味して長編化を行ったのか。答えはいくつかあろうが、最も重要なものが、太刀の呪いである。『西山物語』冒頭「こがねの巻」は、『太平記』卷二十三「大森彦七

事」に登場する大森彦七の子孫、大森七郎が、先祖より伝わる太刀を奉納されていた寺院から取り戻すところからはじまる。この太刀には、

楠正成のぬし、津の国みなと川にて軍破れてうせたまひし時、血つきたるつるぎの太刀のはべりしを、彦七とり帰りて我家に残しおきけるが、そのはつこなれば、今このいへにとゞまりて、世にふたつなきつるぎなりとぞいひつたへける。しかれども楠のぬし惜しむ心や残したまひけむ、是につきてはくさぐくしき事どもの侍りしことを、世々にいひつたへける

このように不穏な言い伝えがあり、このために寺院に奉納されていたという。この太刀の奪還を契機として、七郎の母は病に伏し、藥代等に家計は逼迫する。そして、「これはまさしに彼太刀をとり返したる故に、けちどもの出くるはしなりなど人々いひあひける」と、七郎の窮迫は太刀との関係で語られる。そして、中巻「あやしの巻」では、家鳴りなどの怪異が七郎の周囲に起こり、さらに、楠正成の怨霊が顕れ、七郎に太刀を還すよう迫る。正成怨霊は、

又此ほどまで汝が母をなやませしも、我わざにて、その後のさとし事も、外よりなし来る事にあらず。今唯今なほにその太刀を我に返さば、此後さひはひ来たらむこと、たなひらをかへすごとくならむ。かくてもいなまば、汝が兄弟のあひだにたゞり出来て、此太刀になむさゝれて死ぬべし。

母の病も、七郎家の怪事もすべて自らの所為といい、さらに、太刀の返還に応じなければ、七郎兄弟の間に祟り、兄弟の誰かが太刀に刺されて死ぬという。これが、「露の巻」において、七郎が妹かへを太刀にて殺害することの予言となっている。木越俊介「伝奇と情話——『西山物語』をよみなおす——」（1）は、



確かにこの予言と呪いは物語を背後で統御し、七郎とかへ、そして八郎らはこの運命のもとに悲劇へと突き進んでいるように見える。しかし、この問題となる太刀は最終的には七郎（家）の手に残り、またこの予言の成就をもつて正成の怨霊が鎮められるわけでもないのである。また、そもそも根元的な問いとして、この呪いがもたらしたことがらは、果たして七郎（家）を不幸にしたと言えるのであろうか。このように考えてみると、正成の呪いは、物語を推進する一つの力にはなっているものの、『西山物語』を支配しているというには不十分なのである。

と、予言と呪いが物語を統御する要素の一つであるとはしつつも、いまだ作品全体を支配する論理になりえていないという（2）。確かに木越稿の指摘の通り、呪いの太刀や正成の怨霊の問題に触れないまま、物語は、唐突に七郎の家の繁栄を言祝いで終わる。呪いや予言は、物語の中で首尾一貫した役割を与えられてはいない。

そして、作中には、もう一つ物語を統御していた予言が存在する。これは七郎のかへ殺害後、八郎がかへの亡骸に対して語る言葉の中で、はじめて明らかとなる。七郎には「太刀の巻」の剣術試合で、勝ちを譲られた恩があり、もとより、かへとの婚姻を否むつもりがなかった八郎だが、

ゆくりなく、ゆふうらのもの入来りしに、そこと宇須美があはひ、うらなはせさむらふに、つらく陰陽の相をかうがへみていへるは、此あはひおほいによからず。もし逢ときは、ふたりともに命あらず。又はなれてすら、いづれか片々の命きはまりたり。これまで、おほくの人のあはひをかうがへ見つれども、かゝるくしきあしき御中ははべらず。はやくさけはなちたまはずは、わざはひ来るべし。

「夕占の者」とは卜者をいう。卜者にかへと宇須美の中を占わせた八郎は、二人が結ばれるときは、二人ともに死に、たとえ結ばれないとしても、一人の命はないであろうと不吉な結果を告げられる。その後、他の卜者をあたり、四度占ったがすべて同じ結果だったと

いう。この占いに従い、八郎はかへと宇須美の婚姻を拒絶したというのである。長島弘明は、これを「悪人と見えた大森八郎も善人であつたという八方美人的な結末」(3)とする。出版された作品である以上、モデルとなった人々に配慮し、悪人とできなかった部分はあるものと思われる。しかし、この占いの役割はそれだけではない。この占いが、八郎の拒絶の理由であり、それを知った七郎が、

又はじめ終をよく知りたるひとの、「八郎がこゝろなくきこえけるはしかぐの故よしある事どもなりし」と七郎親子にもきこえければ、「さてはさだまれるすぐせなりけるものなりし。さもしらでうらみつる事のくやしき」とて、まじらひものとのごとくなり  
にけり。

と、それまで、かへの死を、八郎の、約に背いた理不尽な拒絶に拠るものとして恨んでいたが、理由を知り、「定まれる宿世」と納得して、再び両家の交流が復活したという。ここで、太刀の呪いの結果としてあつたはずのかへの死は、かへと宇須美の「あしき御中」のためであり、それは「さだまれる宿世」だったとすり替えられてしまう。構成の不備としかいいようがないが、別の言い方をすれば、正成亡霊の予言とその成就が重要事であり、太刀の呪いとその解消については些事にすぎぬとの認識であろう。正成亡霊の役割はかへの死を予言することであつて、呪いによつて物語を統御することではない。物語の前半を牽引してきた太刀の呪いは、この時点で役目を終える。

『源氏物語』桐壺巻における高麗人の観相や、漣標巻における宿曜の占いなど、予言が実現されるのは、物語の約束事である。そして予言が成就した藤裏葉巻において、予言との照応がことさらに語られるようなことは起こらない。予言の成就は作者と読者の側の了解事項であつて、物語の登場人物の了解事項では必ずしもない。物語の登場人物は、自らの意思で行動した結果、はからずも予言と同じところに帰着したのである。予言は予言であつて、予言は原因ではない。『西山物語』も、この『源氏物語』を先例として、予言を設定し、その成就を描いた。ただし、登場人物の行動の帰結であるから、『源氏物語』のように、結末でそれを語ることはしない。太刀の呪いという伝奇的な長編構成の方法は、『西山物語』では達成されなかった。『西山物語』は「定まれる宿世」の「宿世」には「源

氏物語』という出典注を付すが、これは偶然ではない。『源氏物語』 濤標巻に、

（桐壺院は光源氏を）あまたの御子たちの中にすぐれてらうたきものにおぼしたりしかど、たゞ人におぼしをきてける御心を思に、宿世とをかりけり、内のかくておはしますを、あらはに人の知る事ならねど、相人の言むなしからず、と御心のうちにおぼしけり。

「宿世とをかりけり」は光源氏が皇位につく定めではなかったことをいう（4）、「宿世」は『源氏物語』の登場人物たちの運命を規定する言葉である。正成の予言は、光源氏の宿世をいいあてた「相人」の言葉に近いものであり、そのため、結末において、「宿世」という物語の言葉にすり替わったということではないか。太刀の呪いは長編構成を貫徹し物語に結構性をもたらしことはできていない。この点で、『西山物語』の構成法は物語的であり、いまだ後期読本のような結構性をもつに至っていない。

## 二 「ますらを」と「みやび」

かつて奥野美友紀は『西山物語』の冒頭が「きわめて武士道的な語彙にみちている」ことを指摘し、「つるぎの太刀」「くさなぎの剣」「まだち」など、「綾足の古代的な「ますらを」のイメージ」を想起する『古事記』『日本書紀』の言葉を使い、大森七郎や八郎を描写したことを述べ、さらに、

七郎と八郎に、「ますらを」としてふさわしい形象と語彙が与えられていることは先に述べたとおりであるが、かへ・宇須美のふたりは（厳密に言うなら老母も）それとは異なる。「みやび」の側にたっている。

と「ますらを」と「みやび」という二つの論理が『西山物語』に内在することを指摘した(5)。これが『西山物語』の構成と位置づけを論ずる上でもう一つ重要な問題となる。奥野稿は主にこの「みやび」の側の表現について論じたものだが、本章では、この指摘を基礎として「ますらを」と「みやび」の二つの論理が、物語の筋をどう形づくっているかを述べる。

### 三 「ますらを」の形象

『西山物語』は、大森七郎が、太刀を寺院から取り戻すところから始まる。その太刀とは、前述のように、彦七より伝わる楠正成の太刀である。七郎はこの太刀を「わが家のたからとするは唯かの太刀一ふりなり」と、自らの武威の象徴として、手元に置くことを願う。正成の武威にあやかる意図であろう。しかし、『太平記』の大森彦七は、湊川の戦で拔群のはたらしきをするが、正成の太刀を持ち帰ってはいない。確かに『太平記』には楠正成の怨霊が彦七の太刀を狙う挿話があるが、そこでは『西山物語』とは異なった設定となる。

正成彼ト共ニ天下ヲ覆サント謀ニ、貪嗔痴ノ三毒ヲ表シテ必三劍ヲ可用。我等大勢忿怒ノ悪眼ヲ開テ、刹那ニ大千界ヲ見ルニ、願フ処ノ劍適我朝ノ内ニ三アリ。其一ハ日吉大宮ニ有シヲ法味ニ替テ申給リヌ。今一ハ尊氏ノ許ニ有シヲ、寵愛ノ童ニ入り代テ乞取ヌ。今一ツハ御辺ノ只今腰ニ指タル刀也。不知哉、此刀ハ元暦ノ古へ、平家壇ノ浦ニテ亡シ時、悪七兵衛景清ガ海へ落シタリシヲ江豚ト云魚ガ吞テ、讃岐ノ宇多津ノ澳ニテ死ヌ。海底ニ沈デ已ニ百余年ヲ経テ後、漁夫ノ綱ニ被引テ御辺ノ許へ伝ヘタル刀也。所詮此刀ヲダニ、我等ガ物ト持ナラバ、尊氏ノ代ヲ奪ハン事掌ノ内ナルベシ(6)。

『太平記』の正成怨霊は、天下を覆すために、「貪嗔痴ノ三毒」を表す三つの劍を必要としていた。その一つが彦七の劍という。その劍は、正成から彦七に渡ったのではなく、「悪七兵衛景清ガ海へ落シタ」ものが、漁師の綱にかかり、彦七の有となったもの。「悪七兵衛景清ガ海へ落シタ」という箇所について長谷川端は「景清が刀を海に落としたという話は未詳。同合戦の時、三種の神器の一つであ

る宝剣が海底に失われたことに基づく連想話か」とする(7)。三種の神器の宝剣、いわゆる草薙剣である。このように大森彦七の剣は、宝剣を想起させる。彦七の登場する浄瑠璃においても、宝剣との結びつきは強い。以下、列举する。

まず、文耕堂『車還合戦桜』(享保十八年(一七三三)初演)。この作品の彦七の太刀は正成秘蔵の剣。そして、「本其太刀は先帝後醍醐の天皇、神代の宝剣と等しく、日の御座に立られし名剣」(初段)であり、正成が後醍醐天皇から拝領した剣が、正成の死後、彦七のものとなった。坊門の大納言清忠は、「彼の太刀を宝剣の替りとし」(同)て、三種の神器を揃え、王位を狙う(8)。

また『蘭奢待新田系図』(近松半二・竹田平七・竹本三郎兵衛合作、明和二年初演)でも、彦七が大塔宮をかくまう母子に送った太刀は、「諸刃」の「尋常ならぬ太刀」であり(9)、この太刀を手にした大塔宮は、

「其太刀是へ」と御手に取、「ハア有がたや忝なや。是こそは此日比尋求る十握の御剣。今はからずも我手に入は。再び九五に帰るべき其瑞相にて有けるか」と、押戴きく、御悦びは浅からず(第四)。

「九五」は皇位をさす。皇位に還る瑞相となる剣という設定、また、「十握の御剣」は宝剣の異名であり(10)、類似は否定しがたい。後の場面で、彦七はこの太刀が正成から宮に渡すよう頼まれたものであると明かす(11)。このように彦七の剣を正成のものとする『西山物語』は、『太平記』そのものより、むしろ近世の浄瑠璃に似る。『西山物語』は、浄瑠璃のイメージも継承しつつ、作品世界を形作る。太刀が収められていた寺院の院主の言葉に、

つるぎは正成ぬしのはき給へる太刀なり。此のひとぞあめが下武士のかがみとは申すならずや。さる人のはかせたまへる物なれば、くさなぎの剣にもたぐふべく此のあるじはおもひをれり。

正成の太刀を草薙剣に准えるが、この表現の背後に、当然、浄瑠璃は意識されている。若尾政希は、近世において、『太平記評判秘伝

『理尽鈔』の影響により、それまで軍略・知謀に長けた忠臣というイメージであつた楠正成が、理想的な指導者像になつていったことを述べる(12)。『西山物語』もその影響を受け、「武士のかがみ」というが、しかし、ここではむしろこの太刀の設定を媒介として、倭建命にも准えるべき古代的な武士像として設定されている。正成個人への関心は希薄である。対して、倭建命は綾足が理想とした武人であつた。綾足が自らの理想的な武士像を描こうとするとき、倭建命の名が出るのは当然といえる(13)。

では、大森七郎の「ますらを」ぶりの実態を見る。七郎は「此七郎ぞもゝのふのみちをみがきて、今の世のますらをとひとにも称らるゝ男にてなむあれば」と評される。「今の世」とあるのも、「ますらを」の、古代的な武士像という性格を裏打ちしている。そして「ますらを」は、当時の人々に称えられるが、一方では、異質な存在である。「こがねの巻」における宝剣奪取や、また「太刀の巻」における剣術試合の場面にそれがよく顕れている。

七郎つとたちて、彼の太刀をこめおきたりし金戸をやぶり、袋ながらひき出だして、「もとより是は我がたからなり。今こそ持かへるなれ」とて、ときあしを出してにげ出でける(こがねの巻)

さて八郎、七郎にむかひていひけるやうは、「その太刀たわやすく折れつるうへにてかてるは、誠のかちにあらず。今ひとわたし太刀をあらためて、出で給へ」となむ聞えければ、七郎こたへけるやうは、「さる事にあらず。勝つとまくるは唯、天の神のなし給ふ也。まだちもをるれば折るる時あり。けふのけぢめわたくしならずとおもへば、そのかち給ふにはまぎれなし。我かかるにはに長居せむはおもなし」といひつつ、折れたる太刀をひろひあつめて、あしをはやみにげいでければ、「見所もなき太刀あはせにぞ有ける」とて来し人もほいなげになむあかれちりけり(太刀の巻)

このように、七郎の「にげる」場面が頻繁に描かれる。それはもちろん院主に対するふてぶてしい嘲笑であり、また、剣術試合の勝ちを八郎にわざと譲つたことへの韜晦でもあるが、武威を示すような状態ではないことは確かである。結局彼が武威を示したのは、かへ

と宇須美との婚姻を拒む八郎に対し、「いでや八郎よ、そこにありて此ますらをがふるまふ事を見たまへや」として妹を殺す場面のみである。事件当日、八郎の屋敷内に居合わせた、西山の僧都はこれを見て、「おのれは杳もはかで、そこはかとなくにげ出」す。他愛のないチャリ場だが、七郎の武威に圧倒され、「にげる」僧都の姿は、それまで、「にげる」場面の多かった七郎の反転であり、彼が見事に世間に武威を示したことを表している。そして「ほきの巻」において、

されば七郎がかくれたりしひかり、終にのぼる日のごとくなりしかば、西ひがし北みなみの国の守より、「われ家の子にせむ」「かれおもと人にせむ」と、馬をはせ、車をのぼせてむかへたまひしかど、七郎かつてうけひかざりしかば、「しからば母をやしなひ奉るべき料に」とて、をちこちの国の守より、こがね・しろがね・太刀・まき物まで、よき使をもて、おくりたうびしほどに、今はならびなきさひはひの人となりて、その子うまごまでも、ゆたけくとみさかえ侍りしとかや。

と太刀を取り返す以前、「家もとみさかえて」いた状態に戻る。「ますらを」としてのあるべき自己を回復した七郎が、世間の側から受け入れられ、その社会的地位の回復も達成するというのが、『西山物語』において大森七郎のたどる軌跡である。皮肉な見方をすれば、七郎の「ますらを」ぶりは妹殺しによって、はじめて実質を伴うものとして、人々に了解されたということになる。いわば、それまでは実質を伴うものではなかった。今の世の「ますらを」を志向した七郎は、妹殺しによって、その実質を手にした。

この「ますらを」の物語は構成の面でも、表現の面でも、やや平板な印象を受ける。

### 三 語りの分裂

では、このように描かれた「ますらを」の物語に対して、七郎の妹かへと、八郎の子、宇須美の「みやび」の物語はどのように関係するのか。まず、全編の山場をなす、「露の巻」における七郎の妹斬殺の箇所を見る。

七郎いろをかへて、「かくことわりにあたる事もいなみたまふからは、いづれの耳にいづれの口をもてわいだめきこえ申さむ。そのこと既にかためまいらせし事あり。よも忘れ給はじ。又我が太刀のゆくりなく折れたりし事をば、何とかみ給ひき。そはいふべからず。こと更宇須美ぬしはひとり子におはせり。かへまた我がひとりのいもとなり。いきとしいけるもの、あはれみのころなからむや。此のうへはたとへことわりなき事なりとも、めぐしとおもふ心ひとつをもて、よろづうけひきたうべかし。七郎かく腰をりて申すからは、此のうへはひとことの御答へによりて、かへもいきてはかへらふまじけれ。さる騒も出で来ば、その御ためにもよからじ。こころをひそめて答へたまへ。うけ給はらむ」と聞ゆるに、八郎かしらを打ふりて、「おのれさきに何ごとをきこえおきつるか。事のしげきに打わすれ侍る。あなかしましのことや。いつまでのたまふともうけひくまじ」といひすて、其のむしろをたたむとするを見て、かへも今はとおもふけしきみえければ、「いでや八郎よ、そこにありて此のますらをがふるまふ事を見たまへや」と、をたけびにたけびながら、かへが衣のえりひしとつかみ、ひきよせてのけさまにおさへ、太刀をぬきて、たかむなさかをさす。

ここで問題としたいのは、「かへも今はとおもふけしきみえければ」という一節である。一見、七郎の妹殺しはかへとの同意のもとに行われたように見える。しかし、「よみの巻」で、残された宇須美の前に亡霊となつて顕れるかへが語る死の場面は、この「露の巻」の記述と微妙な齟齬を感じさせる。

「さればよ。今住みてはべる国は、けがらひのみおほくて、人のたよりとてはなきところなれば、心のほかにへだたりまゐらせしぞ。」「さるところへは、何しにまゐりたまひつる」ときこゆれば、しばしきめぎめと打泣きて、「御あたりをはなれて、何のころをもてかまゐるべき。兄なりける七郎、わがむねをとらへて何事も願はかなはず。はやくまかむでよと、氷なすつるぎをぬきて、我を追ひはなつほどに、さかしまになるとおぼえしが、いと闇き国に出でつる。



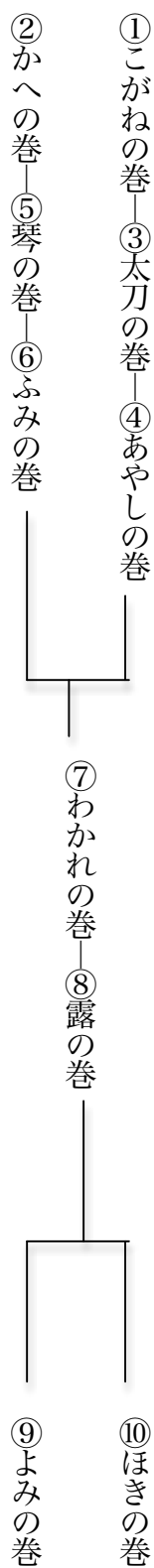
「心のほかに」「御あたりをはなれて、何のころをもてかまぬるべき」そう繰り返すかへの言葉は、覚悟の死を受け入れた者のそれではない。意志を踏みにじられた被害者の恨み言である。なぜこうした齟齬が生じるのか。それについては、「露の巻」におけるかへの斬殺場面が、七郎の側から語られているため、と考えるほかはない。そこには七郎にとって都合のよい解釈が含まれている。かへ亡霊の語りが、それを批判する。「いでや八郎よ、そこにありて此ますらをがふるまふ事を見たまへや」とあるように、妹殺しは「ますらを」の行為であった。しかし、妹はそうした価値観に同意していない。「氷なすつるぎ」は刃の鋭さをいう類型的な表現だが、ここではやはり残酷なイメージをもたせられている。妹は「ますらを」の振る舞いを肯定的に捉えていない。このように、「みやび」の側と「ますらを」の側の論理は食い違う。また「ほぎの巻」では、

さて八郎はこがね千ひらを出して、寺をたて経ををさめ、なき人のおくつきには、石をたたみ珠をちりばめ、そがうへに飢こごえたるものには、よねをあたへ布をあたへ、ためしなき御のりを尽しける。此の故にや宇須美やまひおこたりはて、すがすがしくなりにけり。

とある。「よみの巻」で、愛する人を失った宇須美の慨嘆を見てきた読者は、この結末に違和感を覚えざるをえない。長島弘明はこの結末を、

『西山物語』末尾の「ほぎの巻」で、物語構成の常としても、一話が急激にハッピー・エンドに収束し、「宇須美やまひをこたりはてゝ、すが／＼しくなりにけり」とあつて、かへの死を置き去りにするように物語が結ばれるところに、綾足の心の陰影を見るべきか否か。

と評した(14)。このように「ほきの巻」が「かへの死を置き去りに」している理由は、この「ほきの巻」の語りが、七郎、八郎の「ますらを」の側からの語りだからである。そのため、語りは「みやび」の側に属する宇須美の心情によりそう形で病の回復を語らない。「此の故にや」と、八郎の側から、八郎の行つた仏事との関係からでしか宇須美の病気の平癒を語ることができない。それが「ほきの巻」の語りである。このように、『西山物語』では「ますらを」の側と、「みやび」の側の語りが、お互いがお互いを一種、相対化し合う構造になっている。妹を殺した大森七郎の行為は妹かへ自身の側から、心ない残酷なものとして捉えられ、また恋人を喪つた悲嘆ゆえ、病に伏したはずの宇須美は、八郎の側からその心限を無視した御法の結果として、病の平癒を語られてしまう。この相対化の構造は「露の巻」、「よみの巻」、「ほきの巻」に顕著だが、それは、そもそものはじめから『西山物語』に伏在していたのではなかったか。ここで試みに『西山物語』を「ますらを」の物語と「みやび」の物語とを巻に即して分類してみると以下のように図式化できる。巻名の頭についている数字は巻の順序を示す



それぞれの巻を、大森七郎、八郎の物語をその主題とするものと、かへ、宇須美の物語をその主題とするものとに分けると右のようになる。「こがねの巻」「太刀の巻」「あやしの巻」「ほきの巻」が、七郎、八郎の物語を主眼とする巻であり（こちらをA系と名づける）、「かへの巻」「琴の巻」「ふみの巻」「よみの巻」が、かへ、宇須美の物語を主眼とする巻である（こちらをB系とする）。「わかれの巻」「露の巻」は両方に属する。もちろん、『西山物語』は一つの長編読本であり、A系、B系の一方だけあれば、成立するというわけではない。その意味でこの分類が、少々恣意的であることは認めなければいけないが、こうして図式化することで、作品の構造はかなり明確になる。

この図式をもとに、作品の展開を眺めると、「こがねの巻」「太刀の巻」「あやしの巻」と続く、七郎、八郎の物語の展開に、「かへの巻」「琴の巻」「ふみの巻」の展開が従属することに気づく。「こがねの巻」における剣の奪取によって、老母は病に伏し、その看病のため宇須美はかへとひとつ屋根の下で過ごすこととなった、結果として二人は親密の度を深めてゆくこととなる。さらに「太刀の巻」における剣術試合前夜の盟約が、「琴の巻」における二人の同衾の背景ともなっている。また「あやしの巻」以降の展開を経て段々と疎遠になってゆく両家の関係に「ふみの巻」も支配されている。その結果、「わかれの巻」「露の巻」の破局がある。このように、一貫して従属関係にあったかへ、宇須美の物語が「よみの巻」に至り、七郎、八郎の物語に対して、それを相対化する批判の牙を剥く。ここではじめて、「みやび」の物語は、「ますらを」の物語と拮抗する主題として読者の前に立ち現れてくる。

作品の論理として、この「ますらを」の物語と、「みやび」の物語を拮抗するものとしたが、表現の上では、理想化された、やや平板な「ますらを」の形象に対し、「みやび」の形象は迫真性をもつて描かれている。高田衛も(15)木越治も、「雅文体による小説表現が最も効果を挙げているのは」、「かへと宇須美の恋愛描写である」とし、「よみの巻」の文章を引き、「こうした纏綿たる情緒を描くことにおいて、綾足は非常な才能を発揮する」としている(16)。また木越俊介も、

すなわちこれらは、かへが全身全霊を傾けて相手に伝えるためにつかみとった古典などの出自に依存しない言葉に他ならず、彼女自身のものであるということが重要なのである。『西山物語』は「よみの巻」に来てようやく、等身大の言葉で語る一人の登場人物を生み出したのである。

とする(17)。このように、諸家みな「みやび」の物語の表現を、『西山物語』の文芸的な達成として評価してきた。本章としても賛意を表したい。なお、こうした綾足読本の特徴を読本史の中にどう位置づけるかについては、第二部第三章で再度触れる。

## おわりに

以上、『西山物語』の構成について私見を述べた。構成の面では、太刀の呪いといった要素を使い、全体を統御しようという意識が見られるが、十分に達成されているとはいえず、後期読本のような結構性は有していない。また、『西山物語』は、「ますらを」の物語の論理と、「みやび」の論理が絡み合いながら、展開していくという構成をもつが、描写としては、平板な「ますらを」の物語よりも、情緒的な「みやび」の物語に見るべきところがあることについても触れた。

なお、本章は、作品研究を主眼とするが、最後に、出典注の問題について言及しておく。上巻「こがねの巻」冒頭で七郎の家族構成は次のように語られる。

妻ははやくなくなりて、老いたる母のおはするを、家は貧しけれど、みたりの子してともかくにもかしづきまゐらせける。

この「かしづく」という語には「竹取物語 大切に仕ふる也」と自注が付される。現在、『西山物語』の詳細な注釈としては、新編日本古典文学全集の高田衛注があるが、高田注では『竹取物語』の「かしづく」の用例不詳(18)とする。しかし『竹取物語』正保三年(二六四六)刊本(以下、正保刊本)では、

三月ばかりになる程に、よきほどなる人になりぬれば、かみあけなどさうして、かみあげさせ、きちやうの内よりも出さず、いつきかしづきやしなふ程に、此ちこのかたちのけそうなる事世になく

と「かしづく」の語が載る。綾足は正保刊本に拠ったものであろう。この箇所、現在通行の古活字十行本では、

三月ばかりになる程に、よき程なる人になりぬれば、髪あげなどさうして、かみあげさせ、もぎす、ちやうのうちよりも出さず、いつきやしなふ、此児のかたちの、けそうなること、世になく

となつており、高田注はこちらに拠つたものと思しい。『西山物語』には「竹取」の出典注が付く語彙が他三例ある。「おほぬす人かな〈竹取に大ぬす人のやつがとも書り〉」「のけさま〈竹取物語〉」「しろめがちになり〈竹取物語〉」（山括弧内が注の内容）である。いずれも正保刊本では、「おほ盗人のやつか」「のけさまにおち給へり」「御目はしらめにて」とある。正保刊本に「しらめ」とあるのを「しろめ」とすることに疑問なしとはいえないが、管見の範囲では、「しろめ」また「白目」表記の本はなく、正保刊本を使ったとの推定は優位である。

また、同じく上巻「かへの巻」では、七郎の老母の性格を、

此母、人と成りよろづいやめきたりしかば、日頃まじらひうすく、おなじあはひのおふな達すらかゝる時にもより来ず。

と語る。この「いやめき」に「儼」の字を傍書し、さらに「イセ物語 世に云かたき方」との自注を付す。これについても高田注は、『伊勢物語』用例不詳」とする。確かに、定家本などには見られない語だが、賀茂真淵『伊勢物語古意』には(19)、

むかし、をところありけり。最儼<sup>いといやゝかにじちやうにて</sup>爾実用<sup>いといやゝかにじちやうにて</sup>爾而あだなる心なかりけり(百三段)。

「いやゝかに」の語が出る(20)。用字も『西山物語』と一致するため、ここから「いやめく」の語を採つたと思しい。もともとこの箇所は、定家本で、「むかし、おところ有けり。いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり」と、「いとまめにじちようにて」とあつ

たものを、真淵が、

古本に、儼尔と書たるは、恭の意なれば、いややかにとよむべし。實用は実様なるを、音にとなへ来れるをしらせで、用の字かりて書るにや。今本に、まめに實用にてと有は、まめと実やうと同じ意なれば、誤れる事明らか也。

定家本の「まめ」と「じちよう」が同じ意味であることを難じ、真名本の「最儼尔実用尔而」から、新たな訓釈を試みたもの。「まめ」と「じちよう」の意味の重複を難するのは、荷田春満『伊勢物語童子問』に先例があり、真淵もこれを踏襲するが、「うやくしくまめに」との春満の案に対し(21)、「いやゝか」の訓を考案したのは真淵の創見にかかる。『伊勢物語古意』の影響については、鈴木淳「近世の創作と注釈の間——賀茂真淵『伊勢物語古意』をめぐる」が、『西山物語』「をさく」を「日本紀長々の義」とすることをとりあげ、「長々の義」が真淵の『伊勢物語古意』に拠ることを指摘している(22)。この「いやめき」の例も併せて考えれば、『西山物語』は説だけでなく、本文まで『伊勢物語古意』に依拠しているといえる(23)。

また鈴木稿は「をさく」の傍注「明直」が、谷川士清『日本書紀通証』(宝暦十三年(一七六三)刊)に拠ることも指摘している。高田注では、出典注について、他にも用例不詳とするものが複数例ある。調査がすすめば、こうした用例不詳は減らすことができるものと思う。そうすることで、和学の書としての『西山物語』の位置づけもより明確になるであろう。そのための基礎作業として、ここに稿者の得た知見を書きつけておく。

注

(1) 『江戸大坂の出版流通と読本・人情本』(清文堂、二〇一三年) 第三部第一章。

(2) 山本美幸『『西山物語』論——剣をめぐる——』(『清泉語文』第三号、二〇一〇年三月) は、物語の結末において、呪いが完

結し、八郎の営んだ法要や、七郎が呪いに屈服したことをもって、正成の怨霊の思いもはれたという。太刀の呪いに言及しないまま、物語が七郎の家の繁栄を言祝いで終わることの矛盾に対する一つの解釈といえるが、「さてはさだまれるすぐせなりけるものなりし。さもしらでうらみつる事のくやしき」という一節を七郎が呪いに屈服したものと見るのは、本章と見解を異にする。

(3) 長島弘明「『死首の咲顔』考」(『国語と国文学』第八五巻第五号、二〇〇八年五月)。秋成のいわゆる「ますらを物語」と比較して、『西山物語』の態度を「八方美人的」としたもの。

(4) 『新日本古典文学大系二〇 源氏物語 二』(岩波書店、一九九四年)。

(5) 奥野美友紀「『西山物語』と『歌文要語』」(『都大論究』第三一号、一九九四年六月)。

(6) 『日本古典文学大系三五 太平記二』(岩波書店、一九六一年)に拠る。

(7) 長谷川端校注『新編日本古典文学全集五六 太平記③』(小学館、一九九七年)。

(8) 『義太夫節浄瑠璃未翻刻作品集二六 車還合戦桜』(玉川大学出版部、二〇一三年)。なお、節等は省略した。以下同。

(9) 『叢書江戸文庫三九 近松半二浄瑠璃集「二」』(国書刊行会、一九九六年)。

(10) 天正本『太平記』巻二十五「三種の神器来由の事」(前掲『新編日本古典文学全集 太平記③』)。

(11) この他にも、近松の『吉野都女楠』(宝永七年(一七一〇)初演)に、悪役の彦七が、「三種の神器」の宝剣に貫かれて息絶える場面が出る。

(12) 『『太平記読み』の時代 近世政治思想史の構想』(平凡社ライブラリー、二〇一二年)第一部第一章。

(13) 長島弘明「『本朝水滸伝』の構想」(『日本文学』第三三巻第八号、一九八六年八月)は、『本朝水滸伝』の拡散してゆこうとする表層のストーリーと趣向群を裏側から規制する、一種の求心力として〈倭建命モチーフ〉があると指摘した。このモチーフは、「綾足の片歌・国学・物語という位相の異なる領域を貫通する同一のモチーフ」という。『西山物語』が描こうとする理想的な武

土像は倭建命へとつながる要素をもつ。ここに同様のモチーフを読みとることも可能である。

(14) 「建部綾足『西山物語』」(『国文学』第三七卷九号、一九九二年八月)。

(15) 『江戸幻想文学誌』(平凡社、一九八七年)所収。初出は、『文学』第四三卷第八号・七号(一九七五年六月・七月)。原題「奇談作者と夢語(上)(下)——秋成・庭鐘・綾足をめぐって」。

(16) 「小説の革新」(『岩波講座日本文学史』九、岩波書店、一九九六年)。

(17) 注(1)参照。

(18) 中村幸彦・高田衛・中村博保校注・訳『新編日本古典文学大系 英草紙・西山物語・雨月物語・春雨物語』(小学館、一九九五年)。

(19) 『伊勢物語古注釈書コレクション 第五卷』(和泉書院、二〇〇六年)。

(20) この用例が百三段に拠るものであることは、すでに長谷川強「建部綾足の伊勢物語講釈」(『武蔵野文学』二〇号、一九七二年一月)が『旧本伊勢物語』との比較から指摘している。

(21) 『伊勢物語古注釈書コレクション 第四卷』(和泉書院、二〇〇三年)。

(22) 人間文化研究機構国文学研究資料館編『古典籍研究ガイドンス 王朝文学をよむために』(笠間書院、二〇一二年)。

(23) 『旧本伊勢物語』(明和六年刊)では、「儼仁実用」を本文として、右に「マメニジチヨウ」、左に「イヤ、カマメザマ」の訓をつける。



## 第二章 『本朝水滸伝』考(二)——反復される主題——

はじめに——「葛城王」私注——

本章と次章では、『本朝水滸伝』(安永二年〔一七七三〕刊。後編は未刊)を対象に、作品研究を行う。特に本章では、『本朝水滸伝』の長編構想について述べる。『本朝水滸伝』は初印本で十卷九冊。当時の読本としては破格の長さを誇る。何がその長編構想を支えているのか、そしてそれは、読本史の中でどのような意味をもつのか。

行論の都合上、まず、問題を設定し、それに対する回答を述べる形式で論を展開する。『万葉集』卷十六「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」(1)の左注に登場する「葛城王」について、『本朝水滸伝』は天智天皇のこととする。

近江大津の宮に御代しろしめし、天皇(天智)いと若うおはしまして、大御名を葛城の王と申奉りしころ、御父天皇の勅をうけもちてみちのくに下りませしに、其国の守の娘、采女を歴て家にかへりおはせしに、御かはらけを奉るとて、「浅き心は我もはなくに」とよみて奉りし歌にめで給ひて、則御かたへにさむらはせ給ふに

(第三十六条)

これについて新日本古典文学大系の本越治注は、「天智天皇の若き頃の名とする説は他に見当たらない」とする(2)。確かに当時の『万葉集』注釈の水準に照らせば、適切な注である。しかし、『万葉集』の注釈以外ではどうか。例えば、『毘沙門堂本古今集注』が、『古今集』仮名序に引かれる同歌に対して以下のような注を施している(3)。

註曰、浅香山ノコトバ、ト云者、ナニハ津ノ後ヨリ、歌二十一代ノ御門マデ断テヨマズ。天智天皇イマダ御位ニ即給ハズシテオハ

セシ時、今ハ位ニ即給マジキ人ニテ賜橘姓、号太政大臣葛城。此時ミチノ国ノ守ニテ下リ給ケルニ、浅香ノ郡ニツキ給。又其所ノ土民等マウケワロクシタリトテ、イカリ給ケレバ、近江ノ采女ト云女、都ヨリ具テ下リタリケルガ、大臣ノ御意ヲナダメ申サムガ為ニヨメル歌也。

先の引用と細部は違うものの、葛城王を天智天皇とする点では一致する。確かに『日本書紀』舒明天皇二年正月の条に、「一ヲ葛城皇子ト曰フ。近江大津宮ニシテ御宇天皇ナリ」(4)とあるように、天智天皇を「葛城」と呼ぶこと自体は、正史に根拠を持つものの、注釈としてはやはり荒唐無稽な俗説というべきである。事実、契沖や真淵など、当時の『万葉集』注釈の世界では一顧だにされていない。しかし、近世の民衆の想像力の範疇には、この説が確かに息づいていた。近松門左衛門『天智天皇』(元禄二年へ一六八九)初演)では、葛城の大君(後の天智天皇)が春日の里に到り、御酒の長の娘の采女と婚姻の杯を交わす。猿沢の池に入水した采女と、この安積山の歌を詠んだ采女を同一人物に仕立てていることもあり、舞台は陸奥となつてはいないが、この場面の背景に、『毘沙門堂本古今集注』のような「葛城王」を天智天皇とする説があることは明らかである。他、『東国旅行談』(天明九年へ一七八九)刊)も、「葛城王」を天智天皇とする俗伝を伝える。右のように、「葛城王」を天智天皇とする『本朝水滸伝』にもそれなりの根拠があった。

しかし、『本朝水滸伝』の作者綾足は賀茂真淵門下の和学者である。『本朝水滸伝』はこの浅香山の歌の下のを「浅き心は我もはなくに」とする。これは寛永版本『万葉集』では、「ワガオモハナクニ」であつたのを、契沖『万葉代匠記』精撰本が「落句ハ、ワガモハナクニト読ベシ」と訂正し(5)、真淵も『万葉考』で同じ説をとる。この注釈史の流れを『本朝水滸伝』の本文は引き継いでいる。だからこそ、『万葉代匠記』や『万葉考』がとらない、「葛城王」を天智天皇とする説を『本朝水滸伝』がとるのは奇妙である。正統な注釈をあえて避け、俗説による設定をわざわざものしていることになる。なぜか。藤原加祢与序に古語学習の書としての側面を謳っていることを考えれば、こうした点は瑕疵にもなりかねない。また単純な比較はできないが、『西山物語』(明和五年へ一七六八)刊)版本では、万葉歌に対して犯していた誤謬を改刻によつて訂正した例(6)もあり、疑問は残る。

本稿はこの疑問に対し、作品論の立場から回答する。より具体的にいえば、弓削道鏡の設定に関する俗説の利用方法を検討すること

で、この疑問の回答となる、作品世界の論理を指摘することを企図している。その上で、『本朝水滸伝』がどのような方法で長編構成を支えているのかについても指摘する。

## 一 『本朝水滸伝』出典追考

まず、前提として典拠の問題を整理しておく必要がある。現在では『本朝水滸伝』は『前々太平記』（正徳五年（一七一五）刊）を主要な典拠とするとの考えが定説となつているが、本論の立場はそれに懐疑的である。そこで、ここでは研究史を再検討し、『本朝水滸伝』の典拠について、補訂を試みる。

研究史上、『前々太平記』を典拠として言挙げしたのは、寺島貫章『本朝水滸伝』出典考（7）である。寺島は『本朝水滸伝』第八条、第九条と『続日本紀』を比較した結果として、「この二条と、『続日本紀』を比較してみると、宇佐八幡で神託を受ける場面、清麻呂が両脚の筋を切られること、竜田山の麓で清麻呂が命をねらわれることなど、増補が見られる」として、この増補部分が『前々太平記』と一致することを指摘し、『前々太平記』を典拠と判断した。しかし、これは『前々太平記』だけが持つ要素ではない。以下、この宇佐八幡宮神託事件の説話的な変転を整理する。この話の原拠は、『日本後紀』延暦十八年二月二十一日の条、いわゆる「和氣清麻呂薨伝」中の記事である。それが、『八幡愚童訓』や『神皇正統記』あるいは『水鏡』の中でさまざまなゆれを生じさせていく。近世に入り、林鷺峰編『日本王代一覧』（寛文三年（一六六三）刊。以下、「王代一覧」と略称）によつて、一つの定型が完成する。これ以降、宇佐八幡宮神託事件について触れる文献はみな『王代一覧』を間接または直接に引く。『前々太平記』も、細部の文辞を変更するが、典拠は『王代一覧』である。つまり、『王代一覧』から『本朝水滸伝』への直接的な影響も考慮する必要がある。

そこで、『前々太平記』と『王代一覧』、どちらが『本朝水滸伝』の記述と一致するか検討する。ただし、『王代一覧』は『前々太平記』の典拠の一つであり、比較は当然、両書の記述が対立する箇所に限られる。該当する箇所はそう多くないが、その諸例を考えれば、以下のように『王代一覧』の方が典拠として優位との結論になる。まず、『本朝水滸伝』第二条で語られる安祿山の乱についての記述

から。

又春日野の烽火の野守が此あかつき訟申さく、唐国の天皇色欲にめで給ふをこたりによりて、臣安祿山兵を集めて御代を奪はんとす。祿山もしほい遂ずは、船を東に枉て此御国をやうかゞひ候はんと申。

これは、『王代一覽』卷一、天平宝字二年十二月の条に、

大唐ニ安祿山乱ヲヲコシ、世ヲ奪フ由、日本へ聞ユルニヨリテ、安祿山本意ヲトゲズンバ、若日本ノ海上ヘヤウカゞヒキタルベキモハカリガタシ。所々ニ其用心ヲスベシト下知ス

とあり、「世ヲ奪フ」、「本意ヲトゲズ」、「日本を「ウカゞ」う、などの語彙の一致が注目される。対して、『前々太平記』卷二「藤原仲麻呂賜姓名並禦異賊事」の安祿山の乱についての記述は、以下の通り。

然ルニ頃年唐ノ賊臣安祿山両京ヲ陥レ、翠華蜀ニ入テ郡国大ニ動乱スト聞エケレバ、朝廷詮議アツテ祿山ハ本狂胡ノ狡堅ナリ。今天恩ニ背テ暴乱ヲ起シ、少ク勝利ヲ得トイヘドモ、群兇竟ニ其軍敗ルベシ。已に利ヲ失フニ於テハ必ズ外国ニ船ヲ出サン。然ラバ我西州ニ競ヒ来ランモ亦知ベカラズ。兼テ兵ヲ備ヘ、其禦アルベシ。

『本朝水滸伝』との語彙の一致は見られない。すでに指摘があるように(8)、『前々太平記』は『本朝通紀』(元禄十二年(一六九八)刊)を主要な典拠としており、この箇所の記事も、同書に拠っている。また、『本朝水滸伝』第三条から第五条にかけて「石村村主」という人物が、押勝討伐の将の一人として登場する。彼の名についても、『前々太平記』卷三「惠美押勝謀反並江州高嶋合戦之事」で

は、『官兵ノ其内ニ石村石楯ト云者押勝ヲ生捕テ頭ヲ刎』のように、「石村石楯」とする。対して、『王代一覽』卷二、天平宝字八年の条には、「官兵石村々主ト云者押勝ヲ生捕テ討斬。其首ヲ京へ送ル」と「石村々主」とある、これも『本朝水滸伝』に近い。これは元、『続日本紀』天平宝字八年九月十八日の条に、「軍士石村村主石楯、押勝を斬りて、首を京師に伝ふ」のように、「石村村主石楯」とあったものが、『王代一覽』では「石村村主」に、『本朝通紀』（卷十一、天平宝字八年秋九月）では「石村石楯」と分岐し、『本朝水滸伝』は前者を、『前々太平記』は後者をそれぞれ踏襲した結果と考えられる(9)。

このように、『前々太平記』と『王代一覽』の対立する箇所と『本朝水滸伝』を比較した場合、『本朝水滸伝』は『王代一覽』と一致する。とすれば寺島稿が根拠とした宇佐八幡宮神託事件についても、『前々太平記』に拠ったと考える必要はない。直接『王代一覽』に拠ったとする方が自然である。確かに、光明皇后の湯屋説話のように、『王代一覽』ではなく、『前々太平記』にある説話を『本朝水滸伝』が利用する場合もあるが、行文の類似などは見られず、また、『元亨釈書』や『広益俗説辨』など他の諸書にも出るため、そのまま『前々太平記』を典拠とした根拠にはできない。ただ、逆に、『前々太平記』が『本朝水滸伝』に全く影響を与えていないという断定もできない。しかし、少なくとも寺島の提示した『前々太平記』から『本朝水滸伝』へという単純なモデルを排除し、影響関係のあり方について個別に点検しながらすすめていくことが要求されるものと考ええる。

右の前提に基づき、典拠として優位と判断した『王代一覽』を中心に、『前々太平記』及び『本朝通紀』なども比較対照として適宜参照しつつ、道鏡像の描き方を考える。

## 二 道鏡の造型

弓削道鏡は、『続日本紀』に「道鏡、俗姓弓削連河内の人なり」とあるように、河内出身とされている。しかし、『本朝水滸伝』では、「伊予の国弓削の浜に、弓削道鏡と申修行者のはべる」と伊予出身に変更される。これは、例えば『予陽郡郷俚諺集』（宝永七―一七一〇）年成立」に、「〇弓削、孝謙天皇の時、弓削道鏡予州の産と云」(10)とある類の地方の伝承を取り入れたものであろう。もちろ

んこれは、作者が参照したと思しい『王代一覽』や、あるいはその周辺にある『前々太平記』にも見られない説であり、ここもまた、先の葛城王の例と同様、意図的に俗説を選択していることになる。

なぜか。これは作中での道鏡の位置づけと関わるものと考えたい。道鏡は、孝謙天皇の病を祈祷によって鎮めるために、阿曾丸によつて都へと招聘される。その祈祷の様子を描いた以下の描写、

さて手携たる山多豆は右のかたへにさし置、佩せる太刀はぬき出して、前なる高机にそなへて、おこなひつかふまつり始んとする時、春の事なれば、上の愛給ふ猫の妻どひすとて、唐猫のいとちひさくをかしげなるを、すこし大きな猫の追ひつゞきて、俄に珠簾の小簀のつまよりはしり出しが、千坐の机を踏わたりて、彼そなへおける太刀のしのぎ刃に、先なる唐猫の胸をつき破りてげり。

#### (第二条)

これを見た道鏡は「吉瑞なり」と帝の病の平癒を予言する。そして、この唐猫の血を浴室で洗い流す姿を孝謙帝が垣間見ることが、寵を得る契機となるのだが、引用箇所、傍線部の表現は、『源氏物語』若菜上に拠る(1)。

御木丁もしどけなくひきやりつつ、人げちかくよづきてぞみゆるに、から猫のいとちひさくをかしげなるを、すこしおほきなる猫のおひつづきて、俄にみすのつまよりはしり出づるに、人人おびえさわぎて、そよそよとみじろきさまよふけはひども、きぬの音なひ、みみかしましき心ちす。

柏木が蹴鞠の最中、女三の宮を垣間見する契機となった、例の唐猫である。これ自体はすでに曲亭馬琴の批評中に指摘されているものだが、これが同時に、『水滸伝』の巧みな日本化、物語化にもなっている点は注目される。柏木の蹴鞠は、高球の蹴鞠と隠微に呼応し

ている。作者がここに『源氏物語』を用いた背景には、蹴鞠によって出世した『水滸伝』の高俣から、蹴鞠の最中に、女三宮を垣間見した柏木への連想が働いたためであろう。こうした経路で、孝謙帝の好色な覗き見の場面は構想されている。この凝った手法によって、『本朝水滸伝』の道鏡は、『水滸伝』の高俣と丁寧に対応させられている。しかし、『湘中八雄伝』（明和五年刊）『女水滸伝』（天明三年（一七八三）刊）『いろは醉故伝』（寛政六年（一七九四）刊）『忠臣水滸伝』（寛政十一年前編刊、享和元年（一八〇一）後編刊）といった初期の『水滸伝』翻案ものがこの「高俣出世」に寄せた関心はきわめて低く、使うのは『本朝水滸伝』のみ。しかも、このような凝った方法で取り込んでいる点は特徴的といえる。そして、この道鏡と高俣の重ね合わせによって、「道鏡」の「成り上がり」が一層、強調されている。道鏡の「成り上がり」という性格自体は、史実の段階ですでに存在したもののだが、これを『本朝水滸伝』は、原抛『水滸伝』の高俣と重ね合わせることによって、より強調したかたちで虚構化している。

『本朝水滸伝』が伊予出生説を用いるのもまた、こうした道鏡像の反映に拠るものと解釈できる。軽太子、軽大郎女の伊予配流が示すように、記紀の世界では、伊予は流謫の地であった。作中の伊予をそこまで極端な辺境と見ることは行き過ぎだが、都鄙でいえば、伊予が鄙であるのは明らかである。道鏡はそうした世界から都にやって来る。その身に合わせ巨大な野心を抱えて。

唐猫の血で穢れた体を清めるために入浴した際、道鏡に着替えとして用意されたのは、太上天皇の法衣であった。「我はからずも此御衣を着なん、ほい爰に足し満り」と北叟笑む道鏡。先程まで、鄙に住む一介の呪術師に過ぎなかった男の、なんと途方もない野心であろうか。地方から中央へ、おのれ能力のみを頼りに、権力の中枢へと上ってゆく道鏡の身振りは、「成り上がり」の典型的なものとなっている。作者は、こうした道鏡像を描くために、あえて伊予出生の俗説を用いているものと考えたい。

### 三 道鏡と押勝

道鏡のもつ、「成り上がり」という性格について、これまで詳細に述べてきたのは、『本朝水滸伝』における道鏡糾弾の論理がこの一点に掛かっているからである。第八条、道鏡を皇位に就けるべきか否かを宇佐八幡に問うた和氣清麻呂に、顕現した神はこう答える。



阿曾麻呂あらぬ事を奏せり。それ天つ日嗣は神実猶うけつがせたまふ。私の事にあらず。いかに況やすぢなきものをや。汝道鏡をかしこまず、告のまに／＼告りきこえ申せ

「いかに況やすぢなきものをや」。宇佐大神が道鏡を糾弾するのは、彼が「すぢなきもの」であるからに他ならない。この箇所は、先に指摘した『王代一覽』の記述を忠実になぞるが、『王代一覽』では、『日本後紀』以来の表現を踏襲して「況や無道ノ者ヲヤ」となっており、『前々太平記』もそれに従う。これはもちろん、典拠の漢文訓読体と、『本朝水滸伝』の和文体といった文体上の違いが要請した書き換えでもあろうが、それ以上の意味を「すぢなきもの」という言葉は担っているように思われる。「無道」は『日本後紀』で「悖逆無道」と人倫・国法に背く意の「悖逆」と併せ用いられていたことが示すように、道徳的な価値判断から道鏡を排斥する言葉である。しかし「すぢなきもの」の場合は、素性の善し悪しに基づく価値判断といった意味合いが強い。例を挙げれば「運に乗じ利を得ては、筋なき野人も大名となり」（『武道一覽』〈貞享四年（一六八七）刊〉）といったものが適切か。つまり、ここでは道鏡の「成り上がり」を問題としているのである。

道鏡の「成り上がり」を批判する身振りは、史上有名な「恵美押勝の乱」の読み換えも要請する。たとえば、馬琴は「本朝水滸伝を読む并批評」の中で、押勝について、以下のように論評する。

扨この段（引用者注、第三条）の押勝を、晁蓋に擬したるはいとよし。是より後は押勝を又、宋江に擬したるは宜しからず。そをいかにぞとならば、水滸伝の宋江は、後に宋の忠臣になるをもて、看官おの／＼たのもしく思はぬもなく、おのづからに晁蓋のつくは理りしかるべき所あり。又押勝は国史に拠るに、秦の始皇の母太后の男妾嫪毐、唐の武后の男妾張昌宗等の亜流にて、只佞倖の小人なれば、その罪道鏡と百歩五十歩の間にあり。そを忠臣に作りかえて宋江に擬したりとも、看官の晁蓋はつきがたき役者也。



押勝を「その罪道鏡と百歩五十歩の間にあり」とする馬琴の口吻からは、二人を精神的な双生児と見なす立場が読み取れる。そして、これは当時の一般的な考えであつた。『本朝通紀』も同様の立場に立つ。同書は押勝に対し、「按ズルニ押勝性凶佞ニシテ、帝情ヲ誣惑シテ自カラ威福ヲ極ムルコト久シ」と評語で述べる。これは、道鏡を評した、「按ズルニ道鏡帝意ヲ誘迷シ、驕ヲ極メ朝政ヲ擅トセシヨリ」という表現と相似形をなしており、孝謙（称徳）帝を誑かし、権勢を振るつた二人を、同じ型の人物と見ている。そして、『前々太平記』は、『本朝通紀』のこれらの評を本文に取り込んでおり、押勝と道鏡の位置づけに関して『本朝通紀』と見解を同じくしている。他にも、『前々太平記』は押勝の「恵美」の名の由来に付された「俗説ニ孝謙押勝ヲ御覧ジテエミワラワセ給フユヘニ恵美ト云ハ誤ナリ」という『王代一覽』の注を、「一説ニ恵美トハ孝謙帝仲麻呂ヲ御覧アレバエミヲ含ミ給フノ義ナリ。押勝トハ其威権万人ニヲシカツト云義ナリトハ誤ナリ」と書き換えて収録している。『王代一覽』が誤りとして退けた説を、むしろ許容する方向で書き換えており、押勝と孝謙帝の愛欲の関係を強調する意図は明らかであろう。『前々太平記』が押勝と道鏡を同類と見ていたことの傍証となる。押勝に対する批判のより露わな『本朝通紀』『前々太平記』を中心に見てきたが、『王代一覽』の見方も、そこから大きく外れるわけではない。反乱に至る押勝の動機を、『王代一覽』は、「押勝権サカンナリト云ヘドモ、道鏡ガ常ニ孝謙ノ御前ニ侍テ、其恩寵已ガ上ニアルコトヲ憤リテ、常ニ心モトナクヲモヒテ」と説明する。このように、押勝の乱を、道鏡と押勝の間の、孝謙帝の寵の奪い合いとする考えは、当時の共通認識だつた。それに対して、『本朝水滸伝』の押勝は、道鏡に反旗を翻し、三尾崎の大城に立て籠もつた自らの行為を、「下官天皇の御寵愛をうしなひ奉りしを恨み奉りて、かくこもりたるにあらず。只道鏡が天が下の民を苦しめむ事をおもひはかりてさむらふのみなり」（第四条）と述べる。ここでは、孝謙帝の寵の奪い合いという見方は、押勝自身の言葉によつて否定されている。さらに、押勝はこの後、道祖王らとともに、三尾崎の大城を捨て、伊吹山へと逃れるのだが、そこで、押勝の兄、豊成の言葉で、彼の来歴が語られる。

藤原の仲麻呂こそ天皇の御寵愛あつく、位は大保（右大臣也）に任られ、又家は大職冠よりこのかた、国をたすけてあしき人をばとり押へ、軍にはうち勝の功ありとて、藤原恵美押勝とたまひ、そのうへ御寵愛のあまり、一位を授け大師に任じ給ふへ大政大臣

也」となん。さる事の後にはきかざりしに、いかにしてかく太子の御供つかふまつりて、山のかくれにはまよひ来つる。おもひかけず。

(第六条)

孝謙帝の寵の厚いことが、押勝の来歴にとって重要なのではない。大職冠鎌足以来の由緒ある家柄であることこそが重要なのである。彼はまぎれもない、貴種として物語の中に登場する。そして、それが道鏡の「成り上がり」を糾弾する資格となるのである。地方から中央へと成り上がっていく道鏡の身振りに対し、押勝は権力の中核からの落魄を余儀なくされる。二人の造形は、綺麗に対照をなしている。

『本朝水滸伝』における恵美押勝の乱は、孝謙帝の寵の奪い合いではなく、「すぢなき」成り上がり者道鏡と、貴種恵美押勝との、対立の図式である。物語はこうして二人を峻別する。これを典拠の問題として述べれば、『前々太平記』、『本朝通紀』あるいは『王代一覽』の世界観と『本朝水滸伝』のそれとの間には大きな隔たりがある。典拠から離れた独自の論理によつて『本朝水滸伝』は作品世界を形作っているのである。

四 反乱軍の形象

道鏡と対蹠的な位置にいるのは、何も押勝ひとりではない。反乱軍に加わる者の多くが、押勝と同様の来歴を持っている。まず、押勝の兄豊成だが、公金を使い込んだ彼は、自らの死を偽装して、逃亡することを余儀なくされた。そして白猪と名を変え、伊吹山の猟師たちの王となつたわけだが、彼は決してその境遇に満足しているわけではない。「鹿袴にこそあれ、かく縫ひしたてさせて、むかしのすがたをやつし侍らず」と、おのれの出自への自負も露わに、「天下もしさわがしくならば、ふたゝび蘇生たるおもひにて、君をたすけ奉り、民をめぐみつかふまつりて、伏せたる面を世にあげん」と、もとの身分へ返り咲く機会を希求してやまない(第十八条)。

また、酒折の山男という盗賊の一味となつた吉備武鹿も、同様の述懐を口にする。

おのれはかくてさふらふども、吉備の武彦か曾孫にて、吉備の武村が真子、同じく武鹿と申者にてさむらふ。しろしめすごとく、功ある家にてさむらふを、いさゝかの誤にて、官位を召上られ、我とともに甲斐の国をおひやられ、親なる武村は其恥をしのび得ず、終に口惜き筋にてみまかりて侍るを、おのれまだ若くさむらふに、世のわたらひせんすべなく、心の外に山ごもりの盗人となりてさむらふを、是なる山男の大人にいきあひ、身のうへを明し、こゝのいきほひのまさりたるを立て司とし、おのれは副司となりてさむらふ

(二十四条)

吉備武彦は、『日本書紀』景行紀に、「天皇、則吉備武彦ト大伴武日連ニ命オホセ給フテ、日本武尊ニ従ハシム」と、日本武尊に付き従つたことが伝えられる人物である。近松の『日本武尊吾妻鑑』(享保五年(一七二〇)初演)にも登場し、近世には日本武尊の臣として広く認知されていたと思しい。吉備武鹿の「しろしめすごとく、功ある家にてさむらふを」という自負も、それをふまえて読まなければ、彼の忸怩たる内心を汲み取つたことにはならない。自らの出自への自負とは裏腹に、「いさゝかの誤」によつて、盗賊にまで落魄した彼の境涯は、まさに豊成と相似形をなしている。この二人のみではない、『本朝水滸伝』では、同様の境涯を持つ人物がそれぞれ陸續と登場する。第十二条、明日香太刀は、「世に似なき国罪」を犯し、大和国を逐われ、紀伊の山中に暮らしていた、彼も極刑になるはずだった自分の命を救つてくれた旧主和氣清麻呂を思い、「されど一度は御救免をこひ奉りて本国に帰り、卿(清麻呂)へ御恩謝つかふまつらんとおもひ候」と願つていた。また第十三条、跡見武雄・武荒兄弟は、旧主粟田朝臣真人の娘にあたる、清麻呂の妻子を拐かしてしまった。その過ちを大いに悔い、「御つかへの忠誠」を再び、清麻呂の妻子に尽くすこととなる。第二十四条、文石の倭蜘蛛の親は、皇太子道祖王の「御馬飼」であり、「病にかこちて」、三河国に退いたという経歴をもつ。そうしたおのれの出自を意識し、「都のさわぎを聞て」「いと口をしく思ひ」、「かゝる時にあたりてこそ、御恵みの御報ひを仕ふまつらむものと」いった思いを抱い

ていた。第卅五条、蝦夷の王カムイボンデントビカラは、実際は、「もとよりのえみし」ではなく、「みちのく山に金を掘出して候高麗の安多倍が次の子」「高麗の白主」であつた。「其山の上司」である親のもとで、兄とともに働くべきところを、「いさゝかの咎」により、「はるけくおひ遣られ」、落魄の結果、蝦夷となつた。もとよりその境遇に甘んじているわけではない、いずれは「二国のあるじ」となり、「古さとの親兄へも、それがいさほしによりて、ふたゝび面を合せ候はん」ことへの野心を密かに燃やしている。彼もまた、自らの出自へと返り咲くことを願う、豊成の一変型なのである。

このように、『本朝水滸伝』において、反乱軍に加わる者たちの多くは、心ならずも落魄し、おのれの分限に合わぬ不遇をかこっている。もとの地位へと再び返り咲くことが、彼らの本懐なのである。そうした彼らにとつて、「すぢなき」成り上がり者の道鏡は、それこそ命を賭けて憎まなければいけない存在である。おのれの分限をわきまえず、皇位まで望んだ道鏡。自分たちが本来いるべき地位にのさばる道鏡の「成り上がり」は、落魄した者たちの自尊心を深く傷つけたことであろう。彼らにとつて反乱とは失つたアイデンティティを奪還するための戦いなのである。

ここで、ようやく、冒頭に掲げた葛城王の問題に返ることができる。作品の中では、葛城王の子として、「浅香王」という架空の人物が登場する。この人物を反乱軍に引き入れるために、押勝の一味はさまざまに画策する。つまり、葛城王を誰に比定するかが重要となってくるのは、この浅香王の素性に関わるからである。右に論じたように、反道鏡の旗印を掲げるといふことは、すなわち、道鏡の「成り上がり」を糾弾することである。そしてその資格となるのは、貴種の徴である。諸説ある「葛城王」の引き当てのうちで、それがもつとも際だつのは、橘諸兄や、その他の王とする万葉字上の諸説よりも、天智天皇とする俗説の方であつただろう。俗説を利用する背景には、『本朝水滸伝』の主題との照応が秘められている。「葛城王」を天智天皇とすること、はじめて浅香王は、「天智の落胤」という反乱軍に参加するにふさわしい人物となるのである。

以上、道鏡と反乱軍との対立の図式について述べた。道鏡の側の人物については、詳述しえなかったが、道鏡勢力の中で主要な位置を占めるのは、孝謙帝と太宰府の阿曾麻呂である。彼等は、道鏡ほど「成り上がり」の性格はそなえていない。むしろ道鏡の庇護者であり、後援者である。第九条、道鏡に帝位を譲るべきではないとの宇佐八幡の託宣に対し、孝謙帝は、「天皇も御心の外にておぼしわび給ふ様なり」と失望を隠さない。道鏡の「成り上がり」の論理の肯定し、彼を庇護する立場である。太宰府の阿曾麻呂は、第三条に「太宰府の阿曾麻呂をば、道鏡奏するによりて、太宰府の定め三島をくはへて賜り」と、道鏡によつて出世し、「我に功あればこそ、此所に三島を加へ、五島の司とは成し給へり。さばかりの阿曾丸、何ぞ汝等がごとき言を用ゐむ」(第四十一条)と尊大な身ぶりを見せる。また、道鏡とともに、熱田の神官、小治田連珠名の官位を召し上げ、自らの末子を熱田の神官とするなど(第四十四条)、体制の中から彼等の居場所を奪い、そこにおのれの一族を据えようとする点で、道鏡同様、反乱軍の面々が憎むべき人物であることは確かである。

『本朝水滸伝』全編を一貫する図式について、高田衛は以下のように述べる(12)。

この長編構想を一貫するのは、道鏡Ⅱ高野天皇に代表される古代中央政權と、押勝Ⅱ道祖王に代表される亡命者・辺境民連合との間の、対立・抗争という基本図式であつた。

本章は、高田の提示したこの図式を登場人物の側から再検討するものである。その結果、「中央政權」と「亡命者・辺境民連合」との対立の図式を支えているのが、落魄した者たちが抱える、おのれの出自への捨てられぬ自負であるとの結論に至つた。この動機づけの基に、この対立の図式は読まれなくてはならない。

また、「成り上がり」について付言すれば、「成り上がり」を憎むのは、太平の世の物語の特徴である。『王代一覽』は神武天皇からはじまり、家康による元和偃武までを記述するが、林家の鷲峰の手になる書だけあつて、体制側の論理が見え隠れする。そこでは、成り上がりの秀吉に対して、新田義貞以来の源氏の系統を継ぐ筋目正しき人物として家康は登場する。これは豊臣政權に対する徳川政權

の正当性を謳ったものであろうが、このように、「成り上がり」を憎むのは太平の世の物語の常套である。かつて乱世の英雄であった「成り上がり」者たちは、太平の世からは疎んじられる。もちろん、民衆の側にあつては、「成り上がり」の英雄への期待は常に伏在していたであろう。だが、少なくとも体制の側の論理にその居場所はない。「成り上がり」を憎む『本朝水滸伝』は、そういう意味では近世の社会に合致した物語である。あるいは、反乱を描く危うい物語は、その一点でかろうじて、近世封建社会の物語たりえているというべきかもしれない(13)。

最後に構成について述べる。『本朝水滸伝』の構成は、①はからずも落魄した者たちが、②もとの地位への自尊心を口にし、そしてまた、③再起をかけて反乱軍に加わってゆく。というパターンの繰り返して成り立っている。もちろん、さまざまなバリエーションがあり、別の挿話を間に挟みはするが、『本朝水滸伝』の主要な筋はほとんどこの形式の繰り返しに収斂されてしまう。そして、彼ら自らの出自を語り、道鏡への憎悪を口にするこゝで、はじめに提示された、道鏡対反道鏡勢力の図式は、常に喚起されることとなる。このように、同一の主題を繰り返すことによつて、『本朝水滸伝』の対立の図式は、物語を支える求心力として機能し続けるのである。『本朝水滸伝』の同時期における希有な長編化を支えた要因の一つと見たい。

濱田啓介は「家臣拊拾譚」において(14)、『水滸伝』の小説様式が日本に持ち込まれるときの構造を以下のように説く。

『水滸伝』に見られる因縁は、百八星で、石碣の蝌蚪文が読み解かれて明かされる。『水滸伝』では、彼等が同志になつて行く進の途中で、過去の因縁に言及されることはない。また、彼等が水滸に集合して全員で何かをしなければならないという、その目的を果すために豪傑が参集するものでもない。しかし『水滸伝』が小説様式として日本文学に持ち込まれると、それは逆説的構成的な文学を生ぜしめ、時にはある目的が設定され、それを目指して人々が集合するという形をとる事がある。『絵本壁落穂』はそのような作品である。『本朝水滸伝』もそうである。在野の人たちが結盟して事を謀るのであるから、その目的は体制に対して反逆的・反乱的である。但し最高権力そのものへの勝利はあり得ない。その下の準権力、道鏡とか管領とかに一応の勝利を果すことはあり得るが、それは氣力の充実した大作者ならではの事である。

『本朝水滸伝』も第一条、味稻翁と仙女が柘の枝を百段に折って、吉野川に流す。仙女はこれが百人の子として転生し、最終的にこの吉野の地に集結することを予言する。『本朝水滸伝』は冒頭に、このような因縁を設定する。しかし、未完に終わり、この因縁が全編を首尾一貫した長編小説としてまとめあげる予定であったのか、『西山物語』のように、中途半端なままで放棄されてしまうことになったのか、結果を知るすべはない。むしろ、濱田の指摘する、朝廷の旧臣が打倒道鏡という目的のため拮据していくという家臣拮据譚の形で、『水滸伝』に近似した長編構想を支えているといえる。この際に、登場人物の動機となり、連帯感の基層となり、また作品に興味を添えるものとして機能するのが、「成り上り」を憎む落魄者たちの暗い情熱であるといえる。その意味で主題の反復はやはり長編構成の要といえるように思う。

注

- (1) 歌番号三八〇七。訓は『新日本古典文学大系四 万葉集 四』（岩波書店、二〇〇三年）に拠る。
- (2) 『新日本古典文学大系七九 本朝水滸伝 紀行 三野日記 折々草』（岩波書店、一九九二年）。
- (3) 『毘沙門堂古今集注』（八木書店、一九九八年）。
- (4) 『新訂増補国史大系第一巻下 日本書紀後篇』（吉川弘文館、一九六七年）。
- (5) 『契沖全集』第六卷（岩波書店、一九七五年）。
- (6) 槇山雅之『『西山物語』四書肆合刻本の異本について』（『国際文化研究』第一号、一九九四年十二月）。
- (7) 『論集日本文学日本語』四（角川書店、一九七八年）。
- (8) 『叢書江戸文庫 前々太平記』（国書刊行会、一九八八年）板垣俊一解題など。
- (9) 中野謙一『『本朝水滸伝』出典拾遺』に、「藤原倉麻呂・石村村主の二人、物部勝成の場合と同じく、実際に押勝と戦って功を立

てた藤原朝臣蔵下麻呂・石村村主石楯をもとにして作られた人物であろう。両者については、新大系が『前々太平記』にもとづく名とするが、『前々太平記』には「石村石楯」とあつて「村主」の名に至る手がかりが無い。『日本王代一覽』は「石村々主」として石楯の名を記していないから、それを綾足がそのまま用いたとも考えられるが、『続日本紀』を直接参照し、本来姓である村主を個人名に改めたのかもしれない。」とあるが、綾足が『王代一覽』を見ている以上、無理のある行論である。従いがたい。

(10) 『伊予史談会双書第一五集 予陽郡郷俚諺集・伊予古蹟志』(愛媛県教科図書株式会社、一九八七年)。

(11) 『源氏物語湖月抄(中)増注』(講談社学術文庫、一九八二年)。

(12) 『江戸幻想文学誌』(平凡社、一九八七年)所収。初出は、『文学』第五二巻第四号(一九八四年四月)。

(13) これについて、濱田啓介は「秩序への回帰」(『横山邦治先生叙勲ならびに喜寿記念論文集 日本のことばと文化——日本と中国の日本文化研究の接点——』溪水社、二〇〇九年)において、「本作は高田衛氏によって、亡命者・化外民の反乱蜂起のモチーフが指摘(引用者注、前掲の指摘をさす)され、本作に対するめざましい論として注目されている。本論はそれを否定するものではない。本作の文学的感動はこの読みに従う所であろう。にもかかわらず、その外側には、もう一つ大きな様式的思考があつた。反乱は秩序の無化、新建ではなくて、大局的には、本来の秩序への回帰へ向う文学であつたのである。出自が(本来の秩序界における)氏素性の定かなる者であつたと知つて安んじるのは、封建時代通有の人びとの意識であろうか。」とする。首肯すべき見解である。

(14) 『近世文学・伝達と様式に関する私見』(京都大学出版会、二〇一〇年)所収。初出は『日本文化論叢』(大連理工大学出版社、二〇〇一年)。



### 第三章 『本朝水滸伝』考（二）——二つの「忠義」——

はじめに

前章では、反乱軍に加わる人物の出自に注目し、弓削道鏡に代表される中央政権と、惠美押勝ら亡命者・辺境民の連合軍の対立の図式を支えているものが、落魄した者たちが抱えるおのれの出自への自尊心であることについて論じた。前章で言及した観点から見れば、従来『本朝水滸伝』（前編は安永二年（一七七三）刊、後編は未刊）の不備とされてきたいくつかの問題もある程度説明することができる。たとえば、第十二条、巨勢金石は紀伊の山中で、二人の大男に、仲間の巨勢獵野を殺され、自らは足を折られて、清麻呂の妻子を攫われてしまう。折れた足では行歩かなわず、どうすることもできない金石の前に、馬に荷を載せた一人の男が通りかかる。金石の声に振り返った男は、

人こそあれとてつらくうちみ、「此二人は蹇（こ）よな。獵夫が痛矢串にやあたりたるが、此馬からんといふなるべし。さあらば粟おもく負はせたれば任まゐらせず」とて又行を

と、人命よりも自らの荷物を優先し、金石を見捨てようとする。実はこの男は金石と旧知の明日香の大太刀という者で、倒れているのが金石とわかると、「をいな、さのたまふは巨勢のか」といつて助けに駆け寄る。この大太刀の行動にはやや違和感を覚えるところだが、逆にいえば、彼らの仲間意識のあり様をよく表している箇所ではなからうか。金石も大太刀もかつて朝廷にゆかりのあつた落魄者たちであり、出自を共有しているという連帯感が、彼らの仲間意識の根底にある。どこの馬の骨とも知れぬものを、無理して助けるのが彼らの行動原理ではない。一面では明確に差別的である。

この後、第十三条で、金石を襲った二人の大男は、跡見武雄・武荒という兄弟で、栗田朝臣真人の家人であつたことが明かされる。

清麻呂の妻は、この真人の娘であり、彼らは主筋にあたる人物を拐かしたことを深く悔いる。この男たちを彼女は、「彼等は鬼とおもひけるに、自にはゆゑあるものにて、その後はそこばくの心をくはへてたまはりぬ」と易々と許し、後、金石もこれを受け入れる。殺された獵野にしてみれば理不尽な話であり、馬琴も「本朝水滸伝を読む并批評」中で、

扨この山賊は、跡見武雄・武荒といふ兄弟にて、悪方にあらざりしよし後に知られ、忌部宿禰海道にあふ段はよろしけれども、獵野の枉死あはれむべし。この山賊、極悪の強人ならば、殺すといふとも論なし。後に実事師になるものなれば、獵野は手を負ひしのみにて、金石と共に甦生せしよしに作るべきを、後に二人の山賊が実事師なるよしを看官に見透されじとて、かくねづよくものせしなるべけれど、かくては勸懲の為に宜しからず。獵野をころさでも、後を見すかさぬ書さま、いくらもあるべし。

このように痛烈に批判した箇所である(1)。近世の人々にとつても、受け容れがたい展開であつた。ただし、これも裏を返せば、彼らにとつては行動の適否よりも出自の方が大切ということである。それだけ落魄者たちの連帯感は強固なものなのである。

また第廿五条では押勝たち反乱軍の行為として、

亦三河・遠江の二国より申す。三河の国には二見の大海と申司、多くの徒をゐておちこちに押入、一国をさわがし候上、遠江の国の盗人の司、倭蜘蛛とちからを合て候よしにて、人もなげにかすめ歩行、少しも防がむとする者をば討殺し、追はむとするをば切殺し、そがうへに色よき女をば、人妻のわかちもなく打たはけなど仕るに、さるめにあひて、みさほだちたる女は、みづからくびをまとひて死たるなども侍り。

強盗・殺人・強姦等のまぎれもない悪行が都へと報告される。これについてもほとんど情状酌量の余地はないが、

されどさるよこさま事するは、故なき小ぬす人らにや侍らむ。遠目に其司といふ者を見とめて候に、いみじき武士にて、中々さる筋もなきふるまひどもはすべき人がらにも見え侍らぬが、何にまれ、盗人の司なる事は違あらず。

盗人たちの張本は、そうした非道な行いには似げなき武士だとして、盗賊・殺人・強姦は彼らの本意ではなく、道鏡の悪政に対する叛意の一つとしてやむなく起こしている行為だといいたのである。しかしさすがに無理がある。木村黙老が「賊の悪行いかにもいぶかし」(2)と評して以来、『本朝水滸伝』の中でもかなり批判の対象となつた箇所である。ただし、これも、先ほど述べた、やや差別的な、彼らの出自への矜持からすれば、それほど心を痛めるようなものではないのかもしれない。

右のように、前章の指摘により『本朝水滸伝』の諸問題のいくつかは合理的に解釈しうるのだが、近時、風間誠史「近世文学を批評する——馬琴と『本朝水滸伝』を読む——」(3)において第四十一条および、第四十五条に登場する、阿曾麻呂の忠臣、秦金明について「秦金明という人物を通して『本朝水滸伝』は何を語ろうとしているのか、私たちにとつても大きな謎である」とこの挿話についての疑問を提示している。確かに金明の問題は、解決すべき重要な問題と考える。そこで、本章では他の疑問と併せ、この問題を扱う。

## 一 平群の駒丸について

『続日本紀』神護景雲三年九月の条に、大宰主神習宜阿曾麻呂が、道鏡を皇位につければ天下太平になるであろう、との偽りの八幡神の託宣を奏したとの記事が載る。世にいう宇佐八幡神託事件である。この阿曾麻呂は、中臣習宜朝臣阿曾麻呂ともいい、『続日本紀』に、他にも数例任官の記事が出るが、その生涯を詳らかにし得るほどのものではない。『本朝水滸伝』では、孝謙天皇病臥の折、祈禱師として弓削道鏡を推薦、以後道鏡の威を借りて権力を恣にする人物として描かれる。この阿曾麻呂の弟が、物語の後半に登場する(第廿八条)。名を平群の駒丸という。こちらは『続日本紀』に登場せず、また『日本王代一覽』(寛文三年(一六六三)刊)等、この宇佐八幡神託事件を扱った諸書にも出ない。作者の創作した人物である。なぜ、彼が「平群」姓なのかは従来疑問であつた。もちろん、直

前の第廿七条には、『万葉集』卷十七の平群女郎の和歌「中々に死ばやすけん君がめを見ずひさならばすべなかるべし」(三九三四)を登場人物の詠じた歌として使用していることもあり、この平群女郎などに想を得て、上代風の姓として無作為に選ばれた可能性はある。しかし、近時、稿者は別の解釈を得るに到ったので、ここで述べておく。

留意すべき点としては、平群姓は弟だけでなく、阿曾麻呂の姓をも暗示するという点がある。先述のように『続日本紀』には「中臣習宜朝臣阿曾麻呂」だが、『本朝水滸伝』では阿曾麻呂はもっぱら「太宰府の阿曾麻呂」と呼ばれ、姓は明示されない。弟駒丸の姓即ち阿曾麻呂の姓と考えても大過ないであろう。そして、結論からいえば、この平群姓は大友真鳥をかすめたものと考ええる。

大友真鳥は、『平家物語』巻第五「朝敵揃」に朝敵の一人として登場する(4)。

それよりこのかた、野心をさしはさんで、朝威をほろぼさんとする輩、大石山丸・大山王子・守屋の大臣・山田石河・曾我入鹿・大友のまとり・文屋宮田・橘逸成・ひかみの河次・伊予の親王・大宰少貳藤原広嗣・惠美の押勝・佐あらの太子・井上の広公・藤原仲成・平将門・藤原純友・安陪貞任・宗任・対馬守源義親・悪左府・悪衛門督にいたるまで、すべて廿余人、されども一人として素懷をとぐる物なし。かばねを山野にさらし、かうべを獄門に懸けらる。

この「大友のまとり」は武烈天皇即位前紀に登場する平群真鳥をかすめたとされる(5)。以降、古浄瑠璃『大友のまとり』、また通俗軍記『大友真鳥実記』(元文二年へ一七三七)刊)あるいは浄瑠璃『大内裏大友真鳥』(享保十年へ一七二五)初演)『魁鐘岬』(明和七年へ一七七〇)初演)、他浮世草子『大内裏大友真鳥』(享保十二年刊)など、朝敵大友真鳥討伐を題材とする多くの作品が作られた。この平群姓が真鳥をかすめたものというのとは以下のような根拠に基づく。一に、真鳥は諸書に「九州探題大友真鳥」と称する。これが太宰府の阿曾麻呂と類似する。太宰府と九州探題、ともに九州の統治を主要な目的とする役職である。特に、『大友真鳥実記』の大友真鳥は、太宰府と九州探題を兼務する。これは、太宰府を対外防衛のための機関として、九州探題とは分けて考えるもの。『大友真鳥実記』の時代設定は壬申の乱の頃。よって、九州探題は時代的に合致せず、太宰府の方が適当である。しかし、九州探題は古浄瑠璃

以来の真鳥の役職であり、これを外すわけにはいかない。そこで、折衷案として兼務という形をとった。この例は、太宰府と九州探題との類似を物語る。二に、阿曾麻呂は第四十条から、大邸宅の造営を行う。邸宅の造営というのは武烈即位前紀の、

大臣平群真鳥臣、專二国ノ政ヲ擅テ、日本ニ王タラント欲ス。陽ハリテ太子ノ為ニ宮ヲ営リ、了リテ即チ自ラ居ム。

との箇所を典拠に(6)、大友真鳥ものにおいて常に踏襲された設定である。『大友真鳥実記』巻十では、『古文真宝』「阿房宮賦」の表現を用いながら、美々しき宮殿の様子を描写し、浄瑠璃『大内裏大友真鳥』は、「大友真鳥民を虐げ課役をかけ、造り立たる金殿紫閣高広花麗の玉の台。九重を重ねし十二の門。九州の大内裡と人の耳目を驚かせり」と民への課役にも言及(7)、浮世草子『大内裏大友真鳥』では、

中国九国を手の裏ににぎり、驕奢日を追て超過し、太宰府を都と定め、大内裏を造り、四方に十二の間をたて、七十二の前殿、三十六の後宮、鳳のいらか天にかけり、虹の梁雲にそびへ、何殿何門軒をならべ、金銀珠玉を以て造りならべければ、朝日にてりかゞやき、咸陽宮の有様も是にやはまさるべき、そのついへ幾何ぞや、貢税を虐、官物を掠、人民の膏沢をしぼり取、積あつめて是をちらしつかふ事、砂を蒔がごとし。をのが身を帝王と自称し(中略)昼夜姪酒を楽みける、驕の程こそ危けれ

と、こちらも真鳥の専横の象徴として、具体的に描く(8)。『魁鐘岬』は「剩、鐘の岬に大内裏を造営し」(9)と簡潔に記すのみだが、設定は継承する。以上、細かに指摘できる類似は二点だが、九州の地で暴虐の限りを尽くす後半の阿曾麻呂の物語の発想に大友真鳥は大きく影響しているものと考ええる。

『本朝水滸伝』において、本来、悪人たちの首魁たるべき道鏡はその悪行が具体的に描かれることはない。対して、阿曾麻呂のそれ

は克明に描写されている。おそらくこの差異は、阿曾麻呂の人物造型に大友真鳥という先蹤があつたことが一因と考える。そのために阿曾麻呂の暴虐は具体的な形象を得ることができたのである。

## 二 秦金明の意義

次に秦金明の問題について扱う。秦金明は先に触れたように、第四十一条・第四十五条に登場する。第四十一条、租税を納めるために上つていた都から国元に戻った金明は、妻子から阿曾麻呂の暴政を聞き、阿曾麻呂の前に出て諫言する。諫言の際に、「君のために命もおしまじ、妻子をも思はじ」と言つたことから、目の前で妻子を殺される。また、第四十五条では、阿曾麻呂の改心を願つて、香椎の宮に籠もり断食する。七日目になつても改心の徴は見られず、助けに現われた姑を説得し、ともに祈願を続け、二人はそのまま餓死する。

この箇所について、木村黙老は「遺腹の子といふか、弟といふかの後あらせなば、遺憾なかるべきか。是は作者の手ぬかりとも思ふはいかが」とその無意味な死に疑問を述べており、また馬琴も「をさく／＼婦女子の情態に凝り固りて狗死をせし金明は、今古武双の愚人ならずや」と口をきわめて罵っていること、すでに前掲の風間論文が指摘する通りである。風間稿も最終的に、

あえてキャッチフレーズ風にいえば、『本朝水滸伝』の基本原理（「理義」と言つてもいい）は「エロス」なのだ。そして、そこには秦金明のような硬直した忠義の入り込む余地はない。まして、妻が犯されようとしても殺されても平然としている人物は、『本朝水滸伝』においては「無意味」なのである。なぜ「無意味」な人物を登場させたのかと問われると、私にも名案はなく、近世人と同じく「作者の手ぬかり」とでもしておくしかないのだが…。

と、金明と小説構想の関係については明確な説明をしていない。また金明については風間稿以前に、渡邊さやかが、「だが、その末期

の様をもって暗に阿曾丸の非道を強調し、討伐の意義を明確にしたという点で彼が作中で果たした役割は大きいと言えるだろう」との指摘をしている(10)。渡邊論文の主眼は典拠論にあり、金明の死の無意味さをどう評価するか、といった議論はないが、稿者の考えも渡邊稿の立場に近い。以下に詳述する。

金明登場以前、第二十五条から第二十八条にかけて、大伴書持率いる官軍と、橘奈良麻呂率いる白山の反乱軍との合戦が描かれる。光明皇后から、白山の反乱軍たちが、天下のための軍であることを教えられていた書持に、戦に勝利するという選択肢は与えられていなかった。書持は光明皇后に、

やつがれは勇なく才なしといへども、しろしめすごとく、大伴の家は、高知穂の嶽にありませし神の御代より弓矢をとりて皇辺に仕へ奉り、額には矢は立とも、背には矢を負はじと、一ツころに思ひとりて、いくばくの年月を、祖父の名立ずつかふまつり来れるに、此度まかり下りて、其軍にあたり候とき、いかばかりにもはからひふおふせて、御心をも安め奉り、天の下の民の苦しみをすくふべき方便、なきにしも侍らじ。

大伴の家は神代より帝に仕えてきた家であり、不肖の自分もその家名に恥じぬようしてきた。今度の戦でも、御心に適うよう、うまく始末をつけるつもりである、との決意であった。結果的に書持は白山の戦で、自死することになる。自死の理由は明確に語られないが、「我尚天の下のためにたやすく汝らにはかられたり」と語るように、わざと敵の術中にかかり、敗北の要因を作っているところからして、書持の本心は反乱軍の側にあった。それでも、反乱軍に加わることをしないのは、「かひなきやつがれにてさぶらふを、ゆくりなくみことのりをかうぶり奉り、家のほまれ、身のさいはい、何にか是に過ず」と語ったように、取り立ててくれた帝を明らかな形で裏切るような真似は書持の望むところではなかったと解するのが、適切であろう。いわば、書持の自死は、帝につくか、反乱軍の側につくかの葛藤を自らの死によって解決したということであろう。書持のこうした苦悩は、以降、兄大伴家持に受け継がれる。反乱軍に心情的には同調しつつも、積極的に関わることのなかった家持が、書持の死を契機に、その葛藤を継承するかたちで反乱軍に加わってい

くのが、この後の展開で重要な挿話となる。

しかし、この書持の挿話は、押勝たち反乱軍の正義を相対化する危険な挿話でもあった。押勝たち反乱軍が善であり、道鏡たち体制側が悪であるという二項対立的な把握が、書持の死により説得力をもちえなくなつたためである。書持の存在によつて、なぜ押勝たちは政権の内部にとどまり、自らの正義を遂行しないのか、といった疑問が読者の心に兆すこととなつた。

端的にいえば、書持の挿話によつて動揺した作品世界の正義のあり方を再び回復させるためにこの金明の挿話はあるのではないかと考える。金明は書持にせまられた選択のうちの片方を遂行した人物である（残りを遂行しているのが、押勝たち反乱軍である）。体制内に留まり、正統なやり方で自らの忠義を全うしようとした金明だが、第四十五条、香椎の宮で彼が姑に語つた言葉に、

おのれかくいのりて死なむとするは、妻子を殺されまいらせし恨を聞え奉るにあらず。さればこそ、其後もかれらがしかばねをはふむりをさめ、喪をつとめ、事を改め、もとのごとくみたちにのぼり、役の事もよくつとめて、尚其志はうしなはず、をりく諫めまいらせけるなり。是其恨をとゞめざる心なり。去にても御心なほらず、横さま事にふけりたまふを、とにかくにも我ちからはとげじと思ひ、此御神にいのり奉る。さらでも御しるしあらずは、此金明が命をめせ、と神にうけひてかくは侍り。

「とにかくにも我ちからにはとげじと思ひ、此御神にいのり奉る」と自らの無力を痛感し、神に祈る。諫言つまり言葉は無力である。状況を変える力はない。それを示すことで、押勝たちの武力による反乱を唯一有効な忠義のあり方として示すというのが、この金明の挿話の意味するところと考えれば、筋は通る。

### 三 「狗死」覚書

以上、風間論文を端緒に金明の死について見てきた、風間論文の「無意味な死」との指摘は作品の構成上の問題のため、前節の内容



で回答しえたものと思う。ただし、馬琴が「狗死」と呼んだのは、「古今無双の愚人」とあるように倫理的な価値観を孕む問題であり、これについても贅言を要するであろう。

「狗死」とは、『保元物語』中巻「為義最後の事」に、

かく有べしと知たらば、六人の子共前後にたて、矢種のあらん限り射尽て、討死して失せたらば、名を後代にあげてまし。さては、犬死にせんずるにこそ。

と用例が出る(11)。源義朝は投降した父為義の処罰を後白河天皇から命じられる。それを知った為義の述懐である。同じ、戦に敗れた末の死であっても、戦い抜いて討死にするのは「犬死」ではないのである。中世の軍記物語にとって「犬死」とは、状況的に無意味な死というだけでなく、高名をあげられず、不名誉に死んでいくことをさす言葉でもあった。これは近世でも同様であろう。熊沢蕃山の『集義和書』には、

云。喧嘩といへども、けなげに人をきりて切腹せむは犬死にあらず。

云。貴殿、いまだ犬死の理をしらず。怒火のためにおかされ、犬のかみあふごとくなれば、これを犬死と云なり。かみかちたるとても犬にあらずといひがたし。古人も、喧嘩は其中にて道理なる方勝者多しといへり。貴殿、無礼にして火気あるは、常に無理をたくはへたり。勝ことを必とすべからず。夫武士は君の干城なり。自然の用に備られたり。其禄を受けて私欲の火気にをかされて死するは不義なり。常に無礼なるは人道にあらず。戦場にて死する者何ぞ火気あらん。たゞ死すべき義ある故に死する也。君子の義死は理を尽し礼を尽して義の必然に死するなり。

とある(12)。旧友との問答形式。旧友は、喧嘩に勇ましく打ち勝つて後の切腹であれば「犬死」ではなからうという。これは先の名誉

の有無を問題にしているであろう。それに対し蕃山が答える、「犬死」とは義のない死をいうのだと。蕃山の考えが近世の通念であるというつもりはないが、少なくとも「犬死」とは状況的な無意味さのみをいう言葉ではないことをは確認できたように思う。では金明の死はどうであったか。これは典拠とは関係ないが、先にも挙げた『大友真鳥実記』に、埴稚郎という人物が登場する。彼は母姉の仇である大友真鳥を討つために、真鳥の臣下として反間の謀をなす。見事、真鳥の首を討ち、本懐を遂げた稚郎は、あろうことかそのまま切腹して死ぬ。これは評にあるように、

サレバ稚郎が真鳥ニ仕ヘシハ仇ヲ報ンノ謀ナレバ、初ヨリ計略ノ仕ヘニテ、真ニ君臣ノ義ニアラズ。然レドモ已ニ大禄ヲ食タルヲ以テ、真鳥ガ最期ニ殉死セリ。所謂其禄ヲ食デ其難ニ死スルノ義ナリ。

真鳥の禄を受けた以上、真鳥とともに死ぬのが道理としたためである。『真鳥実記』の評は、稚郎の忠を晋の予譲に越えるものと激賞する。金明もこの理を重んじる。第四十五条で、姑の説得に対して金明はいう。

唯今のたまひきこえし事どもは、我もわきまへしらぬにはあらねど、妻子も是まで君の御めぐみにこそ、命はたちたれ。さる命の親の御手に死せるは、御恨みも更に待らず。老婆の君まだ嬪におはすをもて、我やしなひをもて、是までの御命をたまたせたまふ。さるやしなひは、即是君の御やしなひなれば、其御報ひを仕ふまつらせずは、いけるかひもおはさじ。

阿曾麻呂の禄を受ける以上、阿曾麻呂のためにおのれを含めた家族の死も辞さないというのは、先の蕃山の論に照らし合わせても、十分に理義に適う。無論、これを無意味な死と見る立場も、近世では珍しいものではないだろう。一例として、洒落本『跣婦人伝』に「伯夷叔斉が蕨とつて飢死だ偏屈より、比干、子胥が無分別、尾生がばか律義、いづれも犬死の取沙汰」とあるものを挙げる。このように、諫言の末の死を「犬死」ととらえる立場もある。どちらが支配的な考えかまでは断じられないが、少なくとも金明の死は一概に無意味

な死といえるようなものではない。また、おそらく作者もそうに考えてはいない。

前章で述べたように、『本朝水滸伝』の構想を支えているのは、「成り上がり」を憎む、落魄者たちの暗い情熱である。彼等のもと朝廷の旧臣でもあるから、これは同時に、旧恩に報いることへの情熱でもある。金明は落魄の憂き目には遭っていないが、その志は阿曾麻呂の旧恩に報いることにある。そのため阿曾麻呂に武力で立ち向かうような展開にはなりえず、押勝たち一味に合流はしなかったが、彼の諫言という行為は押勝たち反乱軍と同じ論理に裏打ちされている。その意味で、『本朝水滸伝』の主題との照応も窺える。

おわりに

『本朝水滸伝』第九条において、道鏡を帝位につけるとはもつてのほかという宇佐八幡宮の神託をありのままに奏した和氣清麻呂に対し、孝謙帝は、「天皇も御心の外にておぼしわび給ふ様なり」と、残念な様子を隠さない。臣下の言葉だけでなく、神の言葉すら帝の心を動かすことはできなかった。そういう意味で、押勝たちが、朝廷に反旗を翻す根拠はきちんと示されていた。それが、大伴書持の死を描いたことで、朝廷の中にも真の忠臣の存在すること、体制内の忠義と、体制の外の忠義の衝突の結果として、忠臣があら命を失うかもしれないことが明らかになった。そこで、この二つの忠義に作者はきちんと優劣をつけねばならなくなった。それが、太宰府の阿曾麻呂の暴虐と、秦金明の忠死であった。以上が本章の趣旨である。

このように、秦金明の挿話は、大伴書持の死による作品内の秩序の動揺に対処するものとして、置かれているものと考えられる。作者が、金明の挿話を配したのは、書持の妻との別離と、自死が作中屈指の名場面だったからであろう。作品内の秩序の動揺は激しかった。

木越治は、『西山物語』の「よみの巻」の表現について言及し(13)、

こうした纏綿たる情緒を描くことにおいて、綾足は非常は才能を発揮する。『本朝水滸伝』でも、後編第二七条において、大伴家

持の弟書持が白山にこもる反乱軍平定の総大将に任ぜられたあと、光明皇后に義は反乱軍に存することをさとされて、ひそかに死を覚悟しつつ出立の前夜、妻佐保の郎女と歌を読みかわす場面や、同第三八条の不破内親王と塩焼王を葬るシーンなどにも同様の情緒を感じとることができ、綾足の小説作品では最もすぐれた部分と評してよいと思われる。

この書持の妻との別離や、また第卅八条の、不破内親王と塩焼王の葬送の場面を『本朝水滸伝』のすぐれた箇所としてとりあげる。しかし、これらの場面は、馬琴の批評では、必ずしも高い評価を与えられていない。書持の苦衷は、

この条も、文面に就てはよく見られたり。しかれども、書持がかねて討死を期したるもすまぬ事也。押勝等は勅勘のものなれども、欲する所、道鏡を討滅して、世を安らせんと思ふ忠臣也。よしや勅命也とも、それを討夷げんは書持が願ざる所なれば、かねてより討死と思ひ定めしはことわりあるに似たれども、とてもかくても、捨んと思ふ命ならば、などて道鏡に近づきて、一刀に天下の大害を除んと欲せざるや。この書持も思慮足らず。辞別の朝、婦女子の情態に似たるは、長袖なればにや。

公家だからか、まるで婦女子ではないかと難ずるのである。また、第卅八条についても、

和漢となく稗史の見るべきものは、勸懲正しくて蒙昧を醒すに足るよしあれば也。よしや趣向は巧也とも、勸懲正しからざれば、見るに足らず。この物語に載したる不破内親王・塩焼王・主僕のうへは、始より終まで勸懲正しからず。

「勸懲正しからざれば見るに足らず」として斥けている。馬琴の言を後期読本全体に敷衍してよいかについては、慎重でなければならぬが、少なくとも、後期読本には、「勸善懲惡」という観点から綾足の描いた情緒的な世界を排除していく論理を持っている。

対して、第一部第四章で触れた通り、綾足は「物語」として『本朝水滸伝』を書いている。『源氏物語』がそうであったように、「物

語」は本来、勸善懲惡的な文学観と必ずしも相容れる性質のものではない。また綾足の立場としても、第一部第二章で触れた通り、綾足の注釈は、勸善懲惡的な文学観と、物語の評価を、ある程度切り離すことができている。再度、『女誠ひとへ衣』（明和八年―一七七二）刊を引く。

さは女の罪咎のおもき、此あやまちに過たるはなし（これは女のをとこふたり見てふ事のみだれをいふなり）。さるは世に物語のあるとあるも、おほくは此みそかごとをつゝみなくかいのせし。こは後のをみなだちのいさめにもとかいつけはべらむが、かいざまいとなまめきて、人の心のうごくべき筋どものをかしくもあはれにもうち見ゆれば、これをさる罪咎なる事とはおもはで、おのづからうきたる心におもひよるはしとも成行まし。殊更源氏の物語は、むすめだつ人には見すまじき文なりと、ある人のたまひける、ことわりぞかし。又落窪の物がたりは、いかにも女の鑑とも教とも成べきものなり。

勸懲はともあれ、物語が、「人の心のうごくべき筋」を「をかしくもあはれに」描くことに評価を与えている。綾足自身こうした認識に基づき、物語としてこれらの作品を描いている。綾足の読本の達成も同じくこの人の心の動きを「をかしくもあはれに」描く点に認めてよい。

## 注

- (1) 静嘉堂文庫編『本朝水滸伝後篇 由良物語』（国立国会図書館管理部、一九五九年）所収「本朝水滸伝を読む并に批評」。
- (2) 前掲『本朝水滸伝後篇 由良物語』所収「木村黙老・滝沢馬琴後篇批評」に拠る。
- (3) 『日本文学』第六一卷第一〇号（二〇一二年一〇月）。
- (4) 『新日本古典文学大系四四 平家物語上』（岩波書店、一九九一年）。

- (5) 注(4) 脚注など。
- (6) 『新訂増補国史大系第一巻下 日本書紀後篇』(吉川弘文館、一九六七年)。
- (7) 『叢書江戸文庫九 竹本座浄瑠璃集「二」』(国書刊行会、一九八八年)。
- (8) 『八文字屋本全集』第九巻(汲古書院、一九九五年)。
- (9) 『菅専助全集 第二巻』(勉誠社、一九九一年)。
- (10) 『本朝水滸伝』試論——秦金明の最期に関する一考察』(『対話と深化』の次世代女性リーダーの育成 魅力ある大学院教育イニシアティブ、二〇〇七年三月)。
- (11) 『日本古典文学大系三一 保元物語 平治物語』(岩波書店、一九六一年)。
- (12) 『日本思想大系三〇 熊沢蕃山』(岩波書店、一九七二年)。
- (13) 『小説の革新』(『岩波講座日本文学史』九、岩波書店、一九九六年)。

## 終章

以上の各章を通じ、綾足の読本が、長編小説の構成方法の上でも、一定の達成を見せていることを述べた(第二部第一章・第二章)。また、片歌の背景を述べ(第一部第一章)、『本朝水滸伝』の享受を追う(第一部第四章)ことで綾足が古語で小説を書く背景にどのような意識があつたのか、その一端を明らかにした。一つは初学者への啓蒙の意識であり(第一部第二章・第三章)、一つは雅の意識であると想定できる。綾足にとって和文を書くことはそのまま雅の意識の反映であつた(第一部第四章)。また、この雅の意識は、太平の御代に合致する文学を志向する意識と言い換えることも可能である(第一部第一章)。

綾足の和字は『伊勢物語』研究や(第一部第二章)、小本の歌書の出版(第一部第三章)などに初学者向けの啓蒙的な性格を見る他、実作との近さが指摘できる。

また、綾足の物語研究は、賀茂真淵などのそれに比べ、勧善懲悪的文学観を相対化できている(第一部第二章)。綾足の読本は、馬琴によって「勧懲正しからず」と批判されたが、物語の影響を強く受けた綾足の読本(第一部第四章)は、綾足の物語観と通底する部分があり、勧善懲悪的な文学観から独立した作品世界を作っている。そして、その中で人の心の動きを「をかしくもあはれ」に描こうとする点に特色がある(第二部第三章)。

太平の御代にふさわしい文芸のあり方をひたむきに希求し、教育啓蒙につとめた綾足の一面を明らかにした。学識などの点で不備も多いが、彼の和字は一定の達成を見せており、また独自の性格をもつ。この点で綾足の活動は、和字が当時の文芸にどのような影響を与えたのかについての一つの好例として意味があるものである。

本論文は綾足の和文体読本に注目し、古語を用いた創作の背景を追つたものだが、綾足のように古語を使って文芸をものした作者は、近世にも数多い。それぞれの古語に対する意識のありようには微妙な濃淡があるものと考えるが、本論文の議論はそこまで及ばなかった。この点については今後の課題としたい。





## 初出一覧

### 序章 新稿

#### 第一部 綾足の和学の諸相

第一章 片歌説の完成——『とはしぐさ』考—— 新稿

第二章 『伊勢物語』研究——『旧本伊勢物語』と『古意追考』—— 新稿

第三章 歌書出版の享受——『増補歌文要語』と『新撰はし書ぶり』——

\*原題『増補歌文要語』と『新撰はし書ぶり』（『北陸古典研究』第二七号、二〇一二年一月）に付表を追加。

第四章 『本朝水滸伝』の享受——改題本を端緒として——

\*原題『本朝水滸伝』改題考（『近世文藝』第九五号、二〇一二年一月）に\*原題「韓国国立中央図書館蔵『本朝水滸伝』について——『本朝水滸伝』改題考補遺——」（『近世部会誌』第七号、二〇一三年三月）を併せて再構成。

#### 第二部 和文体読本の研究

第一章 『西山物語』考——分裂する語り——

\*原題「分裂する語り——『西山物語』の構想——」（『金沢大学国語国文』第三三号、二〇〇七年三月）

第二章 『本朝水滸伝』考（二）——反復される主題——

\*原題「反復される主題——『本朝水滸伝』の典拠と方法——」（『総研大文化科学研究』第五号、二〇〇九年三月）

第三章 『本朝水滸伝』考（二）——二つの忠義——

新稿

### 終章 新稿

※旧稿については発表後の研究成果も取り入れ、随所に改訂を施している。